

敵の強きをのみ説て我が軍威を損こと勿れ我三萬の軍を領し遊撃の任を受堂一人の函輝を恐れ
 説客の舌を借んや林孔が曰將軍自己の勇を恃み敵を侮り無謀の師をなし玉ふ事勿れ事一隨で懼
 れ策を用ゆとい聖人の金言なり惟説客を用ひて敵の虚實を探りもし降すんば其時謀略を定め
 て戦ひ玉へと尙顔を犯して諫けるを阿克商少しも聞ず自ら三軍を整點し大星を隨で進發す函
 輝の鞭の遊撃軍三萬騎よて向ひよし兼て問者を以て探り知れば精兵を帥ひ西川に出張し輜三
 里の大河の水源をせきとめて平原の如くおし備を立て待かけたり程なく阿克商が前軍一萬騎岸
 よ添て陣を張函輝が六千騎川を隔て喊を叫と發す北軍も喊を合せとも虚實を伺かねて敢て進ま
 ざる所は阿克商の二陣の八千余騎を帥てさたり川面を見わたす川波最深くして平原は異なら
 ずいざや馬を入よと指揮し自ら轡を放ち騎入れれば二萬の精兵我劣しと先を争ひ流しけり函輝
 の手練の精兵を捕へ差取響詰矢を放つ其箭雨の降が如くなれば先は進む勇兵のとなつて射落さ
 る阿克商も甲は矢を多く請たれと堅甲なれば裡かぐまでいなければ劍を抜て飛來る矢を切拂ひ
 馬を策て進み行林孔の後陣は在けるが阿克商が身は過ちあらん事を恐れ急進先陣へ馳
 行無理に克商が馬の轡を執て東岸へ退んとそれとも連々と涉り來る味方の勢は遮られ願ひ引
 退く事も能はず前を拂て氣を焦燥所は敵方の一聲號炮響や否忽上流より雪山のことら高浪逆

卷下る是函輝が謀計よて號炮を聞と齋く堰留たる塘を切落けるゆゑ俄は大水至れるなり健軍大
 は驚ら馬を回さんとして石を蹴り水は濁り浮つ沈みつ流れ行阿克商林孔も魂を消し混鞭打
 て引回さんすれと水勢箭よりも疾巨石を流を事鞍を轉する如くなれば遂は兩將も馬の足をど
 ちれ瀬を下る大瀾は驟れて底の藻屑を成よける其共二萬の兵も殘なく水に押流されければ屍
 の川を埋むばかりよて夥しといふも疎なり函輝の十分の勝利を得捷喊を上て引退ぬ健軍の後
 陣の目下は大将の溺死するを見れとも水勢勵しくして救べき方便なければ家を喪る狗の如く
 鈍々として逃回りけり

○ 函輝使大宛島一

且説函輝の阿克商が軍を率として大星を回りし後五百騎の兵を帥て思明州に至り國姓爺一賜
 して百臣の計策を效て阿克商が二万騎を溺没しは是をかしながら阿克商已が勇は誇り輝
 をも用ひざるは依り韃の先鋒安大人の是と等からを惡來が多力ある上智もまた深く百姓を安撫
 し秋毫も犯さざるは依て小壘小壘の郡主志を韃に傾け窮は内應せる者少から況や山野み
 亦北軍は歸順し惟南崗ばかりの王の鎮玉を以て百姓髪を剃す今健軍の患とする者の思明のみ
 あれが如何も去て攻廉んとおもふよや北軍よりの援兵南京よりの人差して直に福州に至り福東南

の風吹とよ敵の兵船着岸せざる日なし然ハ味方も兵糧矢玉を十分貯へ根を強して戦ハ
 九折叶べからず臣筋よおもふ大宛島も云の紅夷近年貢物を思明へ献らば老鄭芝龍の
 納メ背けり王是を名として紅夷を征伐し大宛を奪て島吏を居糧米火薬を運送させ玉ハ大い
 軍用の助を乞すべし抑臺灣中華の正南よわたりて周回百餘里土肥地暖よして五穀年々二
 登る草木盛され諸民等農作する糞土を川ひされともよく滋養とぞ又紅夷の賈船東南の貨
 物を聚め日本へ渡りて交易す其利潤豊べからず始紅夷彼島を取し時ハ四五百人は過ざりし今
 已ハ五千余の戸口あり王もし一度征せば紅夷おとるさ故さよ因て海税を貢ぐべし然して後親
 音信を通じ人を往來させて島中の地理を善察せしめ其熟するを待て不意に征伐し彼島を奪ひ玉
 へ國姓爺大い悦び卿が謀究てよし余も紅夷が約を變じ海税を斷たるを憤る事久しけれハ
 一度其罪を糾さんとおもへとも打頼て軍務追なく且皇爺の消息未だ知されハ是彼よ就て捨置
 り卿先二万騎を帥て臺灣は向ひ不信の罪を責て海税を索よ那もし事を左右ハ托て擬議せば右も
 左も卿が意に任せて是を計れと命す西輝領諾して頼て兵船白艘を購ひ西北の風を占へ彼を
 解思明をはなれて船を走程ハ海上三百里を安々渡りて壬辰二月廿五日の暮かたハ澎湖島とい
 ふ所は着この地より大宛まで纔ハ三十五里なれば直ハ渡るべき思の外逆風吹つるハ漸月朔

日は大宛島は船寄ぬ函輝下知し數百挺の石炮を一齊に放たせければ其音百千の迅雷の震が如く
 海底に響きけるよ紅夷の島人等大い駭き是必然海賊の襲たりしよこそと心得亟に兵艘を
 翻ハ鉄炮器械を用意して函輝が船の周廻を圍み鉄炮を霰の如く放しかけ聲々よ響れとも言詰通
 せされハ何事をいふとも幽分がたし函輝の思慮深き者なれば兼て紅夷の譯官を船中は召連ける
 り其者よ命に如斯々を言よと合す譯者領辱して樓櫓より登階を以て高聲に兩島人等借問
 我徒ハ是明の大將軍鄭芝龍が部下の者なり此所よ來ること別の子細よあらず鄭老爺かねて卿等
 旗を興へ海寇の難を防がせしより變船今よ於て恙なく久く枕を安んずる事皆是鄭老爺の威風
 凛々ところなり然るよ近年爾が輩舊恩を忘却し協約よ背き海税を貢ず故よ男國姓爺其罪を
 亂ん爲る臣函輝を此地よ來らせ玉ハ爾等早く貢物を献ずて協約の信を表し昔日の罪を謝せよと
 呼ハる紅夷も通詞を以て答て曰我が此島の海税ハ明の天子よ命じていまだ鄭芝龍ハ其罪を
 去る甲中の變より明朝已に亡ハ北朝の王いまだ海税を徵そ余が島中今ハ本國阿蘭陀よ屬す賈船
 の往還何の憚か有べき函輝また通辭を以て諭て曰爾等いまだ文字を知り爾が船よ立る旗の上
 面ハ飛虹將軍を記せしハ則ち鄭老爺が號よして四海の海賊よく其名を覺へ飛虹將軍の旗を見れ
 ば怕て敢て寇を乞さず是爾等が安寧を得る所以あり我が主國姓爺ハ明帝の國姓の一字を添

あらし皇帝を守護して北隣と威を争ひ勢ひ破竹の如く福泉思明の諸州を回復せし爾等拒て海
 税を獻せんべ一島の人民一人も残す屠殺せしといひせ函輝自ら樓櫓の上より顯れ出眼を瞋せ
 戦を横たへてぞ睨ける其身材九尺許にして兩眼鏡の如く半白の虎須針を植たる如く逆よ立さ
 ながら天神のごとくあれ紅夷大い恐怖し退いて商議をなし税金數百兩を捧て和を乞函輝が
 謂余の延平王の使者たり島主我より從て思明の本府より往自ら海税をば獻つれもし然らざれば余
 敢て船を退じといふ紅夷も理の至極みれば最と信伏し函輝を城中へ請上恭々しく款待を部
 下の徒のその毒害を怕るゝと雖函輝の物の屑とせす飽まで肉を喫し酒を飲で辭する所を
 し斯て紅夷の順風を占へて四月中旬に樓船二艘を獻し税金玉帛を具へ函輝が船は隨ひ波濤を
 凌て思明より着岸す函輝陸より上りて國姓爺は竭し有し頗末を語れば國姓爺大い悦び重く函輝
 が功を勞ひ紅夷を船に留て種々饗應を時々函輝の國姓爺および五府の將軍六部の副將と商議し
 て曰我大宛に至り物色するは島の周廻百里といへども實は三百里余も有ぬべし山秀水清風土
 甚だ佳思明は比せば三倍するの地あり二十万の軍彼所より屯し時を待て恐らくは萬全の策な
 るべし周全斌が謂函公の論理ありといへども王もし彼島を奪ひなば士卒逃散の處を得敵は臨
 む時命を捨る事を思はず英氣自然騰んか戴健翁天祐が曰此議恐くは迂遠只紅夷の茲より來る

こそ幸なり悉く是を誅し虚は乗けて大宛を奪ひ根を固して後北兵と雌雄を争はんこそ宜る
 べし國姓爺衆議を聞て曰諸將の言各々理あり但し今島夷過を悔海税を納ぬ然るは是を誅し其
 島を奪ふの不仁の至りよて我是を爲し忍びて函輝が曰王何ぞ婦人の仁を思ふて大事を廢せんと
 去玉ふや古語より大行の細謹を不願とこそいひいへ只此時を失ひ玉ふ事なかれと諫めけるよと
 國姓爺漸くは承伏す函輝悦び日を擇て紅夷は資物を納ん事を促す島主其意を得て金二千兩銀皮
 白張珊瑚の筆架琥珀の盃器々絛毛氈等の産物を貢す函輝伴と怒て曰夷主何ぞ約は背や甲申の
 年より海税を缺こと今壬辰に至て九年よおよべり正一萬八千余を出すべし然らざんば飯棹を
 許さすといふよぞ紅夷大い駭き偕に函輝は欺かれけりと後悔を嘯とも反らば百般に謝けれ
 ども函輝曾て承引せむ遂に悉く獄舎より下す國姓爺の願て艦し諸將を令して曰余が軍二十萬
 大宛を征し直よ東して寧波に至り江浙を恢復し南京の虛を伐ば必然大功を立べしとて便ち叔父
 鄭芝豹を留守とし函輝を總督として三萬の兵を授け鄭芝豹を扶しめ其身は數千艘の艦艦を泛め
 鄭の爲よとて島夷の通辭および島主ならびは頭目を船中よ藥を隠し纜を解て思明州を出帆す
 ○國姓爺定大宛島
 斯く順風は帆を十分よ孕せ乗行はとよ巨海の流を截がとく百里が程の檣の影ならび連り影

し事雲の如し借海路難なく澎湖島に着此所を本陣と定め八月十日の朝潮を考へ臺灣の淺みを潮に乗して乗越直は濠の岸よりいたり賊を動と發けるも紅夷大い驚かから兵船を潛出して鳥炮を放こと雨の降が如しされとも思明の船の布幕にて構みたれば鉛弾すべり落一人も傷を蒙る者なく却て霧の挾間より箭詰彈詰矢を放ち島夷を射殺こと數しらす戴健其時船の舳は出日本刀を梟と振縛り置たる島主を曳出して一刀に斬て兩段となす島夷是を見て打伏啼泣すること楳の子を襲がごとし然るも身軀六尺ばかりなる婦人髪は赤熊のごとく面の雪よりも白きが紅の衣の上は金皮の甲を穿ち濠際より潮の波の上を歩み來るも人々怪み彼の如何と尋れば道辭の夷が曰彼女島主の夫人にて力よく千斤を揚踏般の武技は遠し島中無双の勇婦なり將是履たるの浮沓とて海中を走ること陸地を行異あらずと答思明の兵これを聞て驚嘆する所は又續て全身墨の如き童數百人海底までび入ぬ國姓爺下知して曰彼等の國の無奴は水底を行事魚の如しと聞所餘水賊の利あるま七陸へ上りて盛よせよとて一萬の和兵を先せし殘る大軍退々陸へ上る彼夫人の島主を斬れたるを恨みいかり國姓爺が船を目がけ飛鳥の如く歩みくる船に殘る軍卒鎗を擧て是を刺んとするも忽ち其鎗を奪ひ軍卒を突殺し叫んでかゝる蕭天附林勝士卒は下知し只矢の下に射て取よと鎗を翻へて雨の如く矢種を吝す射たりけるも夫人少しも怕るゝ色なく鎗を揮て箭を拂こと秋風の水葉を散すが如く一技も身よりけず其早業凡人業とい見えざりけり國姓爺是を見て冷笑し艶しき女が動止かな大丈夫一婦人を討んこと長者氣なしと雖渠が望み任せ島主と俱に九泉の鬼となして得させんと偃月刀を擧てわたりあふ夫人鎗をからりと捨打込偃月刀を身をかわして柄を掴み濠を海中へ曳入んと力を極て曳といへども巨石をだに撃碎く國姓爺が神力争か婦人の敵すべき却て近々と船際へ曳寄せられたり此時一刀に斬り斬べかりけるが國姓爺一點の仁心を發し掻擲で虜となす時軍艦俄に動ぎ出し已に覆んとするも士卒等大い驚き何事と見ると岷崙奴數百人船底を押し下し居たり國姓爺打ちわらひ渠們わ無智の畜生なるバ力のみ強しと雖論するも不足殺も無益の殺生なり打捨かきで陸より上り大門を攻破よと指揮す士卒承はり盡く陸より上り大門へ攻寇る此より以前陸より上りし思明の軍兵大門を百重千重に圍み曳々聲して攻けるも紅夷の兵と命を限り防禦し鐵砲を雨霰の如く打出しければ明兵是が爲に傷死する者數ぞら屍の門塙と比しく疊れりされとも大軍おれば事とせす味方の屍を楯に被せて攻結々々々なる内追々新兵加われれば今紅夷も力疲て見えたる所を戴健翁天祐夢仲等六斧を以て門の扉を打程も忽ち滅裡々々と碎け破れぬ紅夷等心ばかりの猛しといへども未明よりの戦ひ未の尅よふまで兵糧を遣され腕腕力究りて防事能

し事雲の如し借海路難なく澎湖島に着此所を本陣と定め八月十日の朝潮を考へ臺灣の淺みを潮に乗して乗越直は濠の岸よりいたり賊を動と發けるも紅夷大い驚かから兵船を潛出して鳥炮を放こと雨の降が如しされとも思明の船の布幕にて構みたれば鉛弾すべり落一人も傷を蒙る者なく却て霧の挾間より箭詰彈詰矢を放ち島夷を射殺こと數しらす戴健其時船の舳は出日本刀を梟と振縛り置たる島主を曳出して一刀に斬て兩段となす島夷是を見て打伏啼泣すること楳の子を襲がごとし然るも身軀六尺ばかりなる婦人髪は赤熊のごとく面の雪よりも白きが紅の衣の上は金皮の甲を穿ち濠際より潮の波の上を歩み來るも人々怪み彼の如何と尋れば道辭の夷が曰彼女島主の夫人にて力よく千斤を揚踏般の武技は遠し島中無双の勇婦なり將是履たるの浮沓とて海中を走ること陸地を行異あらずと答思明の兵これを聞て驚嘆する所は又續て全身墨の如き童數百人海底までび入ぬ國姓爺下知して曰彼等の國の無奴は水底を行事魚の如しと聞所餘水賊の利あるま七陸へ上りて盛よせよとて一萬の和兵を先せし殘る大軍退々陸へ上る彼夫人の島主を斬れたるを恨みいかり國姓爺が船を目がけ飛鳥の如く歩みくる船に殘る軍卒鎗を擧て是を刺んとするも忽ち其鎗を奪ひ軍卒を突殺し叫んでかゝる蕭天附林勝士卒は下知し只矢の下に射て取よと鎗を翻へて雨の如く矢種を吝す射たりけるも夫人少しも怕るゝ色なく鎗を揮て箭を拂こと秋風の水葉を散すが如く一技も身よりけず其早業凡人業とい見えざりけり國姓爺是を見て冷笑し艶しき女が動止かな大丈夫一婦人を討んこと長者氣なしと雖渠が望み任せ島主と俱に九泉の鬼となして得させんと偃月刀を擧てわたりあふ夫人鎗をからりと捨打込偃月刀を身をかわして柄を掴み濠を海中へ曳入んと力を極て曳といへども巨石をだに撃碎く國姓爺が神力争か婦人の敵すべき却て近々と船際へ曳寄せられたり此時一刀に斬り斬べかりけるが國姓爺一點の仁心を發し掻擲で虜となす時軍艦俄に動ぎ出し已に覆んとするも士卒等大い驚き何事と見ると岷崙奴數百人船底を押し下し居たり國姓爺打ちわらひ渠們わ無智の畜生なるバ力のみ強しと雖論するも不足殺も無益の殺生なり打捨かきで陸より上り大門を攻破よと指揮す士卒承はり盡く陸より上り大門へ攻寇る此より以前陸より上りし思明の軍兵大門を百重千重に圍み曳々聲して攻けるも紅夷の兵と命を限り防禦し鐵砲を雨霰の如く打出しければ明兵是が爲に傷死する者數ぞら屍の門塙と比しく疊れりされとも大軍おれば事とせす味方の屍を楯に被せて攻結々々々なる内追々新兵加われれば今紅夷も力疲て見えたる所を戴健翁天祐夢仲等六斧を以て門の扉を打程も忽ち滅裡々々と碎け破れぬ紅夷等心ばかりの猛しといへども未明よりの戦ひ未の尅よふまで兵糧を遣され腕腕力究りて防事能

へそ遂は持口を捨て敗走す明兵の雲霞の如く城内へ亂れ入當るを幸は斯は落す然る所へ國姓爺軍使を以て高聲は曰せけるは紅夷原我を仇なま今國家の爲已事を得ず這島を奪ふといへども猥りよ夷族を殺害せる事勿れ降る者ハ許し逃る者ハ逃せよと觸させければ諸卒其意を得逃る者ハ其儘よし拒敵者のみを討取ける是は依て紅夷辛き命を助かり妻子を具して船は乘隨意は落行けり又島夷の内は泉州の逃民多く有けるが是們ハ皆盜を脱戈を伏て降を乞斯て國姓爺兵を班て勞を休めまめ島主の夫人の縛めを免し譯事を以て利害を説せ本國は版るべくんべ船を以て送りなん將味方は降ば女ながら重く用ひ一方の將帥とをべしと説せければ夫人一目見るより伏轉て泣哀す只島主の屍を見ん事を乞これ依て其軀を尋出し與ければ夫人一目見るより伏轉て泣哀終自ら舌を咬切て死を三軍是を見て甲を沾さるるハなし國姓爺其貞操を憐み島主と棺を同して埋葬し一社の神は祠りけり次の日國姓爺城中の倉庫を檢るよ米穀數十万石金銀絹帛山の如く積貯たれば大い悦び兵卒は儉賞を宛行ひ戴健林勝以下は命じて城を築せ工作を始む茲は夷の中よ一の大なる洞ありて梟鬻數百人其中は穴居して在戴健是を見出し譯事は問て曰梟鬻ハ力強く身輕と聞渠等を城普請の武役は常なば如何通辭が曰渠們原蠻國の山溪は生ず紅夷是を捉へ奴僕として家は畜渠火にて養たる食を喫べ大い吐瀉る是を換腸と号多くハ死亡すもしよく

番得れば山は入て犀角象牙を取浪は入てハ珊瑚琅玕をとる一度主僕の約をかしてハ死すれども變せ若他國の王は獻する事あれハ食を斷て死すか、れば歩役は用ひんとし玉ふとも渠敢て順ひいまじと曰戴健是を問て嗟嘆し嗚呼梟鬻先王の道をしらす聖賢の書を讀むといへとも忠義を守る事斯の如し是們や未だ學びずといふと雖も我ハ學びたりといふべき者なり我が大明の人民梟鬻奴が義心の半だも具あべ天下を韃賊の爲よハ奪るまトきものを天朝の恩祿を食菜花を極し大臣國家の難は隨て髮を薙胡服して虜夷の爲よ腰を屈せる事禽獸もだも如ぞと怒涙は袖を漫し立回て國姓爺は斯と告ければ國姓爺も梟鬻奴が義心を感じ敢て害を加へず部下の下官等も令を傳へもし梟鬻奴を傷或ハ害する者あらば決して死刑を免さじと觸わたしけるよより士卒等も敢て梟鬻奴を犯さ者なし是しかながら梟鬻奴が義心の徳なりけり

○鄭芝豹 反而降三韓將一

却説思明よハ國姓爺が叔父鄭芝豹留主たるよし北朝へ聞えければ招撫使安大人何卒此處は乘し思明を攻取んと思惟を疑しけるよ或者告て言けるハ降將黃護龍ハ原泉州の産よし鄭芝豹ハ莫逆の友たり渠は謀を授けて降を勸めし玉ハ思明ハ及よ血塗すして取つべしと曰よぞ安大人大い悦び即時は黃護龍を招きて曰足下鄭芝豹との舊友あるよし聞り若渠を勸て降らしめ

俱は重く用ゆべしと曰ければ護龍大い悦び一議も及ばず承引し暗に思明州に至りて城門
 を叩く監卒是を咎めけるは護龍が曰余の鄭將軍の舊友黃護龍あり尋問せん爲る來れり此旨を通
 せよ士卒聞て鄭芝豹は斯と達す芝豹不審ながら舊相識の護龍され即時城中へ迎へ入しむ黃
 護龍別來の情を述て後曰けるは足下何ぞ天の期を察せしめて獨思明を譲り兄弟の義は背くや今
 鄭老爺北京に賓客とあり多く清王の恩を感じ恒に足下等叔姪が攻戰の爲る軍兵を困むるを歎き
 玉へり早く志を改め和を乞て天下の安謐を量れ芝豹が曰く我の明國の臣何ぞ虜王に降るべき護
 龍が曰鄭老爺すら既清王の楸智天の縦せる君にして萬民を撫むる子の如くあるを見て信伏せ
 り然るは足下尙清王の弓を彈べ清の仁慈あるも一朝怒を起して鄭老爺は死を賜ふまじらざる
 老然らば是兄は敵するは比しからざるや且國姓爺勇ことも繼一州の勢を以て争か天下を帥ゆ
 る清は勝利有べき請よく察して迷ふ事勿れ芝豹が曰余もし降べ清王何の封爵か有べき護龍其時
 袖の裡より一鈕の金印を出し見せて曰く是即ち安平伯の封にして泉州總督の印あり足下も降
 べ此印を授くべしとの王命なり芝豹は元來多欲の性なりければ今紫泥金印を見て忽ち貪戾の意
 を生じ密に耳語て曰斯の如くなれば余清朝へ降るべし然とも函輝の驍勇の老將にして其心敢て
 量かたし足下先回りて假に軍勢を差向思明を攻る体をなしはへ余其間を將卒殘す一味させし

函輝防戦せんとせば我内應して北兵を城中へ引入れ驟く函輝を討取速に降るべしといふも護
 龍悦び猶委く謀計を示し合せ別を告て回りけり是より鄭芝豹の時々は城中の兵卒をかたらひ專
 ら北軍の號炮を待函輝の来る、事を夢も知る大宛の消息を如何と心案し時正は冬の初なれ
 ば殊に海風はげしき地ゆへ火令を嚴にし邏卒を叱り厲し用心を專一に然るは國姓爺が妻の
 林氏密に告て曰去ぬる頃城中へ一老將きたり鄭叔爺と密談數刻にして回りけるが其後芝豹叔々
 夜毎寐玉はず將卒を聚て何事や商議し玉へりは何故ぞと問函輝眉を揉め訝りて曰賢夫人此事
 を決して他は告玉ふ事なかれ余よく是を探り聞へしとて密に探り聞ふ來りし者の黃護龍なりと
 告る者あり函輝大いに驚き渠の鄭芝豹が舊友にて今清朝へ降れり察するは渠來つて芝豹は降を
 勸めしゆえは老賊國を買らんとする成べし如何もして證據をとらへ芝豹を誅せんものと専ら其
 隙を窺へども城中の士卒は皆芝豹の説賺されて清朝へ降らんとおもひければ敢て函輝は心を許
 さず是は因て數日を空しく送る所一夜三更の頃邏卒遠しく走り來り俄に海上に敵船多く漕
 つらね篝火夥しくいと報す函輝甚だ驚き事早く茲に至れりとして急ぎ士卒を點檢するは早抜
 らる落行て百騎の過す惘果て有ける所へ國姓爺が妻の林氏嬰兒錦舎を抱きて喘々泣きたり鄭
 叔父已に妾と錦舎を害せんと劍を擧て來りしを辛して遁れ來れり是は何とすべしとて雨々と泣

伏けり函輝是を聞て怒氣天を衝毛髮 悉く逆立臍れる眼も血を瀧さ 晉て曰芝豹老賊惡逆何ぞ
 茲も及や見よ今擲殺し天罰の速あるを見すべしとて錦舎を抱き林氏を扶て城の後へ走り
 往蘆間も繋きたる沙船の裡も母子を忍べせ走回て甲冑を披き掛長鎗を提 鄭芝豹を刺殺さんと
 眼を賦て尋る所も函輝が妻の張氏四才もある男子を抱き逃來て夫も隣と行合是の我が夫か何國
 往玉ふ我身の如何あるべきと伏轉て泣を函輝聲を怒し芝豹老賊反忠せり余渠奴を屠殺せん
 延平王も何の顔有てか見ゆべき城の後ある沙船も賢夫人あらびも令嗣を匿し置たり爾早く
 彼船へ往守護せよと云捨て奔馬の如く走り去張氏漸く起上りて背を願れば早敵間近く來る
 と見えて炬火の光天を焦せり張氏大い周障し或の走り或の轉び城後を臨で走行ける且說函輝
 の芝豹を刺殺と歩軍も紛れて窺ふも曾て遭す城中の兵の亂鐵砲を響して假も守禦のていをお
 す千時鄭芝豹の人質の爲錦舎を劫し捉んとせし林氏早く逃去しかバ力及ばぬ城を出て護龍
 も逢迎接して城も入んと已先も馬を歩せ來る函輝の猶も此所彼所も身を潜て尋けるも今芝豹鐵
 の恣を頂き錦の袍を穿て馬を進め來るを見て怒氣心頭より發り鐘の如き聲もて國を賣者賊天
 爵有をしらぎやと叫び歩軍の中より躍り出長鎗を取仰芝豹が右の脇坪をぐさと撞手煉といは無
 雙の柱力され肩先まで貫き一揮ふつて刎上るもを憐むべし鄭芝豹十間ばかり飛で微塵も成て

死したりける護龍大い驚きながら兵卒も令して渠討取よといふも部下の者を討留んと殺進
 る函輝の死を究たれば公然として退をかず維續し鎗を弄敵も當る此の鎗先も向者命を全する
 者もし忽ち二三十人突落され戰慄てばつと散護龍も其奮勇も恐れ馬を鞭て敗走す函輝是を追
 んとせしが屹と心付賢夫人世嗣如何とて俄も引回し城後の沙船も馳着き見るも寒風肌を斬るこ
 とくあれ錦舎も函輝が兒も聲を放て泣叫を林氏張氏相ながらも睡し居たり函輝其安休を悦び
 借曰反賊鄭芝豹が一鎗も刺殺たれども味方残す敵も降れば誰も身を寄ん方もあし此所も居玉ひ
 ての邊も敵の擄とあり玉ふべし此方へ渡り玉へとて枯たる蘆原の中を二里ばかりも薄き洲の前
 も出たれども船もあはれに避去ん事も能ひを長嘆してイけるも忽ち一艘の小船來り一人の漁翁
 立出て然聲咳玉ふの函將軍もあらまやと問函輝訝り你何が故も我を知やと答む漁翁が曰我の鄭
 老爺の舵手さればよく將軍の聲をしれり安平落城の後ハ世を避れて漁者とありハ然るも今宥思
 明の本府も當て火光大い起りいゆへ何事もやと心ならず先より蘆間も船を停て在けるも將軍
 の歎息し玉ふ聲を聞て漕きたりハ函輝大い悦び今進退ともも究る期も望み你が船を得たる天
 いまだ鄭氏を捨玉ひざるあり今鄭芝豹叛逆して世嗣を屬もせんとせしを幸して救ひ奉れり你舊
 恩を忘れせんハ賢夫人母すあらびも余が妻子を護りて大宛島も至り國姓爺も渡し奉れよといふ

漁翁も芝豹か叛逆を惡み怒一議も及ばず領諾き此時後の方より北軍函輝を討取んと手毎に拒火を振て間近く進み迫る函輝速しく林氏母子を舟に乗次り張氏親子を乗備日けるの余も陪侍をべけれとも敵已に追迫れば認められての一大事あり依て少時防ぎ跡より追着べし心を用ひて賢夫人世嗣を守傳よと命す林氏張氏とも涙は昏何卒命を全し臺灣に來り玉へとて舩に泣伏す函輝聲を勵し我事心とせせ世嗣は過さざるやう守護せよ漁翁早く船を出せと喝令し其身取て回す是に依て漁翁舩を押切て渺々たる沖へ漕去ける

○函輝勇戦而水死

斯て函輝の林夫人錦舎我妻子をも落しやり取て返しけるが猶も心よかり振願は早夜にしらと明わたり朝霧朦朧たる海路を彼漁翁舩を操て遙く漕行遂に船影見えなくなりければ今心安しとて一息はつと吐て停立ける所へ黃護龍が兵と韃將士故山木故山が兵海口十里の間を充満し函輝を討んと追迫る函輝呵々と笑ひ我は是惟一騎あり然も歩立よて弓鳥炮もあく唯一柄の鎗有のみ何の怖る、事かあらん誰よてもあれ來つて雌雄を試みよと呼りけり土故山聞とひとしく馬を出さんとするを護龍甲の袖をひかへ函輝の鄭族が脇股の者よて諸般の武技を達し就中力の底を見たる者さき程の豪傑あり一騎討の勝負の不可あり只宜く遠箭を射取べしと制す土故

山首を振我數百度の戰場に臨めども未だ手立者を見ず豈一人の函輝を怖んや余か一鞭を討殺を見よと廣言し馬は一拍いれて乗出し鐵鞭をりうくと揮鳴し只一撃と撃てかゝる函輝の既立あがら是を迎へ兩雄一往一來して戦こと六十余合土故山が鐵鞭の流星の鳴が如く函輝が長鎗の閃々事電光に似てともよ一點の透間もあし是を見る北軍醉るがごとく汗を握て看る所は函輝忽ち一聲叫と比く土故山が胸板を丁と刺空を望で剷上ると見えけるが走寄て土故山が馬の上へ身を躍してゆらりと跨る其輕捷飛鳥の如くあれは北軍大い駭きあがら土故山が都下の五百騎主の仇を復さんと一齊に喊を發て進み迫る函輝些も動せず馬を飛して多勢の中へ割てへ前後左右に突伏く血烟を上て惡戦する程に討るもの數をしらすさしもの多勢開き靡きて敗走も木故山是に入かりつて六百余騎一人の函輝を鐵桶の如く取圍み箭を將る事雨のごとし然とも函輝事ともせず東に蒐西に馳て圍を撞破り人馬を殺す事幾許といふ數をしらす此手もまた粉の如く亂れ立函輝の甲は鎧の毛の如く箭を折かけあから精神少も撓ずして護竜が勢も渡り合散々よ突立しが遂に鎗を突折しかば柄をもつて近付者を撃殺は一撃に三人五人撃殺され此勢も脚の子の散が如く八方へ散亂す黃護竜函輝が驍勇に捲み果兵卒も下知を傳へ枯藁よ火を掛させければ海風にげしくて須臾も燦々と燃立さしも廣き洲に猛火充滿たり韃軍是も機を得て鉦鼓を鳴し聞

を發て威を所至函輝の火氣も蒸れて堪かね海中も馬を乗入れれば木故山一千騎を帥て焼原を打越嶽をぐるへ散々も射る函輝持たる鎗の柄よて飛箭を拂ひながら大音も延平王が臣函輝君忠の爲も海中も死す難賊死首取て廣言する事勿れと呼り劍を抜て肚も突立る木故山其首を取んと海水も馬を乗入けるも俄然として逆濤起り人馬とも漂没し底の水屑とありよけり函輝も此濤の爲も深ひ途も海底も沈みければ北軍函輝が首を取事能へも敵一騎の爲も兵卒若干を討れ二人の大將をさへ失ひければ惘果ながら思明の城中も入て城を休め合戦の顛末を北京へ進進す安大人是を聞て李成泰を以て思明の守衛とし護龍を副將として嚴く海口を守らせけり

○國姓爺擊殺猛虎

延平王國姓爺の大宛を定め城を築き島夷の心稍懐きければ思明へ此旨を告遣んとおもへども冬のおらひよて東南の風吹されば巳事を得志打過しけるも城居の工作預め畢ければ是を點檢せん戴健夢仲等數人を將て新城も到り子細を檢見て後城後ある山を望見るも高嶺雲を凌ぎ頗る嶮峻の名山されば島人よ名を問ふ大宛第一の高山天柱嶺といひ答依て數人と此山も登り見るも巖石嶮々として羊腸たる苔の路雲も人かと思ひかり遙き山の半腹も至れば大洋眼下も有て遠近の佳景一望も盡實も塵外の仙境も入し心地せられ主臣大も興も入登臨出三世界確道盤

塵空さんと古詩を吟じ猶山深く登り行所も忽ち樹林さやくと鳴一頭の老虎躍出たり身の太や大牛の如く鏡の如き眼を瞋しうなり吼て先も立たる國姓爺も飛かゝるも戴健夢仲以下大いよ驚き主も代て防んと各劍を把て鬪ぐを國姓爺手もて制し徐も衣の袖をかゝげて猛虎も向ひ一拳も頭をへと撃さしもの悪虎も性力も撃れてよるめさけるが足を踏止めて大いよ怒り高く吼て再び飛越るを國姓爺早く身をひねつて是を避虎また引回して跳り越る此度も閃と避す原來虎の爪を掌の一撲一撥の裡も有も已も三度まで透されければ此虎益吼り狂ひ岩石を踐鳴し樹の根を蹴立劍の如き爪を張血盆の如き口を開き跳かゝるされども初の勢も半を減したれば身をがへして鉄脚を揚機さすも太肚を倒と蹴り虎の岩頭も蹴倒され大いよ吠て再び勿越んとするを國姓爺早く虎の背も跨り左の手も頭をしかと揪へ右の手を宛も鐵の槌の如く握固め力を宛て續撃こも三四十拳もかよふも虎の頭腦を拳碎かれ苦しみ吠て眼口鼻より鮮血もかれ出途も斃死したりけり國姓爺の神色少しも變せず從容として衣を拂ひて立戴健夢仲等眼前主の勇力を見て一度の駭さ一度の感し王の神力今も始るといへども斯許の猛虎を容易撃殺し玉も事周處が勇も十倍せりとして只管賞賛し歩卒も命して死虎を縛りて擔ひせけるも十八して漸く肩も上る事を得たり是をもつて其大ヤを知べし斯て山を下り府城も回りけるも衆人虎を見其顛末を聞て舌

を卷つ、國姓爺が勇力を賞譽せざるのあかりけり。茲は黃廷周全斌の海口の鎮護として恒は西北の風吹時の海賊の難を防んと濱邊に陣して衛ける。頃しも臘月の中旬一老將の屍が來て滿たる潮の爲は荒磯に打上たり。士卒を見て周全斌と告全斌恠み屍の邊に往て情見る。豈量ん是函輝が軀にて猶生るが如くあれ。大い驚き兵卒は昇持せて城中へ馳行國姓爺と斯と認たふ。廷平王も仰天して其屍を見眉を蹙て曰。函輝の智勇兼備せし豪傑百萬の勢を以て圍むとも蹴破て通んこと初たる木を碎より安かるべき。何ある故か。自截し水入けん然も身は箭を許多折かけし。手痛く職ひしと覺し是を以て彼をおもへ。余が此島へわたりし旋を窺ひ虜兵思明へ攻寄しか。遮莫兵糧矢玉三年の時ある上三萬の兵有て函輝是を指揮せ。敵大軍たりとも容易に攻落し得べき。あちまも何故に戰死せしやと不審更に晴やらを哨船を遣て見聞せしめんと思へとも。文冬の時節にて東南の風おければ施すべき方便なく先函輝が屍を假し殞め春を換て泉州の郷里に葬んと思ふ。裡其日より二日立て亦海口へ一艘の釣舟漕きたりぬ。周全斌が部下の兵卒是を檢る。林夫人金舍あらび。函輝が妻の張氏母子を乗たれば大い驚き伴て周全斌が陣に至る。全斌も再び駭き子細を問て初て思明の變。函輝が戰死の故を知即時に府城を伴ひ國姓爺と對面させけり。國姓爺林氏金舍を見て慨然として其來歴を問。林氏泣て告ける。鄭叔爺敵と

内通して亂を發し錦舍を虜とせん。せしを辛して懸れ。函將軍を扶られ張氏と俱に城後の沙船に身を忍びし。時許ありて函將軍鄭芝豹の討得たれとも士卒みな敵に降れば身を寄る家あり。此所へも頓て敵追迫らん。先彼所へとて沙船を出置原を分て洲崎へ出たれとも船をければ身を懸れんやうもあく後より敵兵追迫り進退已に窮りし。一人の漁翁船を漕きたりけるゆへ是を托曰て。妾母子張氏親子をも船に乘大宛へ送り届よと命。玉内敵早折付。兩將軍の引回して敵に向ひ玉への死生をしらず。妾等の漁翁の情にて遙々と波濤を凌ぎ辛じて此島へ着侍ぬと語りければ國姓爺机をたんと擊つ。叔父の逆意よりて國を失ひ柱石の臣を死亡させけるを安からねと怒の眼は泪を洒しが又歎。曰。函輝身の死し。ながら魂魄猶忠を忘す。此島へ流よりしを以てあるへ。妻子の無異に着けるも渠が一念の應護に因なるべし。然らずんば。繼なる漁舟數人を乘て數百里の波濤を安々渡る事を得べき。海路を導し証の漁翁が船に二日先立て。驅此島へ流れよれり。其折からの事を語聞す。よ。林氏張氏聲を放て泣悲み五部の將軍六部の副將も。已々妻子を芝豹が爲よ失ひしを悼み。悔み涙を落さぬのあかりけり。國姓爺泪を拂ひて曰。我此島を定めしも。全く函輝が智よよれり。今もへ。罪て芝豹が逆くべきを先知せし。故なるべし。其上芝豹を生置。生々世々の恨あるべし。よ。函輝矢石を犯して是を討三軍の憤怒を解し事感ざる。よ。余り有宜く此島鎮護の神は崇

ひへしとて祠を建て函將軍の廟と號し妻の張氏を徑國儒人と稱稚子守育しむ諸漁翁の數の金帛を與へ永く大宛を留る可よしを勸げれども固く辭し別を告て再び漁舟を棹さし何國ともな漕去けり其後國姓爺諸將を聚め商議して曰我己恩明を失へば此島を根本とし時々福泉の城を恢復すべしとて島の名を東寧と改む是自己海東日本の産なれば東寧の字を用るるべし戴健翁天祐口を捕王冬の中より三軍を訓練し春に到り恩明を攻取北軍と雌雄を決し玉へと勸む國姓爺然りとし是より晝夜兵卒を進退を習はしめ軍戰の用意をさし専ら春に至るを待よけり

○國姓爺謀討李成泰

延平王國姓爺の東寧の名に在て兵を練専ら恩明を復恢復せんことをおもふ所より程なく其年も恩明れに癸巳の年と改る其三月春日の暖あるに乗じ東南の風を卜へ十萬の勢を數百艘の艦艦に乗しめ波濤を凌ぎて恩明に乗着一齊に陸上りて城を十重廿重に圍み息をも繼せむ攻立る城の守備李成泰俄の事あれば大いに周障し副將黃護龍と俱に四方に勢を配て矢石を飛ばし防禦を鄭兵の去年より待よ待たる事なれば奔信の雨を犯し憤聲を發して一舉に城破んと攻立れども城固なる上敵より射る毒箭の爲に死亡する者數しらす一連三日の間攻れども落る跡見えずされば國姓爺心よ一計を設け攻倦し休よて一旦兵を班め海口に退て屯し暗に物押たる士卒を謀を授

て八波へ分ち遣ける其夜の曉に彼間者三人の旗兵を生とり立回る國姓爺其者どもの懐中を捜さする福州へ援兵を乞書二通を得たり偕其者を拷問して猶爾等が外に援兵を乞使者城を出たりや否やと問ふ三人の外にありしと答は依て三人の陣中に入り置翌日また城を攻させ密に陣中より軍の旗を紙よて多く遣らせ夢仲一萬騎を授けて夜中より遠く出し北軍の援兵の來れる体をなましむ斯て準備十分調ひしかば戴健林勝等も七萬騎を授け謀を授て城を攻させ國姓爺の二萬よて城後より埋伏し号炮を今やと相待居る去程に戴健以下恩明城へ押寄圍を發て攻立る城兵此三四日帯甲を解き晝夜の防禦を身休勞れ英氣擡て見えけるを李成泰遺護龍しかり屬して矢石を飛ばし防ぎ守る事己の刻より未の刻よふ然る所より寄兵俄に騒ぎ立攻口を退きて北に向ふ李成泰訝り何事よやと權に登りて望遠鏡を以て見よ福州の援兵と挑み戦ふ体なれば大いに悦び身方の援兵來りしを城を出て夾討よし國姓爺が首を取て莫大の勳功を顯せよと下知し護龍を止て城を守らせ自ら四方騎を引卒し城門を八文字に開せ勢地直に馳出し鄭兵に近付所より鄭兵忽ち備を動翼よ變じ李成泰が兵を取圍む是を見て奇兵をさしたる夢仲も紙族紙帳を棄て延平王鄭森と大文字に書たる旗を押し立て李成泰が軍を撃てかゝる李成泰大いに驚き偕に鄭族は暗かれたりと周備をさがら自ら三又の戟を揮て眞先馬を躍せ雲霞の如き敵中を七縱八横に塊散し辛して圍

を切開き馳出て味方を顧へ四方騎の兵或の討れ或の落て五千騎不足討ちされ夫さへ小傷大
 傷負ぬのあければ迎も拒敵叶はずと思ひ府城をさして馳回る後より夢仲林勝戴健以下餘波を發
 り鼓噪して追蒐る北軍肝心も身も添ず主を押退親を突倒して我先よと走りて城門は着門を開
 よと呼ぶ是より以前國姓爺の李成泰が城を出し後不意よ起て城門を打破り大浪の如く攻入けれ
 の黃護龍防ぐ事能はず周障狼狽して逃迷を翁天祐一刀は斬て落し城中は残る北軍の妻子を悉く
 屠殺しける所よ李成泰敗走して回來り門を開よと呼ぶを聞て國姓爺自ら櫓を露れ出李成泰を指
 し罵て曰虜賊猥も我が此思明を奪ひ三軍の妻子を害したる天罰環りきたり兵を拆ら妻兒を屠
 殺るよ至る然るも猶覺をして城門を開よと呼ぶるの自城中よ入て誅よ伏せん爲かとして護龍が
 首をばしめ李成泰が妻子の軀を投下させけれの李成泰大い駭き惘然としていふ所をしらき部
 下の兵卒の城已に敵よ奪ひれたるを見て肝浴脚痿て夢仲戴健等が勢よ向ひ悉く盜を脱旗を伏
 て降人とある李成泰今の僅よ四五十騎となり路を奪て落行を林勝夢仲透間もかく追蒐遂も夢仲
 李成泰を一鎗よ刺殺し殘兵と悉く討取凱歌を唱て入城を國姓爺の思明を恢復して大い悦び
 諸將の功を賞し大宴を開きて三軍を勞ひ是より壘を高し堀を深して専ら守禦の備をあしけり福
 州の招撫使安大人の國姓爺再び思明を斬取しと聞て大い駭き北京へ急使を立援兵を乞て思明

を征伐せんとす貝勒王是を聞て使者よ向ひ鄭森の智勇兼備せし良將なり若力を以て渠を征せ
 んとせば味方も多く兵を拆くべし我一計を安大人よ與へ劍よ血塗すして鄭森を走すべしとて一
 封の書を使者よ與使者福州へ馳回て貝勒が命を傳へ右の期を呈しければ安大人取て披見し大い
 よ悦び部下の勢十萬騎を三隊よ分て福州界迄出張して屯し又數百艘の空船よ艦旗を多く立海
 上よ漕運て大寇を攻る勢を爲國姓爺是よ驚き今敵の大軍境よ臨むさへ有る根本たる東寧を攻
 取れてハ叶はし先東寧よ回り計略を定て又々思明を奪返さんと城上よの空く艦旗を立夜中暗よ
 惣軍を帥ひ軍艦よとり乘大寇へ漕回りけり安大人是を見て手を拍て笑ひ我か元帥の策果して
 中れりとて金故山を思明の惣鎮として五萬の兵を授け其身の福州へ飯陣し北京へ右の義を注進
 す是より庚子の年まで八箇年が間年々争戦止時なく或の攻取或の攻取られ唯雄更よ決せざりき

○國姓爺發兵攻三宗明

北朝の順治爺の日々よ徳を脩て民を撫育し庚子年秋の頃湖南道を巡狩し翌る辛丑の春の南京よ
 赴かる其風聞隠かく東寧まで洩聞えければ國姓爺五府の將軍を聚め議して曰余不肖の身を以延
 平王の封を辱なふし屢七閩の地を恢復すといへとも今よ至るまで皇爺の消息を聞す情あ
 るよよ聖駕の雲南の山谷よ藏れ帝の瘴嵐の患よより登遐し玉ふと覺へたり若然らずんば十有余

年の内争か詔書の至到せざる事あらんや音信なきを待て空く南海は機手を束て中原の繁盛を見るに忍びを運を天に任せて先鎮江城を攻落して根城とし浙江の兵を募り南京を伐入て勝敗を一戦に決せん事をおもふ列位の意見の奈何と聞戴健階を進み出て曰玉の論甚に佳しかし軍中の將多く閩の産なれば金陵の地理は暗し誰かよく脚導を爲べし周全斌が曰南洋の城主陳豹こそ浙江南京の地理は達せり彼を召て五府の一員は備へ先鋒たらしめ玉へ國姓爺然とし且曰けるは余此度南京に向ふ事國家の興亡にかゝる大事たれば諸將より卒歩に至るまで屍を原上は曝す事を厭む死を一途にして健軍の百万を懸にすべき志あるんば蓋世の功を成がかしと首ければ五府六府の諸軍勇み悦び願くは一寸までも敵地に進み屍を戰場の塵となして多年の高恩を報じ奉らんと肯國姓爺大に悦び日を擇み試場に出て日々兵を訓練し進退よく熟しければ然らば出帆せんとて先軍令を定む黃廷を留護の將軍として嗣子銀合を守せ洪旭戴健林勝は三万騎を擧て東寧の居城を鎮護せしめ南京發向の諸軍は陳豹馬信を嚮導の先鋒として一番は五府の將軍二番は出軍先行三番は正五軍四番は緩勦鎮五番は宣毅六番は五兵鎮七番は水師八番は火武九番は五府鎮十番は五行鎮十一番は參軍十二番は旌兵鎮十三番は鐵騎鎮中軍は國姓爺後軍は六部の將あり配當已に定りければ明の永曆十七年庚子十月は東寧より數千艘の福船沙船は打乗纜を解て順

風に乗じ數百里の波濤を凌ぎ南京の海口崇明といふ所に着此關は大将軍李部院副將鄭故山王者約等はを守り揚州淮安廬州安慶の兵を加二十萬騎にて固む海上第一の關なり南軍の機隙は船を乗すを碇を投下し十七萬騎一齊に陸より上り海邊は塞を構へ隊を整て押出せば北軍も是を見て副將鄭故山殿は甲冑を穿て馬を陣外に乘出し大音は汝等無智の海賊貪て飽弊をしらむ我願將爺の聖徳も懐す天朝の嚴威を犯し國家を寇せんとする膽太さは是薪を負て燒野を走り石を擲て深淵に投するも等已と死を求るを恐る我が王の徳義舜は則り下民を惠玉ふ事所の如く敢て殺戮を好玉のされば爾們非を悔過を謝して速に去り狗命を助くべし若猶迷むとて貪狼の心を縦よせば忽ち斧鉞首は臨み三族を亡すべしとぞ呼りける南軍の陣よりも先鋒陳豹門旗を開て馬を乗出し大い喝して曰不毛の虜賊何を吠舌を鳴る事の多きや眼あれども文字を讀事能き我が王の旗の上面なる延平王鄭森の五字をだも解せずして猥に徳を先王に比する事抱腹するに堪たり抑我が主明朝の弊は乘して天下を盜餌を與へて愚民を懐け中原をして夷蠻の國とする惡逆天誅踵を運すべからむ我が鄭王は天朝の爲に忠義を忘す威を七閩に震しが日月少時發て跡を東寧に整し今慷慨の兵士を帥ひ中華を恢復せんとし玉ふ是順を以て逆を征するの天兵あり爾速に旗を捲戦を伏て刑戮を免よと誓り回す鄭故山大い怒り左右の間答無益あり只蹴

散せよとて戈を揚て後を塵け北軍鼓噪して隊を押し出し毒箭を放つ時雨のごとし鄭兵も関を合て鎗炮の筒口を揃て一齊に打出す其音百千の雷の轟が如く兩陣死傷の者數をしらす果の入亂れ争戦する程に砂煙白日を曇せ鯨聲の海底に震ひ夥しかりし光景なり斯て鋒を争事已の刻より申刻及べとも唯雄更に決せを双方の屍の雲々として岡を築き鮮血淋漓とあがれ滿地紅井は變ず于時日已に西海に洗ければ南北相分れて軍を班め健軍の城中へ入鄭兵の塞み回りと俱に軍勢をぞ息ける

○國姓爺火計陷三宗明

其夜陳豹國姓爺を見て曰淮安揚州の兵其勇壯侮りがたし正兵を以て是と戦ひ急に勝利を得んこと難たるべし願くは王一計を設て此敵を拉ぎ玉へ國姓爺が曰北の坎にして陰なり南の離にして陽なり正火攻は利有べし余が老爺爺遼東の戦ひは大功を立しも地雷あり今又是を以て敵を敗るべし爾ら如此々々のからひて敵を穿へ延よとて密に奇謀を授け儲澎武の兵を命して深夜を冒し野外に若干の火器を伏其上に木葉枯草を散し布し陳豹馬信兩先鋒の敵を多く爆て三里が程に撒散し準備全く調ひければ未明より兵糧をつかひ城外まで押寄る城兵も勢を出し互に鯨波を發し弓鳥炮を射進へ喚き叫んで斯結其物音山川は震動して天維も裂地軸も砕れかど疑

はる陳豹馬信の時分よしと伴と戦ひ屈せし牀ももてあし隊を亂して馬を引回せば士卒も同く敗走する体をなせ即故山王老豹の敵は謀計ありとの夢ももえらず誠は逃るぞと心得味方を勵し短兵急先を争ひ追進む所は頓て原上よいたれば駈なやめる汗馬待ちらしたる菽を見て是を喰ひ鞭とも泥濘とも敢て進まず即故山王老豹此跡を見て儲の敵は謀計有と覺ゆるを急退けよとて幽僻の地へ馬を乗入るゝ忽然として一丸の火珠飛出ると見ぬしが木葉枯草は火移り一齊に燃立とひとしく百千の地雷霹靂の如くありたり大地悉く裂て山峰の如き火珠散滿として空中に飛回り人を飛し馬を裂よぞ泣叫聲の遠近に震ひ正は焦熱大焦熱の罪人は異あらず十里の江原忽ち屍の丘となりさしも驍勇の故山老豹も五体分裂して焼死たるの怖しなんと陳豹李部院逃かぬ城上よりこの烟火を見て必定味方鄭兵の奇計に中りけるならめと急ぎ城に残る兵七万騎を整點し先鋒の軍を救んと城を蒐出揉ももんで馳到南兵の十方の勝利は機を得て陳豹馬信先馬を躍して殺出しければ十萬の兵後を隨ひ蒐合て追つ返しつ挑み戦ふ北軍の勇ありといへども故山老豹地雷の爲に焼殺されたるは勇氣折け自然と浮足はなり南軍の勝誇たる鋒先尖くして大浪の打が如く捲り立るゝ李部院が勢支へかね隊伍を亂し散々皮て城中へ逃籠る陳豹馬信をいじめ五府六部の將等引續いて城下を攻詰息をもつが責立けれども城兵毒箭を雨し大木大

石を投下して守禦するが故南軍手負死傷の者のみ多く攻倦て隙隙けり國姓爺此体を見て令を傳へ枯柴の火藥を測り城門は積重石炮を放して燒立よと下知しければ火武の兵士心得て燒草は燄燄をそそぎ城門は近着て手毎に投付る城兵は是を寄付じと矢石と飛して防げとも南軍事ともせず死を的として柴を投る程は暫時は山の如く積上たり國姓爺今頃にはひよしと石炮を一連は十挺まで放ちければさし堅固の械門碎け積上たる柴烈々と燃上り機々は焰うつるよと城兵是を防かね周障狼狽する事大かたならぬ李部院のとも城の保がたきを見て後門より逃れ出るよ兼て南軍後門の兩邊は埋伏し待設たる事なれば一齋は發り立一騎も余さじと八方を裏で責立る李部院の事叶がたきを見て一丈余の蛇鋒を打振西は蒐東は馳敵を討事敷をまらず此勢ひは辟易して南軍思ひ路を開き避通す是は依て北軍忽ち活路を得李部院を勸て落住所は南軍五府の大將の中は左軍提督翁天祐日本刀を振挿し馬を拍て追來り繼賊回せと呼はりて刀を真向に挿し斬て蒐る李部院大い怒り馬を回して蛇鋒を弄し一撞は刺んと進み寄雙方一人當千の勇將なれば互は青龍白虎の威を現し戦ふ事三十余合然るは李部院が命運や盡たりけん一丸の火珠飛きたり肩口を折ぬきけるよと堪かねて馬上より真逆は落けり翁天祐透さ馬より飛下り刀を擧て遂は首級を擊落す主將討れて殘卒全からざるならひ我先よと江を渡りて鎮江城へ逃籠る國姓爺の安

々敵を追拂て都卒は命令して城中の火を消せ城は入て兵糧をつかひ其夜の軍馬を休め翌日諸將を集へ鎮江城を攻べき軍議を申しけり

○國姓爺横槩賦詩

抑鎮江城と謂は往昔吳王孫權が築く所にして周廻六百三十歩前は湖水を帶鐵の壁に似たるを以て鐵壁城とも号る無雙の要害なり韃將張文煥十萬騎よて茲を固けるが崇明關の敗卒五萬人鎮江城へ退籠り都合十五萬騎刃を磨鐵を琢て防禦の備をなし南兵寄なば微塵よあさんと待かけたり國姓爺の斥侯を出して鎮江城の浸深を見せしむるよいまだ早春の時節あれば江水氷て渡りがたしと報を然らば春暖は赴くを待てわたらんとて日を送るうち程おく二月中旬よありしかばいさや啓行よとて十七萬騎鎮江の汀に打出ゆるが雪解の水勢磐石は流すばかりよて漫々たる江水蓋より青く底の深き事幾尋といふ事をしらす船筏よあらずんば渡すべからされとも敵軍船を盡く修め藏しければ奈何ともすべさやうなく鬼神をも手捕よしつべき五府六部の衆將も茫然として大洋は向ふが如く空く手を拱き憫はて、水面を睥居たり國姓爺鎮江の地景の佳と鐵壁城の壯觀とを見て贊歎し實は孫權が築ける城かるかあどて彼三國の時魏王曹操が詩を賦せし故事を思ひやり自己も江上を眺め槩を横へて一絶を唱へて曰

横槊賦詩曹孟德

詞鋒先奪鎮江城

孟德時鐵騎鎮周全斌曰這城一大江を帶たれば縦ひ空く敷月を過すとも江水の濁き盡るよもあらず安閑として何の時か城を攻落すべし不如我驍虎馮河の勝を惹とも運を天に任して先陣すべし三軍後も續て濟せよと言放ち部下の勢も合し江岸を下り馬筏を組で碧潭綠深き江水も騎入ければ歩軍の馬もすがりて押渡る國姓爺是を見て大音も全斌が水煉もならひ引續て渡せよと指揮するよぞ十七方の猛軍先を争ひ馬筏を組で打入々々渡を程も素り機も乗する勇兵なればさしもの大江を一騎も溺るゝ者さく向の江岸は叫で登る鎮江の虜軍是を見て大いよむとろき此湖水を蹴渉りもる事古今いまだ例を聞ず南軍の銳氣吐恐ろしけれと辟易して防箭をだも墓々しく射出さる屯をひらひて城中へ逃能る國姓爺命して曰南海を出陣せし時より誓し如く活て飯らんとおもふ事なく屍を這城下へ晒すとおもひ定め火急に此城を責落せよもし遲滞せば南直の援兵きたり却て利を喪へしと嚴く下知をつたふ三軍大いも勇み悦び假令鐵城石室もわれ何程の事あらんと魚の連るが如く群りて喚き叫び攻立る城兵も櫓々より毒箭を多く放ち茲を大事と防戦す是よ因て南軍死傷の者多く屍山の如くなれとも少も厭はせ死族とあつて競ひ逼る然とも名立た

る名城おれは容易に乗取ること能はず其日の空しく暮ければ退ひて江岸に陣を張陣々も大將を燒立威を示す其餘烟天を焦し江水も映じて影しき事謂んかたなし斯て夜も明わたれば再び城邊へ進み迫り攻立る其兵勢昨日は十階しければ城兵困み漂を張文煥走り廻て三軍を勵し必死よ成て防ぐよぞ其日もまた持堪たり國姓爺の兩日城を攻て下す事能はざるよ氣を焦ち五部六府の諸將を聚て城を陥落べし謀を問其時建安伯萬禮進み出て曰敵城堅固ありといへとも主將張文煥だよ討とらば自然落城すへし王明日城下へ進み張文煥も對面せん事を望み少時渠と問答し玉へ臣其時王の左右の歩軍の中は雜り鳥炮を以て文煥を擊殺すべし不如此謀計の奈何國姓爺大い悦び如斯ならべ城を陥んこと何の難き事かあらん唯恐くは城上遠くして火珠の及まざき事をと難き萬禮が曰小臣よく其遠近を察するよ飛丸の及ばざる程もあらず張文煥櫓もだよ出ば斃んこと手裡もあり軍中よの戲言おし若擊損せざるあらば軍令も行ひ玉へと言を放ていひけるよぞさらば明日張文煥を釣出しあん搦て過つ事おかれと誠め借翌日例の如く隊を押し城邊近く屯して國姓爺二十余人の歩軍を隨へ延平王鄭森と書し錦の旗を指挿させ金龍の盔を頂き百花の戰袍を披掛赤兔馬に跨りて徐々と乗出し城に向ひて高聲に城將張文煥よ一言いふべき義あり出よやと呼はる監卒入て斯と達しければ張文煥城上の櫓に登り挾間を開き現出て曰鄭賊你

猥に我が界を犯し人民を悩ませ大膽ある今日、我城を出て爾を擄よし生かばら其肉を喰はんと
 おもふ所爾自ら我に對面せん事を望み降を乞ふんと欲するやはた死を爾んと欲するやと飽まで置り
 けるは國姓爺微笑し我南海に身を倚皇爺の消息を待といへとも今に至るまで詔書きたる事なき
 早く登壇し玉ふを知らせば我寄するは主なく事なるは君を以て因て清朝は降り北面して臣位は列
 せんとおもへとも清王我が老大爺を曠き虜として反されば我先南京は攻入老大爺を奪返し威を
 清王に示して後和を講せんとおもふ然とも南京へ攻入まては幾許の軍民を損ずべければ爾清王
 の説て父を贈きたらば我崇明關は退き戈戟を收て其音信を待べし若然らばんば已事を得る爾が
 城を踏潰して南京へ攻入へし思慮を定て回答せよと呼りけり張文煥巨口を開て呵々と笑ひ爾
 密言を以て我を瞞し父を安々と奪返し其後國を偷んとおもふとも是等の詐謀は三才の小兒も瞞
 得下無益の舌を勞せんより早く陣中へ飯り齊戒沐浴して身を淨め刃の首を臨を待よと晉り回す
 國姓爺大いに怒り黃口の虜奴何ぞ無禮ある見よ、今天誅の速なるを見すべしといふ事未終
 ざるは兼て歩軍の後、潜し萬禮密に鳥炮の目的を定め忽ち切て動と放つ素り提針をも擊斷手煉
 の筒先あれは過す張文煥が面上を腦後へ突と擊貫たり何かの以て堪へざり一聲苦と叫び仰さま
 は倒て死したりけり國姓爺其時三軍を麾きて須波菟れよと令するよぞ待設たる南軍天地も崩

すばかりは鯨波を發し鉄壁を穿ちて攀登る城兵の心もひもよらば主將を討れて周障傾倒しつゝ、
 堅立防禦するは遠く手足を張て惘れ惑ふ其隙に陳豹馬信をばしめ我先よと城中は乘人當を幸
 は難廻り心利たる者の城門の鎖を碎て打開く是は依て十七万騎一齊よこみ入其勢は山水の一時
 は溢れ下る如くあれは城兵敢て當ること能はざるを脱降旗を立て助命を乞國姓爺是を許し城中
 は入て士卒を勞ひ軍馬を息光重く萬禮が巧を賞し是より南京の石頭城を攻めんと志しける

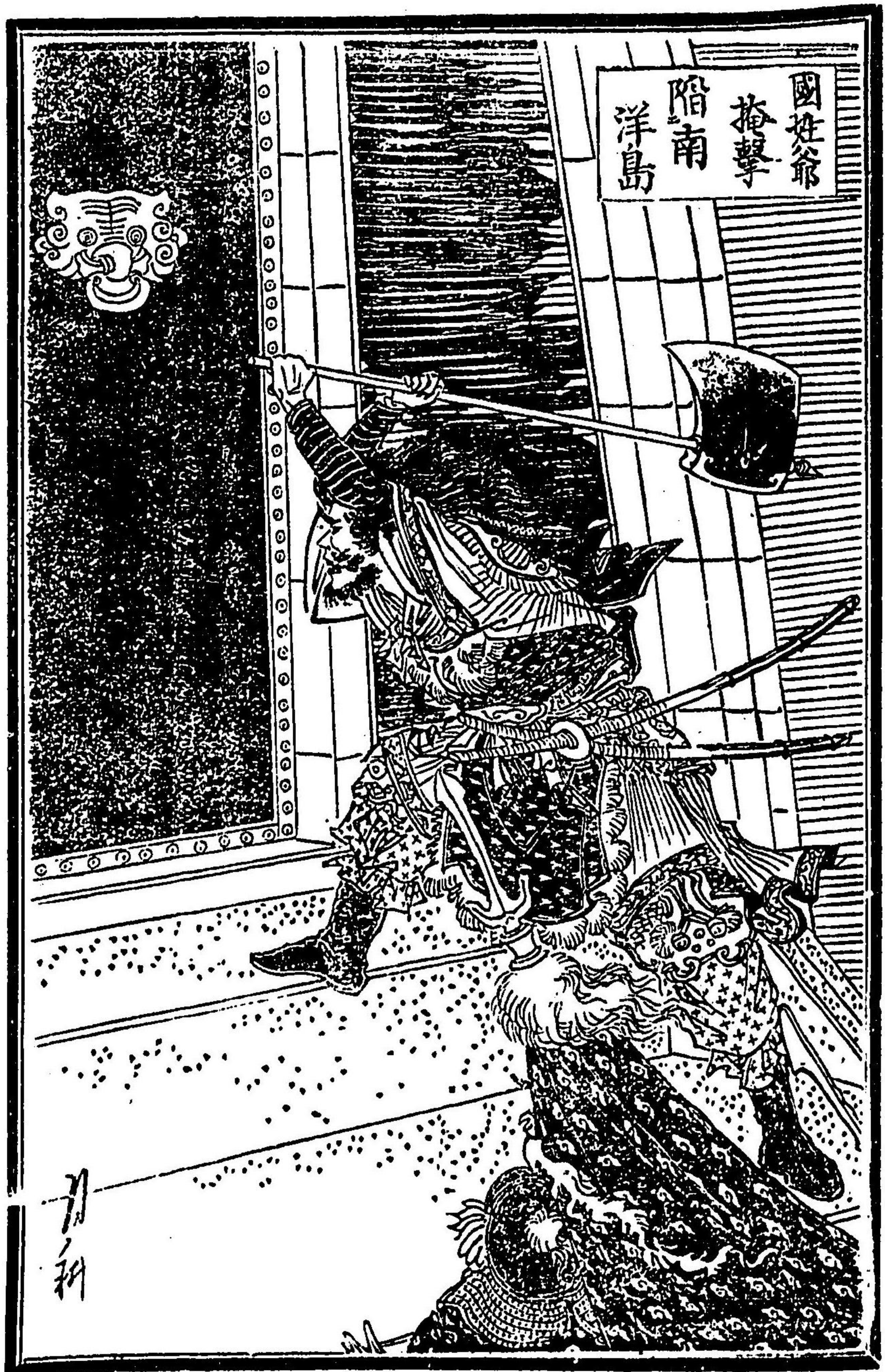
○國姓爺拒諫向三南京

國姓爺は鎮江城をも攻落して周全斌を留主と定め兵糧を廻し石頭城を責る計策を議するは陳豹
 が曰それ南直の地の繁華なるが故に商所充滿して農夫小く田圃狭ければ米穀乏し是は因て隣國
 の米粟は浦子江に運送す願くは王此所を本塞と定め兵糧を奪ひ時へ機變は應じて南京を攻玉へ
 は根を固し枝葉を生ずるの謀略なり國姓爺が曰卿が論も一理ありと雖、腹は神速あるとつ
 て功をなむ古語も疾雷耳を掩はしと謂り余崇明關鎮江城を奪上り早く南京へ攻入敵の
 群議いまだ定まらざるを伐は必然として大利有べし萬禮翁天祐等の陳豹が諫も服し神速は諫れ
 ども國姓爺敢て用ひて我が心已に決せり再度いふ事勿れとて南京征伐の將位を定む先五府の大
 將より前軍統帥林順中軍の提督忠勇侯陳豹左軍提督翁天祐右軍提督馬信後軍提督萬禮是を

龍師と号し二万騎を附屬す先行左軍先鋒楊祖右軍先鋒都督陳餘是を雲師と号し二万騎を附屬す
 五常鎮の前軍總兵仁武鎮康明中軍總兵義武鎮陳義左軍總兵智武鎮顏夢仲右軍總兵所武鎮黃與後
 軍總兵禮武鎮林招是を風師とし四千人を附屬す五行鎮の四千人の金武營木武營火武營土武營水
 武營の五總兵是を地師とす五兵鎮の四千人の正兵鎮楊福遊兵鎮胡縉殿兵鎮陳父奇兵鎮陳澤英兵
 鎮王義是を鳥師とす水軍七千五百の前軍周推芝中軍林輔明右軍周瑞後軍陳輝是を天師とす援勳
 鎮七千五百の前軍都督戴樵中軍都督鍾中左軍都督黃昌右軍都督何文後軍都督劉德是を地師とす
 宣毅鎮七千五百の前軍都督韓父中軍都督魏良左軍都督萬爺右軍都督黃元後軍都督吳翁是を虎師
 とし八陣の外は張内の陣は火武鎮七千五百前軍都督燕中軍都督蕭拱辰右軍都督杜輝左軍都
 督萬二後軍都督黃弘是を前備として正五軍四千五百を加ふ護軍陳邦旗兵鎮楊覽統領余申六部の
 七千五百を領し殿後の大將の左軍都督高招林右軍都督何鑑左軍虎衛陳魁右軍虎衛陳鵬潭都て其
 勢十七万騎吉日辰辰を占へて啓行す部伍整々としてさながら天兵の如く億万の強敵ありとも微
 塵よすべし勢ひありけり

○國姓爺 神力ニ破城門

抑石頭城の南京金陽の要害にして壘高く城深く無雙の名城なる上は太平風陽の猛將蘇州寧州



の堅甲池徽兩州の利兵廣徳和州の勇士徐泗の強卒を擇みて固たれば縦ひ百萬の勢も張良韓信が
智を兼樊噲周勃が勇を具すとも敢て陷落をべしと見えざりけりされとも延平王國姓爺が十七万
騎のかねて必死の旨を定め死生存亡を此一戦に決せんと思切たる上も崇明關鎮江城二ヶ所の堅
城を攻落し勝も乗ずるの勢ひ泰山をも崩つべきさあれば争か勇まざるべき隊伍整々として進
發し日を経て應天府南京のよ着到し遙く石頭城を望見するも數千の旌旗の五色の雲の霞霧たる如
く春風も翻り百萬の劍戟の霜雪の降積たる如く晝日は見めき眼を奪ばかりなれとも南軍些も
運疑せず隊を整點して應天府を押し出し金鼓を鳴し鯨波を發して攻寄る其猛威逆浪の崖を崩そが
如くおれば城兵も嗟歎し國姓爺が威名四海に轟き小兒の啼を止るも理りかちと戰慄しながら
各將互に義を勵み合矢石を飛し防禦す南軍事ともせせ三方より喚叫んで揉立矢も中り石も碎れ
て死したる者を足代となし巳の剋より未の剋まで息をも繼せせ攻立けるよを城兵大いよ疲れ已
よ城門を破らるべく見けるよ八府の總督馬故山大いよ怒り厲く下知を傳へ自ら走り回て士卒を
叱懲しけるよより城卒是よ機を整し命を限り防ぐ程も其日も已よ暮よ及と雖も南軍城を落す事
能ひ志國姓爺も急よ破がたさを知て軍を班應天府迄退き三軍も兵糧をつかひせ借前手の勢も肉
精盡慕を持せ炬火を多く燃し連箭來遠く城邊も押寄金鼓喧しく擊立て城を攻る体をなす城兵の

終日の軍勢を休んとする處に敵また押寄せしかば大に驚き歩卒を厲して矢石を飛し防ぐと雖南軍の箭來を量りて程遠く勢を立らよより空箭のみ多適あたる矢も肉盾簾幕の爲にすべり落更に一卒も傷る事能はざりて攻兵の終夜如是奇兵を命し翌れバ又新兵これと入替りて早天より城を攻ること昨日よりも猶厲し城兵多勢なりと雖一晝一夜眠らざれば大い疲困して腕痿力窮りながら城門を破られて南軍屠り殺れん事を恐れ互に志を勵して防禦し此れもまた無事を得たりされども暮ればまた南軍鼓噪して城を攻る体を命し曉よおよべの新兵入替りて攻立る此如南軍の晝夜相替りて息み城兵の二日二夜息む間なく眠されば身神十分疲れし上箭玉已盡て奈何ともすべきやうなく惘然たる許あり國姓爺の城中より射下す矢の漸々減するを見て偕に早城中矢玉盡たるを此機を弛す踐破よとて大盤石を左右に脇狭で城門へ走りより先一石を両手は輕々と捧ぎ動と擲よと鎖もて固し堅門洞裡くく響て震動く國姓爺續て又一石を擲よとさしもの城門扉破り柱碎り倒れ破ぬ南軍大いに勇我が王の神力能鎖城を破れりとして先を争ひ押破てこみ入程よ城兵周際狼狽し手足を張て怖惑を南軍得たりと突伏切伏難廻る是に依て八府の兵討る者數えらる散々敗走して正陽門に逃籠る是則ち石頭城の二の廓なり南軍續て正陽門に押寄せ烈火の草を焼が如き勢ひよて攻逼る程よ此手もまた一日一夜攻やふり

直に聚寶門に攻進む城兵も力を一致し毒箭を射かけ木石を投下して防げとも南軍の一死族となつて雨の如き矢石を些も怖れず親討るれば其屍を楯とし兄討るれば其軀を踏越て我劣とな壁を攀壁を踰難なく此門をも攻取りぬ誠其猛烈なること古今未例なく能筆紙のおよぶ所もあらせ國姓爺の勝よ乘じ應天府の本城まで攻寄せり本城よは南京の前軍都督府の勢龍驤虎韜天策飛熊龍江左豹韜左右衛みなしく中軍都督府の勢神策應天廣洋和陽衛牧馬千戶左驍騎右龍虎藩陽左右の水軍金吾虎賁錦衣衛の諸軍統て三十万の清騎雲の如く屯したり中よも總大將操江の十万騎よて地坑といふ所まで出張し南軍寄來に微塵よせんことを待かけ、る裨將劉文諫て曰往日願愷之荊州の舟を破冢といへる所よ出す或人地名の不吉あるを以他に移らん事を諫し願愷之諫を用ひずして果して大風の難よ遇り今將軍の陣所地坑の地の坑あり是坑に陥るの名あり願くは地を易玉へ操江笑て曰卿其一を知て其二をしらす我此地よ出張せし賊兵を地の坑に陥るゝ爲なり何を我軍の陥る理あらんとて諫を不用去程よ南軍の先陣五府の一將陳豹の萬禮と俱よ魁よ進みけるが陳豹方禮よ向ひて曰韃軍の弓馬よ熟きと雖我延平王の威武よ拉がれ手よ立敵もあらず此勢ひよ攻伐に南京の手よ唾して執つべし我徒操江を討て延平王よ笑を獻せん万禮然りとして敵陣よ押寄せ石炮弩を放かければ北軍の毒箭を射かけ頓て互よ入みだれて挑戦

ふ其間南軍の後陣追々馳付喚叫聲上の九天を徹して日月星辰を驚し下の金輪水際まで響き八大龍王を犯す許なり中にも陳豹万禮の兵卒を帥て操江が本陣まで亂入し當を幸ふ切て落す操江の鞭將の中より名を知れたる驍將なれば自己掛子鎗をさしのへ陳豹を刺んとす陳豹の望む敵なれば精神を壯よし斬馬刀を揮て一往一來し戦ふ事六十余台勝敗未だ分ざりけるは陳豹一點の透をねらひ刀を揚て操江が馬を斬ければ忽ち高く躍上りて主を大地へ剝落す操江起上らんとする所を陳豹早く斬て兩斷となす此時万禮も南京の刑部李華と戦ひけるが十余合よして敵の器械を奪ひ猿臂を伸して搔抓み擒よそかゝりければ北軍散々亂れ立討る、者數をしらず殘兵の遺々の体よて本城へ逃入けり此時日已西暮春ければ國姓爺凱歌を唱へ兵を班ぬ

○國姓爺夜走鎮江

去程は國姓爺の戦毎は勝利を得清の大將操江を討とり刑部を生捕ければ三軍勇み悦び明日の一戦は京城を恢復せんとして其軍議を咨す所は忽ち北京の援兵大將軍靴子金故山丁故山鉄故山其勢合せて二十一万三千騎野は充山は滿て四平山を下り東廬山を経て南京は着到すしかのみならず虜將忠光と云者思慮を廻し鳥合の民舎を毀ちて火をかけ川源より流して南軍の船を燒たる体よ見せければ南軍の歩卒等大い驚き定海崇明の船を燒れたれば既兵糧の道絶たりと力を落

し流石下官の悲しき一應の恩慮も及ばす亟よ心を變じ振々落行よぞ十七万騎の軍勢一夜の中は七万騎滅せられさへ傷勞れたる者多ければ國姓爺大い驚き茫然として惘果たりされども五府の將軍六部の副將及び五行五兵の都督の初の盟誓を違はず心金石の如く一步も退くべき体あし先鋒陳豹が曰今我が軍俄滅じたれば敵の猛軍も向とも暮々しき事を成得べしとも覺ず此上の王早く二三千の精兵を帥て鎮江は赴き周全斌と同く崇明よいたり繫たる船よ屯して兵糧を守り玉へ臣はしめ諸將の此地は陣し敵百万騎よて王を追とも能喰止て一騎も通しはつ然して王の鎮江は到り玉のん頃には這地を引いらひて崇明に至り俱一旦東寧は回り再び兵勢を調へ大志を果すべしといひけるは國姓爺が曰此論可なりといへども余不肖の身を以て諸將の輔佐は據大敵を敗り堅城を陥て已は明日の交戦は南京を恢復すべき期は臨んで忽ち士卒離散するは是渠等が應せるもあらは國家の運數の盡る所なり余往日義を唱へ兵を興してより我爲よ死したる者萬を以て筭べし然るは今死地は臨み諸將を棄て余獨り鈍々と退かば何の顔有てか世人は面を合さべき余は於ては決して退くべき心あし縦ひ小勢もあれ捷軍は蒐向ひもふ程戦ひ屍を戰場は晒のみと思切て云けるを翁天祐大い諫て曰王の大勇入智を具たる名將なりしよ今日の却て血氣の勇をのみ思ひ玉の何ぞやそれ軍の勝敗の時の運よして朝は敗れ暮は勝の

兵家の習なり我が軍昨日までの三門を破る勢ひありしも今日また北軍の爲に窘らるゝもまた然り固り博學廣聞の王は今更説ふに及びざれども越王公賤の吳の國に窘らるゝ事三年新より臥石淋を嘗し遂に會稽の戦ひに勝利を得て耻を雪む將魏主曹操の度々孔明が謀計は陥て敗績し胃を棄罷を剪しかる末終に蜀を亡せり是皆一旦の敗れ心を屈せざる大丈夫の行迹にして末代の龜鑑たりと言を讀して諫め争といへとも國姓命の猶頭をかたむけ默然たり時は白髮の老將衆は挺て聲を勵し延平王何を惑玉ふ事の甚だしきやと呼び諸人駭て是を見れば則ち中軍の都督魏良あり眼を睜て曰けるに隆武帝曾て王の忠義を賞して國姓を賜ひ朱成功と呼玉ふ豈尋常の事ならんや明朝の治世三百余年十五代の王の諸王子凡百を以て爵へし然るも今一人の監國なし王永曆帝の消息を詳らかよし若晉退極らば王代て監國の司をあし玉ふべき事其任たり然るも時務を察せざして無謀の戦ふ命を損さば隆武帝の遺詔も背くあり請萬全の謀をおもひ玉へと諫めければ五行鎮の諸將も列位志を吐て退陣を勸む國姓命の本意もあらざれどもさのみにて漸く諫を納諸將も別を告三千騎よて其夜をこくと鎮江さして援落しけるに朽骨かりし形勢ありけり

○南北大戦三金陵

聖に北朝の順治十五年丑五月四日北京の援兵二十余万騎南軍の背に襲ひ逼る南京の貝勒王是を見て龍の雨を得るが如く大い勇み是も二十萬騎よて出張す金陵さしも廣き地ありといへとも山野みち軍塞と成り南軍の延平王を落したれば心安しとて義を金石に比し命を塵芥より輕んじて一步も退く心なく五萬余騎を勝り二隊に分つ前軍の提督陳豹同董禮左軍林勝同翁天祐右軍馬信後陣の總領余申提督魏良其他援勦鎮宣毅鎮の諸將今日を限とおもひ定めし事なれば殺氣天を衝回天の威を顯して鯨波一聲山野を動し南京八府の勢二十萬騎か竹葦の如く隊へし陣へ鉄炮石炮を撃かけ攻入に難軍も貝勒が令よ從ひ毒箭を雨して攻戦ふ陳豹の何卒貝勒を討べやと自余の敵への目もかけず敵陣深く斬入て人を斬事草を薙がごとく金剛神の怒を見し雲の如き敵中を縦横する事七度よ及べども貝勒王よ不遇其身も箭を負こと篋の毛のごとくも小傷重傷十余ヶ所を負戈を杖よして小間息を憩る所へ杜萬禽單孫といふ二人の胡將比しく馬を逐て撃て蒐る陳豹の血よそゝ眼を瞋し戈をからりと棄帶たる倭刀を援挿し兩人を迎へて挑み戦ふ三馬の回る事巴の如く喚叫んで或は斬或は斬れ半時ばかり争ひしが遂に陳豹万禽を馬より下へ斬て落せ其間も單孫三叉の戟を執伸陳豹が胸板を望で丁と刺けるも拳下りて高肢を突通し陳豹猶も屈せざ戟の柄を左手よ握り右主の倭刀を閃かして單孫をも兩斷とあすされとも其身も重傷も眼くらみ

て働く事能はざれば終は自己首刎て死しけり高招林陳魁の敵の二万騎を圍まれ三千余の勢も或
 の討れ或は擒とありて只二騎を討まされ俱に馬を双東に馳西に蒐て虜兵を斬こと數しらず血煙
 散亂して紅の霧を降すがごとくされ北兵怕をあして只遠箭を射る是に依て陳魁の立座も成て
 死し高招林の自裁して死す茲にまた万禮の一万騎の兵を左右にし貝勒が麾下八万騎と駭合せ卯
 の刻より己の刻まで挑合敵を夥しく屠殺し部下の兵も漸々滅じて百騎の不足ありぬされ
 とも万禮敢て屈せざる是も貝勒と刺違んと其旌符を的とし群る歩軍を前後左右に擁拂て進む所
 廣老虎といふ韃の驍將六十斤の斧を揮て微塵もせんと撃て蒐る万禮得たりと渡り行四尺も余る
 倭刀を電のごとく弄して請つ流しつ戦ひけるも廣老虎の數度空を撃て腕萎力弱りけるところ
 を万禮おつと喚て横さま斬ておとす續て洞鬼山といふ虜兵長鎗を捻て万禮を撞てかゝる万禮
 同く對合せ秘術を盡して争戦しこれをも刀下し斬て落す又北軍の中より震輝陳蠻といふ兩將万
 禮の驍勇を見て嗚呼がましと二人比しく蒐來たつて左右より無手と組万禮の數剋の闘戦も身力
 頗る勞たりと雖猶物の屑ともせず先陳蠻を播抓で目より高く指上弓丈三丈許投遣ければ士
 卒二人を打殺して陳蠻も微塵も成て死したり萬禮また震輝を鞍の前輪に捻伏双手を咽喉にかけ
 て一緋しめければ六穴より鮮血を吐て息絶ぬ然るも一枝の流矢來て萬禮が眉間の真中をくつさ

と射たり大事の傷なれば俛首して伏て死す是等を始として余申馬信其余の諸將も火出る程戦ひ悉
 く戦死し黃昌と戴槌との箭傷を得て擒となりぬ此日虜軍の斬取首三萬余も及ぶされとも北軍も
 戦死七万も余り將校八十員を討れければ貝勒王舌を震して恐れ駭か剛將の下も弱卒なしとい
 へる古言空しからず余いまは斯程の強敵を見ずとて屢賞歎し討とりし首級を點檢せしむるも
 國姓爺が首を見ずと告靴子降人を曳出して推問するも昨夜已に鎮江へ退けりと曰靴子貝勒王よ
 謁して曰國姓爺已に鎮江へ走りし由降卒いへり渠今勢を拆き將を討せて勢ひ究り力盡たり此機
 も乘じて鎮江へ進發し一戦は鄭賊を屠殺して永く災害の根を斷べし貝勒王首を振て曰兵書もも
 窮寇の追べからずと謂り況や鄭森の勇力變増も勝しのみならず智も又韓信も譲らず敢て侮る
 べき敵もあらず決して追事あかれもし又渠を討得るとも其杖葉義を唱へて兵を發し寇すべし我
 が順治爺の天下を平定し玉ふや仁徳を尊んで殺戮を好玉の彼鄭森の天下の義士あり強て逼り
 殺すべからず只徳を施して心服するを待も不如もし渠順治爺の聖徳も懐も南海の小島も據とも
 是九倉の一粒滄海の一滴のみ何の慮る所かあらん須らく捨置て降卒等も勸め髪を雍順せし
 むべしと命じければ靴子反す詞なく承伏して黃昌戴槌を曳出し卿等心を改め清朝は順して髪
 を雍び過分の職位を授くべしと曰けるに兩將眼を瞋し靴子を白眼で曰我徒は是天朝の遺臣たり

何ぞ禽獸（ひんじう）と等（ひとし）く義（ぎ）を棄（す）て生（なま）を偷（ぬす）み不（よ）毛（もう）左襟（ささき）の虜奴（りよぬ）と膝（ひざ）を屈（くつ）すべし無益（むやく）の舌（した）を動かさんより疾（はや）と斬（き）る魂（たま）の死（し）して九泉（きゅうせん）と販（ばん）すと雖（いえ）魄（はく）の猶陽土（やうど）と侍（まへ）り爾等（なんら）が天爵（てんじやく）を得（え）て我徒（わがた）の如（ごと）く刑戮（けいりく）と臨（ま）を見んと散々（さんざん）と晋（しん）ければ靴子（くわし）大い（おほ）に怒（いか）り兩人（ににん）と極（ごく）枯（か）をいれて土（つち）の牢（らう）へ下（くだ）しぬ黃昌（わうしやう）戴（たい）楸（しゆ）狗（く）も晋（しん）て止（とど）まず古（こ）の伯夷（はくい）叔齊（しゆくせい）の道（みち）ある周（しゆう）の粟（ぼ）をだ（た）は喰（く）む自ら首陽（しゆうやう）と餓（が）死（し）せり況（いはん）や飛禽（ひせん）走獸（しゆうじゆう）も如（ごと）ざる無道（むたう）不義（ふぎ）の胡賊（こぞく）の食（しょく）をやとて兩人（ににん）とも（とも）飲食（いんじき）を斷（た）ち自ら頭（かぶ）を打碎（うちくだ）き獄中（ごくちゆう）と死（し）す是（こゝ）を見聞（けんもん）する者（もの）其（その）忠義（ちうぎ）を感（かん）ず哀（あは）れぬ（ぬ）のあかりけり

○國姓爺再復三思明

國姓爺（こくせいや）朱成功（しゆせいこう）の諸將（しよしやう）の諫（いさ）黙（もく）止（どし）がたぐ三千騎（さんせんき）よて鎮江（ちんかう）へ退（ひ）きける（る）敗兵（はいへい）追々（おひおひ）と馳（せ）回り金陵（きんれう）の戦（いくさ）ひの顛末（てんまつ）を注進（ちゆうしん）す國姓爺（こくせいや）天（てん）を仰（あや）いで歎息（たんそく）し五府六部（ごふりくぱう）の諸將（しよしやう）勇（ゆう）りとも馬（うま）を五十万（ごじゅうまん）の敵（てき）を前後（ぜんご）受（う）て生（い）る事（こと）を得（え）ん我曾（わが）て諸將（しよしやう）の戰死（せんし）をべり意（い）を知（し）といへとも人々（ひと）の忠諫（ちゆうかん）を納（な）ざるも心（こゝろ）あきま似（に）たれ（ば）己事（おのれごと）を不得（ふじ）退（ひ）きぬとて金陵（きんれう）の方（かた）を望（のぞ）み涙（なみだ）を流（なが）して在（あ）ける（る）翁天祐（おんてんすう）魏良（ゑいりやう）敗兵（はいへい）七千余騎（しちせんよき）を帥（し）て朱（しゆ）と染（ぞ）ながら馳（せ）回りける（る）國姓爺（こくせいや）愁（しゆう）の中（なか）も怡悅（いぎやく）し諸將（しよしやう）虜軍（りよぐん）の爲（ため）に圍（かこ）まれたれば一人（ひとり）も活（い）て歸（かへ）る者（もの）有（あ）まじとおもひける（る）兩將命（りやうしやうめい）を全（ま）うして歸（かへ）る事（こと）悦（よろこ）び何（なに）ぞ是（こゝ）は如（ごと）んと手（て）つから良藥（りやうやく）を取（と）て是（こゝ）を與（よ）ふ翁天祐（おんてんすう）魏良（ゑいりやう）泪（なみだ）を流（なが）して曰（いは）臣等（しんらう）王（わう）の爲（ため）に金陵（きんれう）の陣（ちん）と死（し）せんと旨（し）を定めしかとも然（しか）有（あ）て誰（たれ）か合（あ）

戰（いくさ）の始末（しまつ）を訴（う）べきとおもひ且（かつ）後の軍議（ぐんぎ）をもなさん爲（ため）惜（あは）れ命（いのち）を貯（たくわ）ひ回り（ま）り國姓爺（こくせいや）が曰（いは）金陵（きんれう）と死（し）する（る）の安（やす）く鎮江（ちんかう）へ回（かへ）る（る）の難（がた）し卿等（けいらう）か敢（あ）ん勇（ゆう）も非（あら）ん（ば）誰（たれ）か是（こゝ）を善（よ）くすべき定（さだ）て北虜迹（ほくりうと）を追（お）て寄（よ）る（る）べし我大將（われたいしやう）十五人（ごじゅうごにん）を討（う）ちせ兵（へい）を失（う）ふ事（こと）數（かず）えら（ず）纒（た）ふ（ら）一（ひと）万騎（まんき）を討（う）ちなさるといへとも皆是（こゝ）義氣（ぎぎ）金（きん）鐵（てつ）の勢（せい）なれば此城（こゝ）は立（た）て籠（かこ）り（て）糧軍（りやうぐん）を引受（ひきう）て潔（けつ）く戰死（せんし）すべし翁天祐（おんてんすう）魏良（ゑいりやう）大い（おほ）に諫（いさ）めて曰（いは）是（こゝ）は決（けつ）して無（な）用（む）あり臣等（しんらう）万死（まんし）を凌（しの）ぎ回（かへ）れる（る）王（わう）は此意（こゝろ）有（あ）んことを畏（おそ）る、故（ゆゑ）なり一旦（いつたん）東寧（とうねい）と歸陣（きせん）し兵（へい）を調（と）へ駒（こま）を足（た）して今日（けふ）の耻（はじ）を雪（ゆ）玉（たま）へと諫（いさ）めければ周全斌（しゆうぜんひん）も俱（とも）に言（ことば）を盡（つく）し歸陣（きせん）を勤（いそ）む（る）と然（しか）らば退去（たいそ）すべしとて翁天祐（おんてんすう）魏良（ゑいりやう）を先陣（せんちん）とし周全斌（しゆうぜんひん）を殿（でん）として夜（よ）に紛（ま）れ鎮江（ちんかう）を涉（せ）り崇明（しゆうめい）へ走（は）る（る）南（なん）京（きやう）より還（かへ）つ（る）討（う）ちの兵（へい）も來（き）され（ば）安（やす）々と崇明（しゆうめい）關（かん）は着（ち）し繫（つ）き置（お）たる軍艦（ぐんかん）ととり乘風（りやうふう）と乘（ま）じて東寧（とうねい）と回（かへ）り今般戰死（こんぱんせんし）せし大將（たいしやう）十五人（ごじゅうごにん）が靈（れい）を神（かみ）と崇（あ）め十五字（ごじゅうごじ）の祠（やしろ）を造（ぞう）營（えい）し犠牲（ぎせい）を供（とも）へ國姓爺（こくせいや）自己（おのれ）忠良（ちゆうりやう）を祭（まつ）祭（まつ）洪（かう）旭（しやく）健（けん）黃（わう）廷（てい）林（りん）勝（しやう）翁天祐（おんてんすう）魏良（ゑいりやう）周全斌（しゆうぜんひん）等の諸將（しよしやう）と晝夜（しゆくや）軍議（ぐんぎ）を凝（こ）し専（せん）ら國家（こくが）恢復（くわいふく）を謀（はか）り外更（がいぜい）も他事（たじ）なし其（その）の且（かつ）措（そ）清朝（しやうせう）の順治（じゆんぎ）爺（や）の去（い）る年（とし）より諸道（しよたう）を巡（めぐ）り有（あ）しが河南（なん）道（たう）よて蒼梧（そうこ）の變（へん）は罹（か）玉（たま）ひしか（ば）南（なん）北（ほく）兩京（りやうきやう）の百官（ひやくくわん）大い（おほ）に駭（おど）り赤子（せきし）の母（はは）を喪（う）ひたる心地（こゝろ）し國哀（こくあい）を發（は）つ（つ）共（とも）天下（てんか）一日（いつにち）も君無（きみな）く有（あ）べから（ず）を群臣（ぐんしん）朝廷（ていてい）に評議（ひやうぎ）して太子（たいし）を寶位（ほうゐ）と即王（つげ）と仰（あや）ぎ翌年（よくねん）の春（はる）康（かう）熙（し）と改元（かいげん）し天下（てんか）大赦（たいしやく）を行（おこ）る去（き）年（ねん）國姓爺（こくせいや）南（なん）京（きやう）は敗績（はいせき）してより後（のち）の閩（かん）の地（ち）も靖（しやう）り四川（せきせん）の賊黨（ぞくたう）も勦（と）り就（しゆ）四海（しやうかい）一統（いつたう）靜（せい）謐（み）して天下（てんか）全（ぜん）く清（せい）

の代と成ぬ康熙帝又天の縱る明君聖智廣大にして萬民を撫育し親皇極殿に御ありて朝政を正し李蔚明珠馮薄を大學士となし黃樞を吏部尚書清標を戸部尚書吳正治を禮部尚書宋德宣を兵部尚書朱之弼を工部尚書魏象樞を刑部尚書とし百官一時の賢才を挺で諸道に學校を開き十六條の聖諭を頒ち文武の道を講せしめらる時東寧の國姓爺の時々味方を招き四五年を経て七萬騎の勢を成ければいさや七閩の地を恢復しそれより漸次蠶食して南京を攻下すべしと洪旭戴捷を先鋒とし翁天祐周全斌を後陣と定め自己の嗣子錦舍才と俱に中軍とあり清朝の康熙六年四月上旬軍艦の纜を解順風に乗じて思明を押渡り陸上にて陣を張此時思明の鎮護孟季年の俄に港寇の到り駭き福州へ飛馬を立て援兵を乞自ら三萬騎にて城外十里に出屯を張南軍の先鋒供旭戴捷勢を押し出して鐵炮石炮を打かけ喚叫て撃て蒐る孟季年が部下の將は邵若虎といふ者一萬五千騎を率して南軍は蒐合せ同く鐵炮毒矢を放し関を發て攻戰されども虜軍は久しく軍陣は臨されば進退自在を得ず南軍は晝夜訓練せし逞兵なれば其勢ひ疾風の起る捲が如く忽ち敵をまくり立人馬を討事夥し孟季年の味方の敗色を見て勃然と怒り麾下の軍を帥て殺出し先陣を扶て敵は當る國姓爺が世嗣錦舍生年二十才の若將あれども父祖の勇氣を受けて身丈七尺の向とし臂は千斤を掛る臂力ある上諸般の武技は達しければ金龍の盔を頂き柴錦の戰袍を披掛

白馬に跨りて四尺余の倭刀を打振先陣は蒐到りて北軍はわたり合先一刀に岩虎を斬て落し猶も戰場を縱横して馬に乗たる者だも見れば忽ち斬て落す是が爲に虜騎討らる者五將さながら魔利支天の荒たる如くなれば孟季年が勢戰慄して弊走る國姓爺の味方の勝利を見て鼓を打鉦を鳴して勢ひを扶け大海の打如く殺到しければ孟季年堪かねて敗績し城中は閉籠て防禦を南軍の勝に乗て城を十重廿重に圍み三日の間息をも繼せず攻立る城兵は火急の籠城は兵糧乏しき上士卒敵の猛威は怕て振々は落行援兵いまだ來されば遂に城を守る事能はざり孟季年妻子を車に乗て夜中に入城の後門より忍び出福建をさして拔落し是に依て砲兵降旗を建て助命を乞國姓爺降を許て城中に入手始よしと祝して牛を宰し大宴を開き士卒を勞ひ此機を弛す小壘々を追落し福泉障三州を恢復せんと其軍議を催しける

○清帝送三節芝龍講和

福州の牧李馮の孟季年が註進し驚き軍勢を募て思明を援んとする内早くも孟季年敗走し來りければ益々駭き其旨を南京へ飛馬にて註進し軍を整點して思明へ進發す其勢八万五千余騎とぞ聞えし國姓爺斯と聞て敵を境へ入立と七万騎を三隊に分ち福州の境なる郊野に出屯を張北軍も是と對陣し互に戰書を通勢を出しけるは北陣の門旗を開て一員の虜將數十騎の部將を左右に

して徐々と馬を出し鄭成功出よ一言を曰んと呼る南軍是を聞て同く門旗を開き世副錦舍周全斌
 供旭の器械を持せて左右へ従へ馬を出す將馬上に禮を施し問て曰來將の鄭成功か錦舍が曰余
 の鄭森が嗣子錦舍なり敵將の姓名をも聞ん虜將聲は應て我の福州の都督李馮をり抑先朝の時
 爾が父鄭成功南原に敗し鎮江へ脱落せし初諸將追討して鄭族の根を斷葉を枯んといひし先帝
 順治帝鄭森が忠義を惜み諸將を宥て逼り伐しめ玉の毛故は鄭氏万死を出て南海に飯事を得た
 り是先帝の仁恕よあらずして何ぞや加之其以後も鄭族大冤の跡を潜る事を知といへども敢て
 征兵を向られず況や鄭芝龍は於ての今以て上賓とし朝は覆し夕は宴し枕を高して老を頼りしめ
 玉ふ然に鄭森其徳は伏し飯降するかさもなく海島を守りて國朝に寇をまじき猶來て邊境を
 侵し黎民を煩はし事不義無道といふとも飽たらせ所詮海島の微勢を以て國朝に敵せん事の蟻
 の浮屠を崩さんとするは比しく勞して功あさのみならず遂は族滅を免れし唯速に惑を棄て
 降禮を勤よと父鄭森は曰とを呼りける錦舍勃然として曰虜奴が言太だ無禮なり我が大爺義
 を唱て南京を恢復せんと破竹の勢ひに乘一舉は崇明鎮江を攻下し繼て金陵の三門を攻破り己
 は本府をも襲ひ取ん事手裏は有ける天の期いまだ到らずして兵士離散したるを以て櫓を弛東擊
 り驅る縦ひ百萬騎にて追捕する共擊散して回ん事何の怖か有べき爾が徒大爺の武勇は群鳥

て追討する事能はるを却て仁恕と呼り其強弱を辨んとする偽言耳將老を賓とし者を頼
 るは是彌妄言なり其鋒を以て制しがたさを量り奸計を以て擒とし人質を取て我が父の銳氣
 を折んとす是豈大丈夫の所為あらん胡賊の斯まで遂き事をなしても勝利を貪べけれども明朝
 の粟を喰者の匹夫といへどもかゝる不義を行はず爾安よ主の徳を稱すといへども吳三桂を扶助
 を名として國家を奪ふ大惡無道誰か是を仁とし徳とせん見よ先爾を屠殺し天誅の速なる
 を見よとて後を顧て應て南軍咄と鯨波を發して押出を李馮も大いに怒て陣中より同
 く隊を押し出し披露して戰を交ゆ去程は兩陣より射違る矢玉は白雨は霞の輝て飛が如く形軍
 馬集合せし喚叫で争戦する程は郊野忽ち修羅闘場と變じ血の紅蓮の浪を揚戈戟の劔山の刀樹
 を鳴す如く汗馬足音金鼓の音天は徹し地は響て夥しかりし光景なり錦舍は血氣の青年なれば衆
 は挺て勇戦し敵將を斬事七八騎猶も都督李馮を討んと敵陣は深入し忽ち虜兵の爲に圍籠られ左
 右前後に敵を請已は危く見えける所は忽然として北軍亂れ騒ぐ錦舍敵はあがら我を救ふ何者
 をと見やるは是別人ならも五府の一員周全斌なり錦舍が敵に圍まれしと聞て阿修羅の怒れるが
 如く驍勇を表し雲霞の如き敵を堃立て來れるなり錦舍は力を得て李馮が副將黎于吉といふ者
 を一刀に斬て落し周全斌と雙て敵を斬靡難なく圍みを堃出けり是より前國姓爺の後陣の勢を帥

て路を横て李馮が中軍へ撃てかゝる李馮不意の敵に駭きながら隊を整して是と戦ふ然とも前路の争戦南軍強くして北軍色めき立たるよ中軍また國姓爺が鉄騎に苑立られ遂に隊を七烈八載よせられ堪かねて福州へ敗走を南軍勝よ乘して追討し首を得る事二万余よ及びぬ國姓爺大いよ勇み凱歌を唱て軍を班て思明よ回り福州を伐べき軍議をなす然るよ北朝の康熙帝の南軍またも閩地を侵すと聞玉ひ群臣を集ひ詮議有けるの先帝德澤を比し施し四海已よ平定しけるよ國姓爺猶王化よ伏せも閩地を侵す干戈を以て是を制せんとせば兵弊民困んで又擾亂の線を引出すべし不如鄭芝龍を宥して鄭森よ返し渠が憤怒を宥め福州を興へて官職を授け永く我が清朝よ臣たらしめんよひと詔命ある群臣王命を德として承伏し尙書吳靖治を勅使とし鄭芝龍を興よ乘しめ北京を啓行し福州へ赴しむ此時國姓爺の福州の郡縣を侵し李馮と戈を争ひ交戦止時なかりけるよ忽ち北京の勅使吳靖治鄭芝龍を送りて南塞よ到り王命を述て和を講じ福州總督の金印を出して清よ歸順せん事を勸む國姓爺先父が安寧を悦び吳靖治よ對して曰森不敏なりと雖明帝國姓を賜の憐恩を荷べ命有ん限りハ國家の恢復を謀る事我が任たりされとも清王老父を贈返さるゝ恩も重れば一旦軍を収て歸るべし但し官位を受けて清朝の臣たらん事ハ我決して是を不爲とて金印を推返し酒宴を設て吳靖治を饗應し金銀絹帛を贈て勅使を回しめ其後軍を收め兵船よどり乘東軍

よ回りけり是よ依て閩地の亂頓よ治りければ孟季年書よ依て思明を護李馮も福州の府城へ歸陣す諸將治の北京へ回り康熙帝よ謁して國姓爺が封を不受兵を収て歸陣せし旨を奏しければ帝大いよ感賞ありて曰く明朝武臣多しといへとも鄭氏父子のみ生涯其忠義の節を改む渠等をや威武よも屈せず富貴よも蕩されぞと謂し噫呼鄭森父子ハ眞の大丈夫かなとて屢是を賞美ありけり

○國姓爺得仙書於天柱嶺

去程よ國姓爺の父鄭芝龍を得て回りければ林氏を始諸部の將卒死したる人よ再び遇ととく悦び勇み是を賀すされとも鄭芝龍の却て喜びず國姓爺よ謂て曰明朝の命運盡て皇爺跡を消諸臣或の死或の降りて清朝天下を一統すと雖猶爾等父子有て志を屈せず微勢を以て度々強清を犯す茲を以て我清よ虜とありて在とも心少しも患へば然よ清帝爾が勇武を拉事能はず我を餌として爾が銳氣を拆く爾何ぞ其計を覺ぞ父子の親を先として君臣の義を後よするやと叱しければ國姓爺恐て曰森元來忠孝兩ながら全き事能ざる事を知といへとも奈何せん皇爺迹を失し玉ひ其余の皇子も在り誰が爲よか清と天下を争べき疾より首陽の餓死よならひて清よ臣たらざるの義を全せんどの思と雖眼前父を擒よせられ爭か是を他よ見るべき所詮命の有ん限ハ清よ敵して身を忠孝の爲よ抛んと欲せしよ圖らず清帝父を贈り和を乞是敵の計略といへとも且ハ天我が孝心を

憐み玉ひ再び父の靈頭を拜する事を得せしめ玉ふあらめ依て其恩をおもひ一旦和を納て軍を敗
 ちしへとも争か國家の仇を忘れしべき表の父を返せし情も伏せし体をなし内々兵卒を調へ糗草
 を足して敵の不虞を襲ひし願くの大爺怒を宥め老を此島に養ひ玉へと曰ければ鄭芝龍も心和
 是より風月を翫びて辭よ老を養ひけるよ其翌年鄭芝龍一朝病よかりて打臥ければ國姓爺父
 子大いよ駭き醫官に委ね自ら衣帶を解き盡々の侍病手を盡しけれども其詮なく遂に九泉の客と
 なりぬ國姓爺を以て錦友林氏其餘の將卒人民よ到るまで悼み哀む事大かたならぬ鄭成功の禮
 を厚して骸を葬り靈を一社の神に祀り死よ事ること生よ事か如く哀を發して喪も籠りけるよ
 魏良戴健も打續て老病よ死ければ國姓爺益歎を重ね快々として年月を送る程よ光陰の押移る
 事流水の如くいつしか三年の喪畢けるよより喪服を脱で祭服よかへ新よ父の靈を祭り金銀絹布
 を士民に施し賑し惜久しき鬱悶を慰んと陳良只一人を從へて天柱嶺よ登り往々風景を眺望しけ
 るよ山隘よ當て白氣隱々と立所あり國姓爺大いに恠み陳良と共に其所よ分登見るよ一座の石廟
 あり幾星霜をか歴けん縁の苦むして葛蘿這まとい半の土よ埋れたり白氣正く其廟内より立けれ
 ば國姓爺陳良を顧て曰爾其石廟を開き見よ陳良諫て曰王の命ありと雖此石廟は何の神あるを
 しらず安りよ開かば是鬼神を侵すなり古今古廟古墳を開きて禍災を招きし例少からず須く此

儘に捨置玉ふべし國姓爺首を揮て曰智者の不惑勇者の不懼と云りそも此廟の此山よ有を土人も
 知事なければこそ人の踏分たる路もあらず然よ今我眼よ遮るの廟神廢れたる祭祀を興させんと
 請ものか何よもあれ檢見て正き神ならは是を興し祭るべし又惟き廟あらば破却するとも何の
 怖か有べきといふよを陳良已事を得ず葛蘿をはらひ荆棘をわけて兩扇の扉を開き内よ一箇の坎
 あり暗として其深淵を知らし然とも主命背がたく草を束て炬火を造り火を切出して是よ移
 し搬照して内を見るよ思しよりの深からず中よ一箇の石匣あり顧て是よ手を掛けて取出し國姓爺
 が前よ呈を國姓爺甚のた訝りつ、匣の蓋をとりて見れば一枚の銅板よ伯温封之待三鄭森
 田の劉基が字なり彼博學廣才よして能人の吉凶悔吝を辨り國家の興廢を前知して讖文を止め置
 しよ其辭三百年の後よ及んで分毫も違ひぬ先年閩賊帝都を襲し時よ崇禎帝劇伯温が封せし秘室
 を開き秘機の書軸を内覽有しよ悉く符節を合せしが如しと世人撰て伯温が神よ通する卓見を賞
 賛せり然るよ今此石廟よ此匣を納め銅板よ余が名を書して開を待と書せしを以て考ふれば四
 百年前より余が此島よ來るを知て此所よ此廟を營し者かと頗る奇異の思をさし氣を収めて恭
 しく石匣を開くよ香氣馥郁として芳しく裡よ一卷の書と一箇の藥器あり益異みて先藥器を開

見る一粒の丹丸あり其匂ひ透る薫じ芳しき事豈に物おし古の買充が女韓壽は懸想して倫み
 與へし西域の奇香といふとも争か是より及ぶべきと歎美し借書を開き閱するは伯温自ら數千言を
 記したり其文辭奇絶にして皆以て仙家秘訣なれば大い喜び天を拜して丹丸を服し仙書を懐
 よし陳良は命けて匣を廟内に納め扉を以前の如く鎖しめ借曰我はからず伯温尊師の遺書を得且
 仙丹を服して長生不老の道を得たり你此義を決して人漏す事勿れ若半言よても仙機をもらさ
 べ印時よ命を損すべし陳良大い畏て曰王もし不死の道を得玉の清を伐の大義を奈何なし玉
 よを國姓爺が曰師の遺書よ是を載玉へり明朝亡滅清是よ易て天下を保つ事素り天數の然しむる
 所なれば人力の能およぶべきよあらば余期を待て計旨あり唯何事をも口外する事なかれとて深
 く誠め遠く柱嶺を下り府城へぞ回りける

○國姓爺尸解并清帝治世

斯て國姓爺の府城より回り柱嶺よて仙書を得たる事、妻林氏嗣子錦舎も深く隠し國政を悉く
 く錦舎も執行しめ其身の閑室は幽居し人を避て晝夜心を練ける、或日錦舎父も問へき事有て
 其室よ入て見よ國姓爺拱手端座して在錦舎近くよりて安否を問よ更よ答を大い訝りよく
 探り見るよ死して程經しと覺しくて四肢氷より冷たり錦舎仰天して林氏を始め諸部將士を呼

聚斯と告げれば各々手の舞足の踏を忘れ苑來り此体を見て聲を放て哀哭す獨陳良は天柱嶺の一
 條を知れば必是尸解の法を以て仙し去しなるべしとおもふといへとも嚴く誦を受たれば絶て
 口外せず林氏錦舎の其故を知されば天よ哀み地よ悲みけるを諸將種よ謀め思め泣く軀を棺よ
 收め扱して嚴よ喪の禮を行ひけるが其葬よ及んで棺の輕き空棺の如くなれば諸人大いよ
 怪み陳良よ密よ告陳良さればこそと思ひあがら色よも表さざ何ぞさる理あらんとて暗に棺を
 開き見るよ只衣冠劍履と長八尺計の竹有のみよ更よ尸なし是よ依て愈其尸解あるを知ら
 がら尊骸在りと盲て遂よ鄭芝龍が墳の側よ葬り同く一社の神と崇む是清朝の康熙九年庚戌の
 十月二日あり東寧の人民父母を喪し心地し哀動して止む去程よ北京へ鄭芝龍國姓爺父子相繼
 て死去せし由聞えければ庚熙帝初て意を安んじ玉ひ其喪を吊ひ且飯順を勤ん爲禮物を齎して招
 撫使を東寧よ到せらる然とも錦舎の父が志を嗣で封を辭し招撫使を重く擧して歸し猶も中國を
 恢復せんと謀れとも康熙帝の仁徳四夷八荒よ溢て靡ぬ草木もあらざれば輕忽よ手をさしがたく
 時を待りちよ星霜いつしか歴て錦舎も東寧よ死し其世嗣奏舍康熙二十年よいたつて終よ清朝の
 封を受臺灣東寧王となりしが奏舍嗣子なくして鄭氏の血脈絶果けるを是非もなき子、北京よ
 康熙二十一年正月皇帝朝廷よ御宴を開かれ百官と俱よ四海の昌平を祝し漢柏梁の體よあらひ

て聯句をなし玉ふ便ち震翰の序あり御製の句よ曰

麗日和風被三萬方一

と唱玉へハ國學士勳德洪御聲は應じて曰

卿雲爛熳彌三紫昌一

それより一百の官員句毎韻を押百句を聯ける魏象樞是を梓よして世は驚き抑此康熙帝の先帝も勝る英主よて仁慈深く民を撫育し先王の禮樂を重んじて萬機の政至正ありしかば萬民叛伏して皆太平を樂みけるハ目出度かりける例なりけり

○李勇斬怪獸於沢塘一

夫國家の治亂興廢ハ天數の然らしむる處よて人力の能及ぶ所よ非ざるべ明朝三百余年の治世も永歷帝よ至て斷絶し清朝また天下の政を掌握し康熙二十二年よ及で東寧の奏舍も終る臣伏しければ清朝の德化四野よ普くして靡ぬ草木もあらざりけるは康熙五十九年よ當り臺灣の地大い地震して山岳是が爲よ崩れ大地の破裂する事或ハ一丈或ハ二丈におよび其中より泥土湧出民屋の傾覆する者數をしらぞ且海水大いよ溢湧て平地水深と一丈余よ到るよ上墩鎮より下萬民よいたる迄此地變を見て顔色を失ひ正よ是臺地滅却するの凶瑞よやぞ怕惑茲よ臺灣の地

一坐の臺あり古ハ紅夷の名匠が造立たる樓よて礎深く濬堅して其高きと疊々として雲を凌ぐ外國の賓客此臺を見んか爲よ波濤を犯して此地よ來る者多し是よ登て眺望すれば臺地の山川一望の中よ竭て其絶景言語よ絶たり故よ臺灣の名を呼り然るよ此臺今日地震の爲よ崩壞れぬ諸人大いよ怖て其凶兆を危みかふる所よ又此地よ名高巨石あり平日濶よして夜ハ光を放ち雨中よハ氣を發す故よ世人稱して生石とす然よ此石故なくして忽ち兩片よ割れぬとの体刀をもつて劈きたるがごとく一片ハ水を出だし一片ハ草を投れば忽ちちもえて火となる是凡事よあらせと諸人益不平の思ひをなす又此地よ一人の儒生あり邵康節が占法を傳へて易學よ達し其吉凶悔吝を指こぞ神のごとくありけるが生石の破裂せるを見て筮を數へ卦を起してトハ眉を蹙て曰是必き久しからずして干戈發らんと嗟歎しぬ然とも世人いまだ是を信せず時よ漳の長泰の人よ姓ハ朱名ハ一貴と云人あり其祖先ハ明の大祖皇帝朱元璋の後裔よして小名を朱祖といへり人よとあるよ及び博く諸史百家の書よ通し就中能探吳が兵法を覺り張良孔明が智を吾物とし今臺灣南路の村落よ居し其志平素よ中華の北狄よ投したるを歎き一度義旗を開て父祖の仇讐を報せん事をおもひ時々英雄の士よ交を結びぬまた其頃臺灣天柱嶺の邊よ奇性の惡獸出其者たるや身の丈一丈余よして而長く馬よ類し全身火よりも赤く紅井の髮面を覆ひ長きと腰を過眼ハ光りて

百煉の鎧朱を灑たるが如く其走る事疾風の如し常人畜の分ちなく取喰よく水を奔り溪を飛
 脚々も似て脚々もあらず更其名を知人なし廣越の人麻生といふ士是が爲喰われ又或時樵夫
 五人岩頭柴荷を下して息ひ各飯を喫せんと欲する處例の惡獸忽然として前よりたり樵夫
 對て手を出し物を乞が如し樵夫等戰慄其食を乞事を察し何を辭する事を得ん飯骨柳よりあ
 けて與けれバ只一口よくらひ又其次の者も食を乞事始の如し斯して四人目まで食を乞て一口つ
 喰ひ五人目の者の前よりたり食を乞事前の如し然此者の疾喫してなかりけれバ奈何とも
 可爲やうなく空き骨柳を見せて其無を示しける惡獸大い怒り忽ち其者も飛蹴り引摑で首を
 捻斬すて口を付て其血を吸四人の者を見て生たる心地あく苦と叫で柴を捨魂を空よして雲
 霞も逃走り辛き命を免る事を得たりか、れバ諸人は是を怖る事蛇蝎よりも甚しく往來是が
 爲も絶々なり其後汎塘といふ處よて諸人駭立須臾例の惡獸こそ出たりとて東西南北も走り迷ふ
 然其比李勇といへる人あり明の李文忠の玄孫よして身材八尺紅顏滿面よして眼の朗なる
 星の如く武技群を出力量また衆も勝れ能鹿角を劈き巨木を拔豪傑なり此日丘家よ在て圍碁を見
 居たりける惡獸きたるといふを聞と比しく太刀を提げて躍り出此處彼處と走り廻り尋けるよ
 汎塘の邊りある巖の上よ立る者あり李勇瞳を定て屹と見るよ長一丈余り全身朱をもつて百度塗

たる如き異獸左の手よ長ある髪を掴み上凜然として此方を見る其眼の光り日は映じて院わたり
 恰も雷光よ一般たり李勇些も怖る小躍して大刀を真向よ挿し睨よる怪獸の遠く望がゆへ李勇
 が来るを知ざりしか近くなりて是を見付忽ち憤然として一聲吼李勇を目がけ飛蹴る李勇固り輕
 捷の達人なれば身をひねつて左右よ避ると二三度惡獸の只一抓よひもひけるよ李勇が爲も練れ
 て大い怒吼り牙を鳴して喰んとす李勇猶是を前後よかわし一點の窟を覗ひ大刀を擧ていつた
 と斯も肩尖より助をかけて斬込たり惡獸斬ながら猶勢ひ減せむ掻抓で喰付んとす李勇早く身を
 沈て咽喉の下へ首をさし付流口へ腕をさし込一反よ推倒し臟腑を掴み出よぞさしもの猛獸吼
 苦み手足を張て悶死しけり李勇頓て首を斬落し其髪を腕よからまさ提見るよ重と磐石の如し
 されども安々と提て百歩許歩けるが何にかせんと道側よ捨て其髪ばかりを斬て持かへる去程
 よ諸人李勇が惡獸を殺しぬと聞て我もくと汎塘よ走行見る者山の如く其死跡を見て舌を震し
 かへる怪獸を容易屠殺せし李勇が驍勇こそ怖しけれと其風説遠近も隠なし李勇の件の髪を持って
 前に圍碁を見たりし百姓の家よ到り髪を見せて其一五三十を語るよ主翁をへじめ隣家の者まで
 群りきたりて惡獸の髪を見かほどの怪獸を殺す事人間業よいならずと賞歎し尊び怖る事神人
 の如し主翁其髪を提見るよ長サ五尺よ余り紅の深して光彩あり亂し揮バ金珠鱗々として送り

散が如し寶も奇代の珍寶かちとて金十片を出して求ん事を乞李勇沸然として金を推戻し髪を主翁と與て從容として販りけり主翁の二なき奇物を得たりと愛翫しけるが其夕より俄に發狂し眼を瞋し大いよ吼り罵り人を見る毎に掴み裂とし遂に狂ひ死せ是猛獸の惡靈の所爲としられたり彼惡獸死しても李勇が勇威を怕けるよや李勇の寇せる事能はず主翁をとり殺けるに性しかりける珍事ありけり

○神通道人出三臺灣

抑臺灣の地の南北を二路分つ南千余里北千余里あり然に近比一個の道人出身材七尺五寸鬚鬚悉く皓白して顔の桃花の如く竹冠を頂き閃緞の道服を穿ち飄雲裘を掛藜の杖を携へ飄々然として東西南北の街を游行し人の吉凶を察し後事を示す事掌を指が如く毫髪も違となじ先頃此道人諸人示して曰此地太陽の氣地は復し發する事を得せ久しからずして地大は震動すべしと教しが果して旬月を経まして大地震せり是に因て諸民いよ一渴仰し神進道人を稱して尋ひ崇ふ道人また病者に遇ふ符水と與へ或は呪ふ悉く功驗ありされども一紙半錢謝物を受せ北路よての道人の符水を得て醫者目を開き南路よての道人の呪ふより蹙夫起たりと風聞し其余の奇特ともくあれは貴賤男女道路に香を焚隔て敬ひ拜し符水を乞ね道人或時諸民に對ひ你等

衆人能聞今歲四月の抄よいたらば大難は遇性命を保ち難からん我是を救へんと欲すもし災害を免んと欲せば其頃よいたり帝令の二字の紅旗を造りて普門毎に挾案を設け香を焼て拜せば自然難を免れ長壽を保べしと示す諸人大いよ悦び各々給ふ記して專準備を申しけり

○一貴見李勇於柱嶺

臺地は天柱嶺といふ高山あり往年國姓爺が大虎を撃し山あり嶺巒て九天を衝奇柏怪松枝を交へ雁の長空をわたり船の遠水を行寶は臺地第一の佳景あれば近き頃嶺は遠望をべき爲とて茶店を造り營み又一里ばかり下れば賓客きたりて居ながら釣をたるの廻廊を建たり是に因て四方の詩客文人此地よきたりて風景を翫こと平素なり或日朱一貴柱嶺に登り茶亭に息て地景の清雅なるを眺望し古詩を吟詠して樂み居けるに忽ち一個の壯士戟を矛を括りて振盪たるがきたりて亭に坐し腰を懸る瓢の大サ一斗許もや入らんと覺しきより酒を器に移し粥を煮して且食且飲で縦に風景を翫弄朱一貴其表を見るに尋常と異なれば暗に心中に感じ想道今の代もかゝる豪傑在けるかな往古の伍子胥樊噲などが相貌も斯や有べきと賞譽し兼て大志を懐かかゝる英雄と交を結てこそと思ひ近侍て語合其姓名を問ふ彼士も朱一貴が人相をみて凡庸あらじとむもひ言を恭して曰僕の不肖なれども明の李文忠が玄孫も李勇字の子維と呼者よては朱一貴

か曰然らば刃塘にて恠獸を斬し人か李勇答て曰然り我祖父の明朝の事へ屢戦功ありて曹國公
 とある我の幼して父母は離れ淮南に在て成長しがあもふ子細ありて此地へきたり履を賣て
 世を渡れり請貴卿の大名を聞ん朱一貴心よ想道李忠文の明の功臣にして大祖の姉の子あり今李
 勇が言詔の裡は頗慷慨の心を含り是必き我と同意の人なるべしと早くも察し答て曰我の明の始
 祖朱元璋が後裔にして姓は朱名の一貴と呼りと自稱よむ李勇大いに驚き急よ身を屈して三拜し
 頓首して曰始より凡下の人あらまと思ひいへども何量ん明帝の皇孫よて在んどの不佞この地
 一移住せしめ公よ面會せん事を欲する故あり曾て朝廷天よ版りたる誠心進じて天良縁を下し給
 ひ今日始て尊顔を拜する事を得たりと大いに悦び且曰けるの尊公明王の貴胄として何ぞ北狄の
 爲よ膝を屈し給ふや願ひ大義の策をおもひ立玉へ我不肖ありとも一臂の力を助進せし朱一
 貴急よ目語して制し此處の客舎なり何れをか讓むべき先我草履へきたり玉へとて兩人茶室を立
 出柱嶺を下ぬ

○杜君英 怒 擒 三 隋 元一

茲よまた杜君英といふ人あり原の明皇の一族たりしは父の崇禎の亂よ討れ敵放火して其館火の
 爲よ燒れけるよ杜君英が母の幼き時より武技を好み勇力在けるが此時少も勵せま杜君英がいま

だ幼童なるをば懐き繩をもつてしかと其上を身よ懸付只一人落行けるよ健將の中よ是を見て鐵
 を擲て突けるよ事ともせず其戟を奪とりて却て敵將を突殺て連し健將十二人まで撞て落し諸人
 の目をかどるかまばかりよ勇戦し遂よ一方を斬抜て逃れ數月を歴て此地よきたり住す其後杜君
 英成長よ從ひ母の臂力を受繼で力百人よ敵し當世の豪傑あり殊よ醫療よ精かりければ家大いよ
 富たり杜君英天性仁慈深く貧民を恤みもし窮民の患病なれば藥餌を施して一物をも謝を受すま
 れども約定よ違者あれば決して是を許さず故よ民みる君英を貴び重むる事君父の如し杜君英また
 母の遺命を思ふて平日よ中華の北虜よ陥没したるを憤り不平を懷事久し然も縣令贈元といふ者
 殘忍暴惡よして下民を虐け妄よ貪て飽事をしらす是よよつて民を窮迫いふばかりなき處よ今
 般地震の爲よ屋を崩され津浪の爲よ家財を流されいよ一貢税調進する事能を其旨を歎き
 るよ贈元曾て承引せず貢物を欠者の悉く捕へて殺んと觸ながす君英是を聞て其無道を憎どいへ
 ずも怒を忍び多の貧民の殺されんとを憐み家財金銀を惜ず民よ借與へ貢税の半を贖しむ贈元
 是を受收て尙不足ありとし提轄百人を遣して貢税をはたらせもし贖ざる者の一々よ屠殺せば命
 ず提轄等命を得て走り散家々へ亂人民家の男女みも怖惑ひ門戸を閉て出合す是を見て提轄等大
 いよ怒り門戸を打破り資財を奪掠婦女妻妾を捕へて白晝よ奸淫す其狼藉言語よ絶たり杜君英

此由を聞て大い怒り一丈五尺の鐵棍を輕々と提て飛が如く馳到り汝等鼠輩杜君英在をしや
 すらと叫び立處は數十人を擊殺す提轄等此勢は怖恐し恰も蜘蛛の子を散すが如く後をも見せ
 して逃去けり百姓等大い喜び杜君英が前より拜伏し涙を流て曰尊公の救ひ玉ふはあらすんば還
 邑より人類絶いべしされば提轄等逃歸て斯と告ぐべしとさへ毒惡の縣令必定憤怒して躬きた
 るべし是を如何防いべき君英が曰噲元が暴惡の天の容ざる處あり生て置べき汝等を慮へし我
 奮て渠を擊殺しん此事官府へ馳へ追捕の兵來り自縛して罪は伏せんのみ汝等噲元が兵を防ぐ
 準備をよし如斯く計へよと指揮しけれは年來齒を切て怨み怒し土民前後の思慮も及びず
 皆承伏して杜君英が下知は隨ひ遊し竹を撓て弓とあしきをよりて絃とあし或は斧鉞取の未相
 たの棍鐵搭等をもち又竹を殺て鎗となして携へ君英が持揮を待君英土民半を分て手毎は石塊
 を持しめ噲元がきたるべき山隘ニヶ所は伏置今やと待かけたり是より前より提轄等の息を限
 り迷回り如斯のよし報じけれは案の如く噲元大い怒り此上の我其杜君英を蹴殺し次は小民の
 らを屠らんと圍敦無智短才の小人あれば何の慮もなく土民を侮り夷衣をも固を馬は蹄下
 提轄三百八ばかりを後より續て來の怒る如く喃々とつらやきて馳出し五里ばかり行て山中の左右
 切岸なる路の松柏森々たる處をとふる處はおもひよらぬ切岸の上は數百人咄と現れ出石を投

下と震の如く又殺矢を雨の如く射かけたり噲元はトめ衆人不意を撃れて隠る處を見ず又一
 群の土民殺鎗鐵搭を揮斧鉞を揚つ、縱横無碍に衝立るよ噲元が麾下の者一駭は採崩されさ
 んと敗走す噲元大い怒り固り馬術は達したれば鎗を撚て突て回り馬を飛して躓立る歩卒
 是は氣を侍て足を踐整て挑み戦ふ時一聲の號炮響とひとしく後の山間より又一群の土民起立
 眞兎も長八尺ばかりの壯士長き鐵棍を振て當を辛く擊殺そは一撥の大將の杜君英なり其形勢
 然として猛虎の群羊を驅如くなれば土民等是は從て捲り立る噲元が勢討る、者數知す殘兵は八
 方へ殘亂す噲元も二ヶ處の疵と受叫じやとおもひけん馬を鞭て逃て行を君英追躓させ雷の如き
 聲を發し噲元走ること勿れ杜君英此は在といひつ、鐵棍を執伸て馬の四足を踏ければ馬の倒る
 起立事能はせ噲元は逆も落て、森を君英棍を振上徹盡せんぞる勢ひなりけるが奈何おもひけ
 ん提轄を伸て噲元をつかみて脇狭み立あがりけるが鉄棍余りも強く適て歪ければ噲元を脇夾み
 鐵棍の盡を兩手よてためなはし杖を仗て立歸りは斯て郷中より到り噲元を衆人の中へ投上し汝一
 命を助りたくおもふや否やと云ふ噲元雨々と泣て願ひ蒙傑一命を恕し玉へと乞君英呵々とわら
 ひ汝暴惡貪狼として幾許の民を殘害を今汝が一命の惜をもつておもひ量べし如何や汝等此者を
 衆の儘に屠殺し多年の怨を散せよと指揮しければ老若躍上て大い喜び或は斬或は刺を身

跡を遺りなして屠殺し心地よしとぞわらひける是より君英の百姓を師て山中より入要害を擧て
もつばら籠城の準備をなし官府の征兵をぞ相待ける

○朱一貴結義於崗山

轉賊朱一貴の李勇を伴て我輩は歸り古今の盛衰を論て遂に大義の謀計を示合し是より
兩水日夜同志の豪傑をかたらふも七八員の英雄を得たり其徒より江國論陳福壽狂飛虎吳外服
阿三いづれも明朝の餘類鄭族の麾下の將の子あんとよて俱に清朝を恨む徒なれば一貴が大義
を聞て整龍飛躍の期を得たるが如く時々同志の盟をあす然も皆萬夫不當の勇ありて大將も任
まざるも堪たれば朱一貴斜ならず喜悅し崗山といへる山の奥をひらきて小壘を擧へ其許に住して
密々計謀を謀し事豫め定めりければ吉日良辰を占て大舉の盟誓をなし天地を祭り社を供
し牛を殺して會宴を開き列位欣然として醉を催さ處は小卒一人馳きたり即今山下より一隊の兵を
領したる大漢朱將軍の面謁せんと請いと報ず李勇大いに訝り是恐らく我徒が大義を企る
を知らざる者在て官府より追補の兵を向たるよりあらざるか遮莫何程の事有ん我一人山を下
りて蹴敵さんと圖致己は席を起んとす朱一貴暫と止めて曰余袖中より卦を設て占は天火同人の五
爻變を得たり是大義の同意の人きたれるならん宜く迎接して其人を見るべしと宿め小卒を命じ



函輝託林夫
人母子及其
妻孥於漁夫

純

て遊む小卒其意を得て立去少時有て一人の豪傑を伴ひきたる衆人是を見るも身材八尺有餘
して虎體熊臂威風凜々として相貌堂堂たり一貴大い悦び席を請じて曰豪傑何の示す處有
か光臨を惠み玉ふや願の其大名を聞ん彼人一貫を見て急も地を拜伏して曰下官の姓は杜宇の
君英と呼て父の明朝の事へ崇禎の亂に賊死し畢ぬ我の母の養育して成長平日は母の物語して明
朝北虜の爲に亡滅せしを悔み鬱々として憤をいださし然る縣令贈元貪狼にして民を虐め
つる衆民を殺んとす下官是を見るも忍び己事を得ず贈元を殺し己は大罪を犯したれば官府の
征兵を引受死を快せんとおもへとも多くの百姓を連累せん事を恨み黙止處も尊公大義をお
もひ立玉ふと聞悦み絶す百姓等を帥て馳たり願くの一卒の員は加へ玉ひらば大馬の勢を辭
しひつと曰よそ朱一貫大い悦び席を進て賜を與へ俱大義の計を論じ多の百姓を山中
に留て進退を習しめ斥候を南京へ遣して其動靜を窺しむ然るも一日斥候一人走回りて曰此頃
清朝へ渡海せし商客と同船しし渠が語りける頃日臺灣の僻郷縣令を殺したる旨朝廷へ聞へ
兵を差向んと専ら其準備ありと聞ゆへ報せん爲も早速馳回りと曰朱一貫出て實さも有べし
先なる時の人を制し先んせらるれば人制せらる事延引をべからず先此臺灣を攻取帯を堅し機
を量て清朝へ攻入なんと先數万の大旗小旗を造り兵糧武器馬具兵器なると有増調ければ吉日

を撰み南路の崗山に於て旗を揚抑此崗山の南路の邊界にして府治を距事三百余里要害堅固にして屈竟の地之此日朱一貴崗山の上なる神祠の前より大明帝命と書たる大旗を立其下は於て白馬を宰して天を祭り烏牛を殺て地を祀り諸將階位を守りて列坐し血をもつて盟誓を書し血を煎て盟ひ義を唱るの約をなす時より忽然として一陣の狂風發りて帝命の大旗を吹折ければ衆人大いよむどろき今義兵を擧るの時より臨み旗を吹折事奈何ある凶兆とやと心よわやぶむ朱一貴昂然として駭く色あく衆人騒ぐ事勿れ昔武王紂王が無道を伐んと軍裝せし日狂風吹て土砂を捲旗を折じが太公望是と卜て吉兆とし兵を退て終軍は打勝て周室八百年の基業を開けり且我昨夜夢見し處の神靈の告は應せり是必を神功を得の吉兆なるべしとて即時は神鳥龍旗を立かへるより衆兵初て心を安んぞ朱一貴命を下して杜君英の郷兵を帥て北路より進せしめ吳外汪飛虎を率て佐とし李勇の南路より向ひせ張看蘇降等を佐し副しけり

○一貴定計取各塘

時より陳福壽進み出て曰今麾下の勢を見るは僅に三百人より過ず此勢をもつて全營の敵軍は當ん事端細が奔を以て立車は向が如く青衛が海を埋んとせる譬も齊からむや朱一貴笑て曰否然らず軍兵の多寡はよらず只將の智愚強弱を號令の可否は依て寡も衆も勝大も小も制せらる今清朝

斬り治て上下泰平の化はこり武備は怠れば伐は難からむ但し情身方の諸將の人となりを見るは杜君英の智勇兼備の英雄なれども只短慮にして事の破を引出さん事を怖る李勇の志厚く然も狂狂として古の張飛が風ありて大將は任するは堪たれども恨らくは多く酒を嗜み稍もすれば其本性を亂る張看蘇降張河三等の尋常の者なれば論する處なし汪飛虎の其勇敢をいへども性躁しく智淺し御邊と江國論との學才ありて心も剛なり只綿密を過て機を弛ゆるを難とせしされとも皆普通は越たる人傑されば心を賣て我指揮を悖すは臺灣を攻取ん事袋の物を取出すより安く勝利を得ん事十日を出し御邊今夜深更に及て各塘は出で山々街々も夥まに旗幟を立偽兵の計を悉し百姓の耳目をみとるかしいへ然らば此一路の百姓は皆來りて従ひ伏をべし但し諸本は嚴く軍令を示し到る處の郷里は秋毫も犯すべからず只賺し論て隨從せしむべし然して降參の百姓は兼て造置たる幟を與へ其幟の色をもつて一郷くを分つべし決して混雜は與ふべからず我また兼て遠計を定めおきたれば各塘は只一鼓の下は取らん敢て兵の少きを憂とせざれ各塘を攻取のたいは兵卒を得べし南路の敵營は遠近ともは吾軍の旗のいたるを見れば皆膽を冷し魂を消て奔走ん其時より乘して晝夜長く驅て臺府は亂入し敵軍の不意を撃とあらば勢は赴を捲が如く大和を得ん事必定ありと辨舌滔々として懸河の如く演けるよぞ陳福壽大い悦び尋

公の神策實は孫吳が下に出ずと賞し兵を帥て各塘へ趣きけり斯て康熙六十年四月廿二日朱一貴が計を得て江國論陳福壽張着蘇降張阿三等の宗徒の人々皆行客の姿に打扮各々思ひくは各塘に往宿を借し素り各塘の旅人を宿す多ければ敢て疑者なく此徒を留む者其夜半過る比は忽ち四方は喊聲起りければ諸人大い周障狼狽し是の何事の起しよやと忙惑ふうち江國論陳福壽以下時分はよしと内より門戸を開き兵を引入異口は今聖王出て代を治んとし玉ふ従ふ者の命を宥し恩賞わらん不従者の悉く誅し罪三族も及んと呼ぶるを各塘の人民の俄の事にて風ひよりされば手の舞足の踏をしらず走り出て四方を望見るも山々街々數萬の旌旗月映ト天を翻へりて金鼓の響波震動して山岳も一度崩れ、ばかりおれば衆人却り戦さ何ぞ争ひ逆者あらん遠く地は伏して從隨せん事を願義徒是を敢して旗幟を與へ此勢を押立々々泰山も崩潰ん勢ひをなして敵の陣營は斬て入清兵の不意を撃れて驚き感ひ鎗と戈と闘て敵を防がんぞする心もなし義徒の機に乗じて踏込く斬捲よぞ衆兵何かの堪へさ一戦もだも及ばせ悉く捨て敗走す朱一貴少時追討させて軍を纏め敵の捨たる馬武器刀劍鎗戟兵糧等を多く奪ひ得て諸將將を分ち領しおもひくは鎧を穿ち器械を採馬を御して初て回天の勢を顯しぬ各塘の地方百里を及ぶ朱一貴が方寸の計にて僅一夜の間は陥れけるの奇代の妙算やと感せぬ者社なかりけり

○李勇直取三南路

千丈の塘も蟻穴より崩る、あらひ朱一貴一舉として各塘を陥て敵軍を退拂ひ各塘の人民は謀を授け其徒を帥て廿三日下淡水より船に乗じ東港を過其沿途の民百姓は告て曰せけるは今清朝正政を亂し惡吏下を虐萬民苛政を恨む此故は皇天皇帝土怒をさし臺灣の地種々の天變地妖ぞ現す我主上の明の皇孫として絶たるを興し萬民の困窮を救んと義兵を起し玉ふ故に遠近其德を懷事風草の偃が如し是に従ふ者の自然身を安じて德澤は浴し背く者の三族を殄せられんと觸流す衆民大いおとろきて遙く望見れば四方一面は皆明の旌旗にして雲の如く其向ふ處軍本法令を守り秋毫も犯す事なく殊に各塘の人民みか隨がひきたるを見て我もよくと咳伏して以て隨從せん事を願ふ是は依て其降を許し皆旗幟を與へ某村の赤き旗某の邑の青き旗とそれく色を分ち村々里々立しむ借二十四日下碑頭一屯し直ちに進み不意に出で南路營を攻め立る南路營の參將苗景龍卒の事あれば大い驚ろる出まは計なく守備馬定國を呼び議して曰賊軍不意に峰起して眉を燒の危急たり足下先手勢を帥て打向ひ守禦をさせ我其間を伍を整へ往て戦かふべし馬定國聞て微笑し逆徒峰起をも皆これ浮浪の窮士五七輩其余は皆農工商の徒は過す我眼より見る時の蟻の群るが如し何程の事をかきし得べし我馳向ひ一舉として蹴ちらし

けいべし將軍の侍臣と酒宴をなして我賊魁を擒きたるを待玉へと飽まで廣言し郎兵を引て馳向ふ苗景龍の馬定國が大言を信せず飛馬をもつて總鎮歐陽凱へ援兵を乞斯て馬定國屯を押し出して敵を遙望の明兵潮の湧が如く進きたる兵先なる大將の紅顏潤面にして眼の明ある星の如く身は鐵甲を披掛一丈六尺の綠沈鎗を提げ黒龍といへる駿馬を跨り是明の大將李勇あり馬定國喝て曰無智の鼠賊泰平の粟は飽あがり猶貪狼の心を縦よし逆亂を企る餘奇怪なり汝男子たらば我此輩を喫と憤聲を發して突かゝる李勇一言の間答も及ばず綠沈鎗を擧て是と向合せ戦ひ未だ五合あらざるに馬定國槊を擊落され大いゝ狼狽して漂ところを李勇遂さを斜に刺を馬定國早く身を翻して是を避馬は一鞭ぐれて空拳を揮て敗走を李勇大いゝ怒り雷の如く吼て黒龍一鞭を加へ飛が如く追付已に馬定國を一鎗刺んとする處は忽然として金鼓の音震發り深林の蔭より一軍殺出し大清參將苗景龍と書たる大旗を翻し眞先ある一員の大將方天戟を把延て馬定國を扶け李勇は撞てかゝる李勇些ども動せず景龍を迎て戦ふ其驍勇群は秀たれば景龍争か敵をべき未だ十合あらざるに力疲れ叶ひせして馬を回し馬定國と俱に逃走る李勇二將を討もらして益怒り長く驅て掩殺したる苗景龍馬定國大いゝ怕れて息を限り弊走る處も亦もひもよらぬ白頭山の嶺より鯨聲をとつと發し一彪の軍馬群り下る是の敵か身方かと疑ひ或て近

付まゝは是を見るは大明帝令と大字は書たる旗を立たり是明將江國論よて朱一貴が計を受各塘より陸路を歴て敵の不意に出たるなり苗景龍是を見て大いゝおどろき歎じて馬定國は謂て曰賊軍勇にして勢ひ當がたきよ尙また一軍加はり我軍の前後を擁たれば恰も盟の中の魚ひとしく遁るゝ道あし今我高き岡に登り敵軍を臨見て幟を揮て其圍の薄き方を指おしゆべし足下我幟の指方を擊破り馳抜て早く總鎮歐陽凱は調し謀を合して賊徒を屠り盡まゆへ我の今日此所よ於て戰死すべしといふ事いまだ終ざるは早明軍遁り近着前後左右より敵かゝり鉦を打鼓を鳴しあたるを幸と斬て廻るよぞ苗景龍今の高丘へ升るよ違なく馬定國と俱に敵はあたり必死は成て血戦をされども明兵の勢ひ大水の漲る如く後より李勇疾風の如く進殺し前より江國論凍然として突出し近着は清軍の討るゝ者數しらす終る馬定國の李勇が爲に刺殺され苗景龍の事のかなひがたきを見て敵を捨劍を抜てみづから遂に到て死をか、れば殘兵或の敗走し或の降參しけるよより李勇江國論安々と南嶺營を攻取苗景龍と馬定國が首級を齎して朱一貴は勝軍を報ず是より以前臺灣の物鎮歐陽凱の此變を聞て大いゝおどろき部下の將卒を集へ商議して兵を諸處に分て嚴く守禦の備をなす時廿五日忽ち苗景龍が飛馬到來し羽檄を呈して急を告救を乞事類なり歐陽凱羽檄を見て心おどろき事已に急なり誰か向て苗景龍を救んといふ聲は應りて一員

の大將言を發し其向て救へんといふその聲物を裂が如くなれば諸人駭て是を見るは周應龍
 といふ者あり歐陽凱が曰足下往んとならば臺縣丞馮迪を添んとて其軍裝を悉く處は南路の敗
 卒追々落きたり早參將苗景龍守備馬定國二將軍ともは戰死し南路營賊軍の爲は陷はと報
 歐陽凱是を聞て大い仰天し奈何せん賊寇梟勇ある事斯の如し何を以か是を防べと議するは
 周應龍躍出て曰總鎮何を斯の如くは柔弱の事を曰や置敵の烏合の賊たとひ何百秀ありと
 いふも只蠅の群るは等し何を患るは足ん我薨向て盛は賊魁を掴みきたらんとさも激しく言
 けるよぞ歐陽凱も周應龍が相貌の魁偉はして丈高く色飽まで黒く眼大いあれば必定蓋世の勇あ
 るべしと想ましくおもひ大い悦び精兵一千余騎を勝りて授く周應龍是を卒し列座の諸將を顧
 て人々我立處は賊の大將を掴み來る見よやと傍若無人は廣言を吐ちらし馬は一鞭くられて薨出し
 敵はむかふ時は明の大軍巨濤の打が如く敵方の旗を靡し鉦を扣き鼓を鳴し喚を叫で寄きたる
 其の勢は猖獗なれば周應龍これを見て忽ち顔色土の如く戦々として慄ひ出し初の旗言も似て未だ
 敵と一戦も及ばざる先は衆兵を捨馬を打て逃走する一千の精兵も案は相違してて叶のじと俱
 崩して敵の奔いたらざる先は我前まで敗走しけるの見苦むんとも思ふて笑ひぬ者なかりけり
 明の將李勇は是を見て余りの事は敵の謀計ならんかと心懸ひ注飛虎江國論陳福壽等と不意あり

の巨は敵軍とを約をなし勢ひに乗じて掩殺しけるが中にも李勇の其聲雷の如く何國でも退縮
 て其敵將連まなど叫けれは周應龍驚は是を聞て只魂は消るばかり怖れひ身方の根本を激しく
 て行方まらす落らせける李勇注飛虎注國論陳福壽等逃るを斬事草率功が如くなれば難はし
 しも勝り立たる一千の精兵大半討れ其餘の皆落させけり此時大平日久しく諸民兵軍を
 者多ければ明兵の難は倒るる見えて驚る者の手を引倒し倒し無天を呼喚して尋ね道路は迷
 泣叫形勢自ら當られず喪あり歐陽凱の賊病者の周應龍所持はるも敵軍方の嘲笑を蒙のみなら
 ず精兵多く拆きて或は怒り或は怖れ如何せんは商賈するのみを明兵の勢ひは吞れ諸將士卒
 惶々として怖畏を懷人人心懸やたるを見て只堅く守り一人も出て戦ふ事を許さず即日飛馬を乘
 して諸方各營の諸將を招けるは安平鎮の副將許霽北路の參將羅萬倉等兵を引馳らたる歐陽凱
 文は人を遣して港々泊り局たる商船どもを内地は入死力を盡して防禦せられさしも勝
 る明兵も是よりすこむ獲みけり

○一貴智取三壘擊堤一

茲は社君英の朱一貴が計を授て北路より進發しけるは其勢は利刃をもつて竹を裂が如く向て
 勢をもつて卵を推が如く當る處瓦の如く解途は四月卅日に海軍揚へ出るよし歐陽凱が密を社

進する事櫛の齒を挽が如し歐陽凱色を失ひ許雲羅萬倉等と謀して日塗軍堤陥らば吾軍前後より夾み討れん然り時の守禦の術盡く吾軍自然氷の如く解べし塗軍堤の身方の咽喉なり彼處陥らば春午埔また大いゝ危し不如先此所を引拂て塗軍堤へ退き彼處にて支守らば是萬全の謀あらすやと議るは許雲羅萬倉等此議尤と同意し遂に三將退て塗軍堤を閉こもる時又早馬來つて李真等安平鎮へ出んと欲して事甚だ急なりと報ず歐陽凱大いゝおどろき許雲は命じて敵を防じむ此時のや杜君英が軍野は滿山は漫りたり到る歐陽凱の羅萬倉を俱は隊伍を整て戦んとするは塗軍堤の鎮軍も百姓も皆明の杜君英が軍の到るを見て只門々香を燒賣ある紙旗は帝令の二字を書て插み期て戦ふ氣色なし歐陽凱城上より遙し是を望み見て事の意を知されば敵は降る降旗をぞ心得忙果て詞を杜君英の吳外と共に戦を舞して善地暗に敵營は撞て入あたかも電光の激する如く東西は追靡八方は斬拂は清兵散々も駐立られ秋風は落葉の散が如し歐陽凱羅萬倉等も力及ばず大敗れ春午埔をさして逃奔れは杜君英等大いに勇み此機を失ふべからず進や者ともぞ下知し逃るを追て直に春午埔に至る歐陽凱等の敗走を春午埔に到るは此處にも鎮軍百姓も門を海て几案を設け香を燒帝令の降旗を立明の大軍を迎る形勢されば歐陽凱再び仰天し羅萬倉を顧て曰斯の如くよて前後左右皆これ明の旛旗あり今の進路は道なき吾今日死をもつて國

は報せんとて討殘されたる將卒三百余人を引て直に引かへし敵軍の中へ入斬り人を斬て落す死傷の勢ひ烈しければ明軍其勢ひは辟易して四方へ振とて逃散ける明の大將吳外是を見ず鎗を擡て突つかかり戦ふと十四五合つひは歐陽凱を馬より下へ突て落す舞ひべし歐陽凱羅萬倉の鎮として兵勢も重また文學は長じて世に名高き名士あるは惜いかな今日の戦ひは命を賭しぬ羅萬倉も死力を盡して戦ひけるが歐陽凱己に討れたるを見て今も吐けしと殘兵を帥て四方を斬開き遁れて鐵線嶺の北に出ると思ふよらず耳根に一聲の喊響とひとし右より杜君英左より汪飛虎齊く發り日々消の敗將馬より下て縛を受ふと旬は羅萬倉おどろき驚て急る走らんとする處を杜君英馬を駕よせ只一刀を斬ておどす時は前面より馬烟天を曇らせ下一彪の清軍進みきたる是右側の遊擊孫文元なり杜君英是を見て陳勢を披隊伍を整て敵を待孫文元先守備胡重義を出して戦ひしむ杜君英も汪飛虎を出して是を迎へさせ兩陣に寶金鼓を鳴し刀鎗相擊劍戟を凌ぐ牙時汪飛虎方天鼓を舞ひつゝ胡重義を目標に撃てかゝれば胡重義も鐵の槌を提て敵對し兩馬巴の字を乗回し火花をちらし汗を流して三十余合戦ひけるが胡重義武技を街うけ流忽ち兩斷は成て馬より落大將討れて殘卒何を尋かるべき悉く盜を脱て降參を汪飛虎方に勝利を得て中軍の杜君英も斯と報じ被れ大いゝ悦び汪飛虎吳外を先陣に備へ五里前立て進ませ杜君英は

大軍を帥て後より進發す斯て汪飛虎吳外の二隊は備へ進みけるは行前二總紅の大旗は右番遊撃と金字にて書たる旗を風よ翻し其下は孫文元馬を立大音は天の將を知ざる逆賊安は兵亂を企て民を憐し國を掠奪せんとするを愚ある孫文元が在ををしちせやと罵りけり汪飛虎大い怒り汝舌の動くまゝ一惡言を吐くを奇怪されいで舌の根斷て得させんと馬を飛ばしは撃てかかれ孫文元も是を迎て五合七合戦ひしが叶けしせやもひげん馬を反して逃走る汪飛虎腰よ棄て何處までも遁さじと一里ばかり追苑往ふ忽然として傍ある操林の内より一聲の號炮響と比しく陣隊の軍馬咄と起り汪飛虎が軍を二段は斷截けり汪飛虎おとろき切け敵の計は當けるを急を明國と下知をさせば衆兵周障して引回さんとするは孫文元取て返て擊立る明將吳外も先は敵の進るを見て汪飛虎は續き余さじと追苑けるが忽ち伏兵の爲に射並られおへて進み得ず汪飛虎の勢ひ有あらざるを見て急よ走らんとするよハや敵兵四方を圍て水も洩さず然と懸聞ゆは狂將おれ陣隊の勇を奮て退る一方を打破り殘破せし命を助けは然と驍士卒は大半折かれは身命此處杜君英の兵來到ければ汪飛虎吳外遁々は殘兵を帥て杜君英が前より到り罪を當道所は棄たれ清の右番遊撃よく機變の謀を用ひ軍立事常はありすと云は杜君英が曰馬善にも敵を侮る者ハ敗とも入り然ハ小敵といへども侮るべからば大敵といへども怖るべからば軍の興機は望み難き應ずるよあ

今急に進まば敵謀計を設くるは進まば必らも身命を失ふを得べしと汪飛虎吳外右左番備隊の兵五百騎ばかりを勝つて一隊とあし大軍との聲とに従ひ直進し海軍の陣隊は掃蕩せし敵軍は無期と揚て突かゝる勢の如く孫文元が兵初段の陣軍は油斷りて在けるがたゞは敵軍は先隊粉の如く碎け二陣の勢是を扶んとする處を杜君英猛虎の威を現し例の鎖棍を車輪の如く叫びて八方へ雄ちらす此棍は當る者馬も人も微塵も成て死するよ清兵膽を奪て敗走る汪飛虎吳外も先敗の耻を雪んと縦横は苑立つ、喚叫で直進中軍まで斬て入敵の餘は手痛く攻敵は吐けはと思ひてや孫文元馬を打て走んとする處を杜君英直に馳逐鉄棍を揮舞一隊鬼を叫びて襲きたは孫文元は孫文元益も首も胴體へ敵込馬と俱に擊つた人は是を見る者涙を天外に飛し頭を擡げ戦慄も我先は逃んとして踏倒され推殺され遂に海邊まで遁詰られ逃るに道なくして敗兵は水中に投じ一人も残らず溺死しける清將劉德素は弱冠にて容儀麗しかりけるが此日敵軍の戰死は百花の輪したるを穿ければ一しは美麗を見えけるは流石溺死せん事を抽くも引回して戰死せんとあしけるを吳外駁合せて擒よせしが其美貌を愛て降を勧められは劉德素敢て節を屈せず只斬れん事を乞けるは黃姓の人其義心を感じ杜君英は請て赦しかへしけり

○許備大戦平安鎮

却説清將許雲の李勇が安平鎮へ出んとして甚だ急ありとさ、急ぎ安平鎮へ回れば李勇が先鋒張阿三が一軍はや賊を破し金鼓を鳴して城下まで推し進たり許雲を見て諸の文官衛卒等曰く今日我軍遠路より馳回り疲れたりと雖敵のや城下へ攻近者と急なれば先陣の故を退退て回つて後心まづかば食すべし飯を炊きおさしへと命じおさ士卒を勵し城門を焔と推開き部下の勢と俱に咄と喚き矛を舞して真一文字の明軍の中へ撃て入許雲素り府中第一の驍勇され其威風凛々として矢庭は數十人を斬り落す張阿三敢て敵する事能はず手勢若干折て鈍々と引退く許雲長追せず城へ回つて飯を食せんとするは早衙門の文官悉く落失て一人もなし許雲此体を見て事を握りて大いに怒り集等平生の國家の恩報は飽狼の口は忠孝を説けるは今國の難は臨み一戰を尤見果せ落失けるを奇憤なると誓る處は士卒馳せたりて敵又推寄いと云許雲兵糧をつかふは追なく又兵を帥て撃て出再び敵軍は渡り合群る敵を八方へ蒐散し已に軍中疲勞れければ兵を扱め徐々と城ま回つ兵糧をつかふは又敵の寄る事以前の如し如斯終夜押寄て引退退退て又押寄金鼓の音喧しく涼波絶されは鎮兵一夜眠こと能はざ大に心力を勞しける然るは次の酉春午埔の敗卒走りきたり總鎮歐陽凱も討れ玉ひ塗壁堤春午埔も連で陥り羅高倉も行方じらずあり玉ひいと報き許雲是を聞き大いに駭き歐陽凱總鎮の大任を得るが如何ぞ斯不日は兩所を破

られ駒へ其身まで死しけるぞや奈何せん敵已に塗壁堤春午埔を陥ぬれば安平鎮の地も守がたしと歎息して止せ時張阿三の中軍は馳回つて李勇は見え敵の大將許雲驍勇にして當がたく渠が打て出る毎に身方多く兵を折れぬといふ李勇聞て曰く一匹夫の許雲勇雄ありとも何程の事有ん我敢向て三合の裡は渠を引掴み擒ふにして回らんと己は馬を出さんとす時張看眼出づ日鎗を裂き鎗を付刀を用ゆべき此敵の某向て擒ふしひんといふ李勇聞て然るは陳福壽を副に俱れゆきて討か擒かして回れよと命す兩將欣然として馬は跨り直に城下は押寄賊を破て攻ければ許雲また一軍を帥て殺到す自ら兵先は馬を進て斬て廻るは其賊鋒は向ふ者粉々として地は落ければ諸人只目を駭かし敢て近付者もし張看是を見て物々しやと驚合て矛を交るは許雲が其威風恰も天神の如く張看中々も敵する事能はざ己は危く見えければ堪かねて陳福壽三尖刃を振て張看を扶け撃て斃る許雲事どもせず二人の敵は渡合精神益加はるよを張看陳福壽心おどるを遂に兩人とも敵する事能はざ馬を反して逃走り兵卒若干を討れ中軍は回り許雲が大勇を告て罪を乞李勇大いに怒り汝等兩人よで一人の敵を討事能はざ利へ兵を折く事こそ首甲斐なけれ此上の我往て擒ふまへしと馬は跨り出んとす江國危急は櫓を曳留て曰は吾も聞えし此鎮の副將許雲あらん渠の世は怕しき虎將なり古語も兩虎相争時の必は一方の死し一方の擒

といへば不如奇計を以て誅せんよの主公朱一貫強將を拆く(計を一巻は配し授け玉ひき今彼
 見して其謀を用ひ必勝の利有べしと諫李勇是に従ひ其書を披見し膝を拍て大い悦び我生
 ある古の臥龍も劣しとて張着蘇降よ計を授け歩卒若干を領せしめ何れも斬馬刀を持せて
 李勇の中なる曲隘は伏置江國論を命じて往て敵を信ひ導しめけり
 大の許雲遣計焼兵糧

時日城中は許雲麾下の遊撃游撃功を謂て曰吾爾等と俱に國家の厚恩を受る事久し正に今力を
 盡し恩を報するの日あり敵の大軍なりとらんと置るは衆鳥合の賊あり死を的にして退却の
 海の地を恢復せんもし賊兵強して力及ばずんば謀く戦死し屍を原野に晒して忠義の操を表し
 さんと自けるは游撃功是を聞て奮激し仰る所理の至極あり戰場に死せん事勿れ武夫の望む
 處ありと答ふ許雲喜ひ留守の兵を命じて曰吾敵軍は遣り第一の號炮を響すべし借鋒を交るは及
 び第二の號炮を鳴し戦ひ耐ある時は隨に第三の號炮を響すべし若第四の號炮聞ばせんは戰
 ひ判ありと知へし第四の號炮響かば戦ひ利あり我戦死したるぞ知士本と分ちて倉庫に火をかき
 て焼立妻子を將て澎湖へ走るべし然してまた燕道の梁改道は命じて港々を拍りたる商船を一
 艘も残さ放ち遣て此所は置べからずは精々命する所は早城外は敵神術也と覺しきて金銀財宝

李勇
 單身
 殺
 怪獸



日耕

大いし餘波聞えければ許雲游崇功と俱は舞を舞て出而後より許雲敵中へ割て入るを幸
と稱て落す江國論是を見て擊て出で身衣よ刀を合し或は進み或は退て敵を練りぬ許雲の第一
の號炮を響せ敵を東西へ追靡南北へ捲り立第三までの號炮を響かせ江國論を目標け何國迄も
と追逐せける江國論の敵をなほ人圖へ引んと且戦ひ且走る許雲の敵は謀計あるを覺て游崇功は
横に敵を退て十字街に到る所は忽然として一聲の鼓を響かす比びと街中の曲隘より伏兵隊を發し
左に張看右に蘇降多勢をもつて敵を圍繞口や二匹夫敵を下つて降を乞ふと叫許雲怒れり眼銃
車如く草城等拘我本技をしなせやと敵を舞して撃てかへらんとする所を歩兵隊等ははしりより
斬馬刀を擧て許雲が騎たる馬の脚を高股かけて切て落し何あひもつて兩へき馬の一塵も残
て地へ倒れ生ハ大地へ逆は落けるを張看捷はす鏢を把延て廻貫游崇功も同時は馬の脚を斬れ
て落逐は蘇降と討らる此時明の衆軍許雲が身方初兵を多く殺たるを恨み憤り築りて母を
ぞ斬けける茲に金門の軍百五十八人を配りて船に居けるが許雲の忠死は勵まされ勇を奮て戦ひ
けれども多勢は無勢なれば遂は叶はず僅に十二人討たされ其外敗殘の諸將張彦賢王鼎および
諸文員王珍王禮吳觀城朱襲等第四の號炮を響して遂は小船に乗じ遁れて澎湖へ落行けり時よ
彼平鎮の留守の遂に第四の號炮の響を聞て力を落し梁文煊を遣して港々の商船を一艘もなく敵

ちやう人歩を分て倉庫は火を付けて兵糧を焚盡させ其間許雲等の妻子を引て是も澎湖へ落種けり

○陳策許保淡水營

明將杜君英の孫文元を斬殺臺境を襲取し後の軍威大いに加へり向ふ所毎に勝進むともつて汪飛虎吳外等と俱に淡水營へ攻がへる抑此淡水營の僻遠の地にして守る兵僅に五百騎の過ぎといへとも守將陳策の諸史百家の書を通じ就中孫吳の兵書委しく智謀深き良將あり然も淡水營の前は急水溪の切所ありて碧浪天を浸し人馬渡るべき便なき要害の地なりされとも勝誇たる明軍事の次は攻落せよとて吳外を先陣とし淡水營へ推寄賊をとつと揚けるは城中寂寥として人音亦く淡水橋も掛あがら有て用心の体少しもなく素り出合もの一人も見ねざりけり吳外吃と心付敵早落先で空城あらは城中の樹梢は鳥雀戯て遊べざる其事さるは城兵伴を鳴を鎮め謀計を設て擊破かん爲偽て出合ざるあるべし然も此橋も故こそわらぬ細く渡る事なけれ難くてもわれ水練の覺ある者わたり試よと云けりともし敵の謀よてわたり果さるうちも落る事もやと狐疑を生じ離あつて渡らんとしふ着あし斯て果下鬼やせん角やせん金鼓まらしくある所に忽然として金鼓の音響起りもひきよらぬ後の山より三隊の勢咄と出て備なき明の陣へ闖て入陣

方八面は斬て回り東西南北へ駈散せば吳外が兵不意を伐れて馬の脚を立かね士卒若干討れて敗走す彼二隊の勢いも僅に打勝強て戦をも好まぬ淡水橋を渡りて颯と引どり何地へ行れん行方さち見えさめけり吳外大い腹を立よしさ長倉敵して僅の敵は斬散されけるを安からぬされとも橋は堅固あるよ打渡つて敵城を懸崖はせよとて自吳魁立て橋をわたる其後には横に大軍押わたりけるは何國ともしらず一隊の每砲ひくく比しく此橋忽ち碎て散塵はあり舞へし五千余の勢人馬とも濶河を投し激水の爲に巻こまれ目下急水溪の水用となりぬ此時城上は旌旗を颯と揚一齊に咄とぞわらひける元來是の陳策が謀略よて兼て水底に橋杭を大綱をもつて括り遙のわらう警させ敵の渡る最中を見すまし砲聲を合圖は奥倒させしなり吳外の幸ひ兼兵は魁立渡りける故にまた橋の崩さる以前に渡り果一命を落さむと雖只一人敵地を立橋の落り水に逆捲て磐石をも流す勢ひまれは憫へて茫然たり斯先驅は變わりし事を後陣の杜君英に告る者ありけれは君英汪飛虎大い驚き馳きたり岸に立て遙に望めは吳外獨身向の岸に立けるは敵城より射下す箭の雨の如くあるを吳外剣を抜て是を切拂ふ其跡今も討るへと見ねけれは君英等手は汗を握るといへとも施すべし謀あし時は城門闕と開け遙の向ふより一彪の軍馬輿を目がけ打て出るありや吳外討れぬらんと見る所は杜君英の功より弓馬は達しよく大馬士

射術の古の習より劣る手練なれば急々大綱は細繩を結び細繩の端を矢に括り忘るゝ射術ありて兵といふ此矢二丁ばかりの急水溪を過て向ふの岸は極止と立吳外早く心得其繩を手操よせ大綱を大木に括付馬を乗捨大綱を手操つゝ難なく此方の岸は回り萬化を出て一生を得たる危もまた高運之けり此府城中より打て出たる勢早吳外が回りたるを見て齒切をなし敵大木は断れ大綱を切捨んとす杜君英遙は是を見て此綱を切落させてハ斗と矢を拵ひ少時固く切て發し矢坪を達へせ切んとせし者の眞顔を沓巻逼て射貫けり此弓勢を見て敵兵戰々慄々城の中へ逃入ける然とも大綱の切落されしを殘念ある杜君英大いて吳外を喝し曰我綱を引んと欲せしは彼綱一筋を橋として身方の勢を流さるる爲なり然らば爾が向の岸は居るの天の與る所の幸ひとおもひも何ぞ敵を怕て鈍々と逃回り敵は綱を切るゝ事をするや你今夜の中より計略を講して再渡繩を引て我軍を渡すべし路をなせよもし然らば軍法は行いんと戦ふ命はけり吳外赤面して大いふ恐れ終夜綱を引へり方便を案じけり斯て大軍川をわたるべきやうなれば空く此所は陣をえりぬ固り橋を斷たれば敵軍渡るべきやうなれば更な夜討をかくり氣づかひも有はしと心を弛し衆軍熱く寐入けるは夜半の頃忽ち敵城は三聲の號炮ひゞきぬ明軍聞て須臾敵の待來るを周障銀狼と起出で橋を見見るは敵の奇る形勢もかく遠く城止を見やれは月水の光

みけれは情の別的事なしとて交陣屋へ入て寐たりけり然るは何國の程を計しらす侍せらるるしと驚き出で地は響こととをさませければ是常事なれりすとて明の陣中再び騒ぎあへり是陳策の謀計よて敵の奇さたらなる三日以前は人數を遣して溪水溪の水源を斷截せし軍を分て水を守り侍の號炮を聞けり留たる水を一度は切て落せしと計略を定め置けるゆゑ今夜水を守る者陣中の號炮を聞と比しと須臾時分よしとて僅止たる土石を一度は切ておとす程は忽ち逆浪天を漫びて逆卷下る其勢は泰山をも押崩しつべく見るゝ溪水溢て明の陣中溢れ入いとゞさへ周障したる明軍機の洪水は腹を冷し須臾大水は洪水よと上を下へと騒動するうち片時が周水深き事二丈は餘り大浪は深はされて我先よと書山へこみ登りけるが間さの暗し地理のしらす人馬大爭を失ひけり斯て夜も仄々と明ければ明兵少し心を安んせる所は山水のならひ漸々と引で以前に如く常水となりぬ杜君英憫れりて只夢を見たる心地して諸將を謂て曰かゝる儘の條所を攻めまだ一戦をも遂ぎして斯はとまで人馬を折さしを安からね眞は陳策が智慢りがたじ急は此處を引謀計を定て此怨を敵すべしとて二十里退て陣をとる然るは陣中兵糧已に盡ければ斯てハ附のトと急し人を安平鎮へ走らせ李勇は兵糧を借玉へと云送るは此時李勇の安平鎮を陥れければとも奈何せん安平鎮の兵糧の許雲計策を遣て燒盡けるゆへ李勇は兵糧の事を欠ければ其使者

に向ひ杜君英の特み安き事なれども敵早く兵糧を燒盡し我か陣中も已に兵糧盡んとす然れ君
 英の需は應じかたし爾回て此おもむきを告よと言よそ使者力なく立かへりて杜君英、斯と報を
 杜君英大い怒り李勇匹夫我が能大功を立ん事を妬み事を左右に倚て兵糧を借せ己一人功を立
 んとおもふこそ奇怪なれさらば急は内他へ攻人諸人の眼を駭き程の大功を立李勇匹夫は鼻を
 かせんと憤り是より深く李勇を恨み互に軍書を通せず李勇も此おもむきを洩聞て甚だ怒杜君
 英何者なれば理非をも辨へず隔心をさしつるむや其議ならは渠を出拔我抜群の功を立んとぞ思
 ひける嗔呼大業いまだ半だは遂さるは兩雄争ひを生ずる事慮の足ざるゆへなりといふ爾が
 ら明の運數盡果たる光よて天の然らしむる所を是非あかりける

○ 覺羅滿奏 征 謀

斯て杜君英の軍中已に兵糧盡ければ施すべき計策なきは是より軍令能れ思々々民家へみだれ入米
 麥を掠め資財を奪ふ李勇も安平鎮の取れれとも兵糧の計策が遺計よて燒盡されたり港々を離す
 糧もなければ軍中の扶なく内地へ攻入事なすを且暮の飢を淡きかね軍令みだれて士卒走り
 散て民家へ押入五穀金銀を掠奪せ是より依て人民望を失ひ明へ降る者一人もなきなり行はば朱
 貴の其身の憂府よとくまり謀計を帷幕の内運らし勝事を千里の外に顯んと素傑の士を多く

土民の姿は打拵せ計略を授て曰爾等落人は離れて船に乗夏門へ入て徘徊せよ海の大軍臺灣へ向
 け、吾其慮の乗じて厦門を乗取べし然は清軍臺灣は止まる事を得ずして引反すべし其時我大軍
 敵の騒動に乗じて内地へ攻入す一鼓にして事を遂せん能々懐て人々覺る、事なればと云合け
 れば衆人傾掌しておもひくは姿を打拵し出去けり偕一日朱一貴計策を思惟し府中の半崩た
 る臺より四方を眺望しけるは北方よあたりて怪異くも驟驟と立たり朱一貴是を見せ一聲苦を
 叫で地は昏倒し氣を失り左右大い駭き急ぎ扶起して藥湯を勧め介抱するは須臾にして甦り天
 を仰ぎ歎して曰初め崗山は信義を起せし日狂風塵を折り今また廢氣窮方の凶を示る嗚呼上天明
 を佐ざるを奈何せん是の闘争の氣なり我が諸將かあらす同土軍せんとする者あるべし命あるか
 哉とて天を睨て憂ひしが何おもひげん急は府中へかへり兵を帥て揉もんで一崑身まで出張す
 于時清の水師提督は姓の施名の世驍といふ人あり今厦門は居けるが智謀萬人は勝れ經世の才あ
 り一日高樓より上りて遙は大担口の水面を見わたせば大小の船數百艘厦門を望で通れきたれ者
 幼男婦岸は漂泊て父を尋子を號ふ其聲愁然として海濱は滿聞忍びず世驍是を見て甚だ訝り
 直事よあらしと急し人を遣して其頭末を詢せ初て臺灣の變を聞て大い駭き是の由々しき國家
 の大事なり急し兵を發して救へんと其準備をみず所は忽ち澎湖より初檣到來し安平鎮連て敵

の爲に陥れられ總鎮歐陽凱副將許雲其外の諸官戰死し臺灣の地全く賊徒の有となりしと報せ
 施世驥又大いに駭き金門總鎮黃英は謂て曰臺灣の地只六七日の間は陥る何ぞ斯速かあるや是察
 するに敵は兵法は精なり名將あるあるべし今鄉民百姓等亂を避て此所は逃れきたれり其船數百艘
 内地へ入んとぞ情慮は賊徒の魁首一擧にして臺灣を陥る程の智謀の者なれば手下の者を
 落人の群に難へ來すまじき非ず是内地へ攻入第一の謀略にして若此計策を用るならば廈門の
 敵の手に入ん事案の内あり所謂毒を臘腑に灌の謀計あり然れば決して流民を陸へ上べからず
 黃英其高論を伏し士卒は命して一人も船より上る事を得ざらしめ急飛馬を仕立夜を日は朝で
 朝廷へ臺灣の變を報す内廷此變を聞て百官顔色如菜倉皇失措し堂々と列座たる烈位の諸臣只面
 を見合せ雖有て一言を發する者なし英は總督部院疊羅滿譯の保といふ人あり兵法の孫吳が奧妙
 を究め濟世繼天の秀才あるが階を進み出奏して曰先は臺灣の百姓等噲元を殺せしむるべきを奏
 せしむる千丈の塔も蟻蝶の坎より崩るならん急ぎ官人を進向て其罪を証し五へと臣力で奏し
 奉れども朝臣皆深く慮らば命泰平の時奈を兵を動す事あらんと云ひ止め奉りし結果して今
 日臺地兇徒の爲に陥るの端となれり情天下の地勢を見れば廈門の國家第一の要害臺灣の咽喉
 として内地の門戸あり今敵の勝敗此所を究むる今臺灣陥るといへども幸は澎湖諸島の要害あり

す敵を征伐するの圖を止りし今臺地の人民賊難を怖悸海は沿て駭き奔りしとが民の亂の基
 までいへば先是を鎮すんば有へからむ而て後臣不才はいへども官軍を總領して廈門は往君の
 威福を首に戴き機を察して變に應じ賊軍を滅しいんと辨舌浴々として一言のよとみなく啓奏
 じければ皇帝聞て大いに喜び玉の卿が演る處理の當然にして一々朕が意を合へり賊徒征伐の一
 條の脚は任をわひだ隨處に計らへよと令せらる羅滿保願首再拜して朝を退き是より後食を日
 されて計策を方寸の内は迷らし手は批を停めず身席は帖す先撫都院呂猶龍は謂て曰く今人民臺
 地の逆亂を怖悸て老幼を携へて迷ひ奔る御邊社に鎮玉は是國家の大幸ならん呂猶龍喜ひ臣
 願くは往詔りを以て宣諭し百姓を鎮ひいんとて兵を帥て出去けり覺羅滿また急馬を以て飛檄
 を諸方へ運らし陸より馳きたらば下民いよ々々脚を憚むべし列將手勢を帥て水路より直に廈門
 へ出べしと云送り其身も出陣の準備を頻に急ぎもつら亂を鎮んとを慮りけり

○ 諸國官軍出廈門

去程に都城の飛馬諸方へ羽檄を傳へしかば糧驛道の韓奕及び督標參將王萬化撫標游擊邊士偉が
 の兵を帥て軍艦もとり乘廈門に赴く將軍標遊擊魏天錫の本部の兵および督標の兵を統て南
 臺の水道より同く廈門に赴く其余南澳の總鎮藍廷珍陸路の提標中營林政雲游擊金作礪海壇鎮

標遊擊李祖興化協の守備劉永貴同安營の守備葉應龍漳浦の守備蘇明良黃巖鎮標遊吉陳允陞等皆手勢を領して水道より廈門を築る覺羅滿も官軍を卒して廈門へ赴きけり時五月十日陰雨旬を連て降道路歩みがたしといへとも覺羅滿の號令嚴重あれは官軍の過る所分毫も犯さざれば百姓大いに悦び道を淨め香を焼て是を見物す然れとも内地の民の異口異明の總大將軍の孔明張良よ劣らぬ智謀の人よて麾下の諸大將も樊噲關羽張飛の如き猛將よて臺灣を僅五六日よ攻取其大軍海陸二路よわかれ一齊よ歸來りりや近着たりなると風説して米粟の價日々騰り諸民患ひ怖れ顔色土の如く成たるよ又も諸道より軍勢を徵れ勢其の押通る所劫し掠ると云出して益々戦ひ慄き東西よ走り南北よ迷ひて騒動する事大かたからず然るよ撫都院呂爾爾人を分て詔命を宣官軍の皆海路より廈門へ向ふよし民の米穀を些よても犯し掠る者へ忽ち刑戮を加へらるゝあひだ百姓等心を安んじ業を勤むべしと觸れたれば萬民始て心を安んじ漸々よ騒動鎮りけり覺羅滿また使をもつて浙江廣東の米及び延州建州等の米粟數万石をとり倚ければ頼る米の價減して平時よりも賤し是より諸民益々歡喜し臺地の亂をぞ忘れける覺羅滿また諸軍へ金銀および蔬菜までを與へて勞ひ令を嚴くし兵船皆伍を補要用あれべし岸よ上る事を許し調物あれは其價ひ民の乞ふ任すもし推て民の財物を奪者あれは嚴く軍法をもつて是を繩も惜また滋

湖へ軍使を遣して施世驃が調度を問しむるよ募り集りたる勢多くして船甚だ不足と報せ覺羅滿聞て急よ士卒を分ち海よ添て商賈船を備ひ其價大船一艘よ金七十兩を與へければ是を聞傳て暫時よ大船の集る事二百余艘よおよびぬ其中よの國恩を報る爲よとて價をうけざる船多し且杉板頭の小船三百余艘集れり是よ依て大小の兵船五百余艘を得たり今よ集りたる兵を載るよ余り有れば施世驃喜ぶこと限あし覺羅滿の諸軍へ多く牌を與ふ斯て提督施世驃已よ前船を啓けり是が爲よ阻み隔られて臺灣の音信兩日通せず于時覺羅滿臺灣より逃回りたる士卒よ臺地の動靜を詢よ淡水營の陳策のみ奇謀をもつて敵を惱し追退けて獨り孤城を持堪たりと報す覺羅滿喜んで曰陳策邊城を守りて尙存するをあらは賊軍の虚實を聞得よ便ありとて急よ遊擊張斌守備李燕鈞錫千總李郡等を遣して陳策を救ひせまた多くの兵糧を送る又南澳鎮の藍延珍督標參將王萬化を呼て曰御邊等澎湖よ往て提督施世驃よ見へ我言を傳へて俱よ敵を謀り以へ察するよ明賊の烏合の奸民竊盜の屬よして大將たる者少あければ利を見て争ひ久しからせして自内變を生ぜべし只急よ攻すよまんに一舉よして勝利を得んとて即ち帥の字を替たる大旗二流を出し與へて曰此旗を推立て、藍延珍の南路より向ひ王萬化の北路より向ひ施世驃の中道より向ひ三方よりならび發せよもし功を食りて令を犯し援寇せば假令勝を得たりとも軍法よ背の刑よ行ん又錦の

を取出し二將と與へて曰此裡は計策を入りかたり御邊等鹿耳門へ到らんとする時開き見るべし自然勝利を得る事あらんと命じければ藍廷珍王萬化拜謝して計を受けて退き出督院覺羅滿親海邊まで送り兵糧あらび軍用の器械雜物まで悉く運送しけり斯の如く羅滿厦門に在て躬制置すれば萬事備わらずといふ事をし去程は藍廷珍王萬化を解て厦門を發し澎湖にいたりて施世驃を見へ羅滿が計をのべ俱に軍議をなして出陣をぞ急ぎける

○施世驃集兵於澎湖
斯て施世驃は澎湖へ集りたる諸大將を點檢するに南歐鎮の藍廷珍林政王萬化邊士偉林秀王良駿薄有成金作礪范國斗鄭耀祖魏天錫胡琛郭琪齋元輔朱文謝希賢守備林亮蔡勇呂瑞麟蘇孟良鄭文祥康隣魏大猷劉永貴葉應竜原任の遊擊李祖陳允陞等の諸將二十員を調練したる官軍覺羅滿の招きを應じて募り屬する勢を併て都合三萬六千余騎海路の勢一萬二千余人軍令を嚴重にし隊伍を整へ敵軍の虚を伺ひ夥じかりける軍威なり于時六月初旬朝廷より厦門の覺羅滿が營中へ詔命到る督院羅滿沐浴齋戒して是を拜し讀其詔命曰

督院羅滿讀畢て後よく水上にあられたる武吏を擧み出し臺灣へ遣して百姓等一詔告を告諭さしむ然るに再び勅詔到其詔曰
勅浙江將軍帶披甲二千赴閩協征兵到浦城民頗苦之
覺羅滿讀了て熟思惟しければ臺灣の賊軍を征伐するの勢已に足り然も施世驃智術衆を踰たれば寇を平ん事時日を移せばからむ今浙江に屯する兵多く却て良民を煩すに到る是を急し制止せずんば大いある災變を生ずべしとて自ら書翰をした、め飛馬を終夜奔せて撫都院呂爾龍へ達せしめたり使者肥馬を鞭して直に呂爾龍が營へいたり羅滿保が書を呈しければ呂爾龍急ぎ披見するに急し官兵を浦城へ遣し浙江の兵の不法を制し民戸の愁愁を拂ひいへと書しかば頓て按察司董永文を令して浦城へいたらしめ兵卒の狼籍を刺せしむ董永文命を領して直に浦城へ往て見るに民家多く浙江の兵は焼れ困窮悲愁す按察司火難は逢たる民どもも米錢若干を分ち與へければ衆民拜舞して喜ぶ事限りおし安堵のおもひをなして撥せ茲に署福州馮鑒は強幹の才あれは董永文萬事馮鑒と商議して事をとり計ひぬ然るに浙江の兵士等省の地にいたり推て民家を宿せんとす董永文驚るに馮鑒を議して曰亂を靜るに民を安んずるを以て本とすもし浙江の兵民家に宿せば遠からずして内變を生せん是を奈何せばよけん馮鑒曰は何の憂る事があらん令を下

二百六十一

して諸所の寺院に宿せしめば、妨あらうといふを董永芝寶よと悦び配當して寺院に宿せしむ。是に因て百姓商戸大いよ心を安んじけり。

○吳龍僞應募往澎湖

却説臺灣の千總吳龍、郡縣郷府みな連り陥るを見て、部中の兵を帥て朱一貫を降りぬ。朱一貫大いに喜び手づから財帛を興へ酒宴を設て、應募者曰、我今御邊を得、天の賜なり。因て大事を任じ大功を立しめんとす。然れども恐く、海邊の背まじき事を、吳龍が曰、下官公の不殺の思を蒙り心を傾けて仕へ死をもつて恩を酬んと思ふ。譬の、肝腦地を塗るとも敢て辭せし朱一貫其變をまじき顔色を察して大いよ悦び、然らば御邊部下の兵を帥ひ船に乗て澎湖へ往募し、應募者曰、清の軍は興力し如斯々々謀計をなせよと耳よ口を付て、詳に教へ御邊もし此謀を爲、遂に大功成就の後、此臺灣の地を興ふへしといふよ。吳龍大に喜びも、然らば生涯の面目何事か、是は過ひべきとて領首して、船首して出去ければ、朱一貫謀計なれりと悦びけり。斯く吳龍兵を帥て澎湖へ到り、施世驃を見て曰、愚臣孤力を以て、賊の大軍を敵する事能はず。假し偽て降り時節を見合す所は、提督諸方の兵を募り玉ふと聞、賊塞を遁れて募り、應募し、いと異しや。かゝる言けるよ、施世驃の素より智謀深き者なれば、吳龍が五音顔色を考へて、頗る胸中を疑ふと、雖敢て色も表さず、大いよ悦びし体にて

曰、我御邊が死生をわやぶみ、おもひけるよ命を全して募し、應募し、上の又何をか思へき、殊に敵へ偽て降りたる上、賊徒の虚實をも量り、有りて牛を殺して宴を開き、大いよ吳龍を管侍けり。吳龍の心の裡は、謀計なれりとて、暗に悦び居ぬ。然るよ、或人施世驃を諷て曰、吳龍の財を貪り、義をさる小人あり、渠國家の爲に忠戦をばげまじ、敵を降り、今また提督の募し、應募してその心術のかりがたし、何ぞ一應の思慮も及ばせ、彼を宥し玉ふやと難す。世驃笑て曰、それ孩兒だも人の顔色を見て喜怒を察せ、況や余は於かや、疾渠が反心を去るといへども、偽て宥し置し、其實情を探り知て、後味せんが爲ありとて、腹心の者よ命とて、吳龍が勢のうちよ、其實感ある者を、賺して誘きたらせ、酒肴を設て、飽まで飲せ、其醉るを見すまじ、種々よ挑み問せけるよ、稍其色を露しぬ。是よ依て、金銀を興へて、其心を蕩し、尙も賺し問けるよ、下賤のならば、慈心ははだされて曰、實に我が主朱一貫と謀計を合し、募し、應募と偽て、官軍臺灣へ出よ、其施よ乘じて内地へ攻入所々を放火せんとの謀。よていと酔よ乘りて、明軍の動靜までを吐出しけり。世驃聞て、されば社ともひ先件の士卒を縛り、牢へ入おき、楮帷幕の内よ兵を伏置て、使を以て、吳龍よ商議すべき事有とて、招き寄、吳龍の何事よやと何の要心も、かく世驃が陣へきたる、然るよ、忽ち帷幕の蔭より力士とも多く、顯れ出、吳龍を曳倒して、縛め、頼て世驃が前へ曳行ぬ。吳龍大いよ駭き、提督何ゆへ小臣を捉へしめ玉ふま、と曰、施世驃大いよ怒

乾と睨て曰恩を忘れ國を賣逆賊此期もあゝんでも尙我を欺んとぞるや爾が隠謀の我疾知たり
 敢て口を掛く事おかれ吳龍が謂提督かならむ人の機を信じて過ち玉ふな明將朱一貫の謀計深き
 者なり流言を傳へ相疑しめ同士討ばせんよ計るなるべし能々事を詳密に察し玉へ世馴ますは
 ち怒り反賊何んぞ多言なるやとて遂に曳出して首を刎以て軍神を祭り豕を宰して江を祭り十六
 日の未明より師を進めけり督院羅滿の厦門に駐て軍器兵糧を糧驛道の韓奕に命じて調撥させ
 然して又與化協ならびに副將朱杰を招と中軍の大將とし督標都司初有德守備金國榮單維心と
 水師提標參將倪興と俱に厦門を守衛また金門鎮黃英督同游吉王良李殿臣李經世玉晏黃元崑廣
 元博何重申等を召澎湖の偃將羅光乾と俱に澎湖を堅め斯て船手の大軍十六日の午の刻鹿耳門に
 近着けるよ澳鎮藍廷珍覺羅滿が錦の璽を鹿耳門に到んとする時開くべしと教しをわもひ出し書
 を披き見よ只十字を書して曰
 可下合併攻鹿耳門遂並進上

此計策を授り入て與へしに密事を敵軍へ漏すまじきが爲あり王萬化も披き見て大いに悦び諸軍
 へ調へ給せ諸方一齊に鹿耳門を推寄ける抑此鹿耳門の港路の狭仄にて昔より天設の險を稱
 討軍艦急よの往がたし世馴思慮を逆らし水煉の者よ水底の水港を探せ其港に標木を立是を記



として漕行は官軍の舟をも礙ることなく並び進みけり

○ 錦 臺 之 計 破 鹿 耳 門

千時明軍の清朝兵を募て臺灣に向ふとの聞とも今三伏の夏にして炎國境が如く地乾き草稿る時節なればいまだ急よの押きたらじとおもひ殊に頃日北路の李勇と南路の杜君英と鬱憤積りて同士軍を企て其隙を窺よと諸卒安んじ心なく且鹿耳門の天設の險難ありて容易に船の寄こと能はざる殺所あれば是彼よつけて備へ甚だ疎なるは官軍の衆調じ合せ三路の勢一同に推寄大小の兵船海上に充滿て旌旗雲の如く鎗戟を日見々かして漕きたるを見て明軍大いに仰天し戰慄いまだ一戦まだも及ばざる先に早拔々と風を望で落行者數を去らず去程に提督施世驛の林亮補芳を揮らるる令を傳へて炮を列て一齊に發し着て進み火急に攻れば自余の兵船も笑ひ進み攻寄る其形金鼓の響き鯨波天地に震ひ是が爲に泰山も崩れて海も入坤軸も碎て地も沈むかと疑はるるれとも明軍も茲を大事と矢石を飛ばし弩を放ち火水も成て防禦けるを施世驛監廷珍王萬化の諸將兵士も下知し平押し押寄り射ることも突とも物ともせず討る、者を踏踏乗課息をもつかず無二無三を攻立ければ明兵遂に防禦叶はず一度は咄と揉くすされ鹿耳門を棄て敗走を施世驛安々鹿耳門を攻取衆兵も向て日兵を用るの法の唯機を見て發するは有敵も足を溜させ勢ひも乘て安

平鎮をも攻破れよと下知するよを藍廷珍王萬化同く指揮し急げや者ともとて自ら兵魁に進む大軍是機を得て勇み進み攻迄着ける形勢夥しなんとぞ思ふなり

○世驃定計復安平鎮

茲に李勇の杜君英と互に私の遺快を含み一大事を忘れて江國論が諫を聞ず已に闘争し及べんとしけるよ鹿耳門へ敵推寄たりと聞て大いに駭き馬を飛して安平鎮へ回り見るよ敵のや鹿耳門を攻破りて早此所へ攻近付たりと上を下へと騷動するよ李勇茫然として惘果豈計らん斯まで敵兵神速に攻きたらんとは是我が過ちなりとて始て後悔し急ぎ討て出て戦んとす江國論大に制して曰清軍今諸國の諸侯を集め大軍なる上鹿耳門の戦に勝て其來銳當りがたし身方の小勢といひ心懸したる兵を以て出て戦ひ必定敗をべし只杜君英と和陸し力を併して戦ふよあらずんば勝利を得がたし然れど事急なれば君英も助力を乞とも救ふべからず一旦遺所を退き急ぎ朱大君を請し計略を問て交戦あらずんば叶まじ李勇が自我縦ひ敵軍に向て戦死すとも焉ぞ杜君英匹夫よ手を束る事をせん況や今敵の爲よ鹿耳門を破られ何の面目ありて朱大君よ見べき唯一戦じて敵を退散し勢ひよ乘じて鹿耳門を奪反むか然らずばおもふ程敵を討て陣没すべしと教團を陳福壽止て曰兵書よ寡の衆よ敵せずといへり今鹿耳門敗れ氣を屈したる勢をもつて清軍の剛く

壯なる敵に當らんこと大に不可なり江國論の諫育よ隨ひ敵の來銳を泄し謀を定て戦ひいへ李勇漸笑て曰是腐儒の論あり御邊等無用の舌を搖して我軍の勇氣を折く事なかれ敵何百万ありとも我が眼より見る時ハ蠅の群が如し豈怖るよ足んやとて敢て諫を聞ず陳福壽せんかたかく退き嗚呼自ら侈り敵を侮る者の敗ると謂りと長嘆して止す時に敵のや間近く押寄いと報ず李勇些とも動せず張着蘇降を左右よ備へ黒龍の峻足よ打騎戦を提げ鐵騎二千五百を卒し鎮門を開て擊て出大軍の中へ斬て入其勢ハ疾風の如く李勇戦を一度舞せば十將驍り落往來を馳騁する事人あき所を往が如くあれ其猛勇よ辟易して清將守備林亮千總董芳等敵する事能はせしてばつと避開く施世驃遙よ是を見て大いに駭き噫すさまじの強將や誰か出て渠を討とるべきといふ事いまだ終ざるよ承りぬとて一員の大將勢を帥て殺出す諸人は是を見りよ將中の豪雄魏天錫なり施世驃尙過ちあらん事を恐れ鞭を揚て王萬化を指麾し王萬化早く其意を覺一軍を帥て擊て出伴と敵の後へ廻り魏天錫の前より薙て前後より李勇を夾み討李勇事ともせず兩將を對手として左よ擊右よひらひて挑み戦かふ時正よ六月の中旬なれば炎暑煎がごとく三將腦より汗を流して揉たりけり李勇絶世の豪傑なりといへとも魏天錫王萬化も聞ゆる驍勇なれば刀法少しも亂ず斬結ふよぞさしもの李勇も是よ疲れ戦かひ倦て見えよける施世驃其間よ諸將よ令を傳へ大軍を以つて李

勇が勢を鉄桶の如く圍せければ張看蘇降も數ヶ所傷を蒙る李勇斯てハ叶ハレ魏天錫玉萬化を棄一方を擊破んとする魏天錫王萬化尙付廻しつ、突てか、れハ奈何共すへき機なく李勇只吐息して今ハ斯よと見し處ハ清の大軍東南の方より忽然として亂立黃錦の旗を翻して一員の大將眞魁ハ馬を躍せて斬て入是明將江國論なり李勇ハ是ハ力を得俱ハ敵を追壓け辛して敗れ走る施世驃ハ機を見て變ハ應ずる智將なれば李勇が營ハ飯らざる以前ハ藍廷珍を遣して陳福壽を追落し明の陣營を攻取けるを李勇ハ夢も知キ江國論等と馳めくりて陣營へ入んとされハ遠ハ陣中清の旌旗ハびた々しく指出し櫓の矢間楯の影より雨の如く箭を射かけ一人の大將其聲鐘の如くあるが簾賊盔を脱腕を曲て縛を受よと叫ゆる是即ち藍廷珍あり李勇江國論等茫然として惘果是ハ叶ハレと路を横切て弊へ走る此時施世驃王萬化魏天錫の諸將大軍ハ令して一騎も餘さず討とれと短兵急ハ追討し首を斬事數しらず李勇江國論張看蘇降等且戰ハ且走り衆軍深手を負今ハ馬弱リ人疲れて進退茲ハ究りけるよおもひもよらず山の後より晚風一面の緇旗を捲出して明の張阿三が一軍遮り出追來る敵を驅散し李勇等を救て走りけり此時日ハ己ハ西山ハ沈けるよ再び山の背より一條の煙湧りて空を凌ぎて天ハ沖る施世驃王萬化魏天錫等の諸將是を見て心大ハ疑ハ或ハまた遙ハ望ハ十里ハかり向も同ク煙氣天を衝ければ施世驃身方を顧て曰是必

守敵ハ謀計あるべし長追なせそとて急ハ鐘を鳴して軍を班め士卒を遣して潛ハ窺ハしむるハ頓て立飯り只煙を上たるばかりよて敵一人もあしと報ず諸將いよ々々疑ハ遂ハ師を収て回りけり是ハ朱一貴が兼て教へおきたる謀よて追兵を疑ハしめ身方へ敗軍をしらず烟ありとハ後よを突としられける施世驃ハ且一日の中ハ鹿耳門安平鎮を恢復し五千余人を虜とし首級を得る事數しられれば衆軍大いハ勇み悦ハ施世驃また曾て藍廷珍ハ命じて敵の陣營を奪ハしむる時物馴たる者五人を擇み生捕たる明の士卒の衣服を脱せて件の五ハの者ハ着せ其幟兵符をも右五人の者ハ持しめ逃往勢ハ推ませて遣しけるを敵も身方もしるものおかりけり是ハ明軍の機密を内通させんとハ謀計なるべし

○一貴埋地 雷於柳原

明將李勇已ハ勇を恃て江國論陳福壽が諫言を用ひモ無謀の師をあして散々ハ敗績し其身をハヒめ諸將皆傷を蒙り辛き命を免れて夜中ハ一崑身ハ走りかへる此時朱一貴ハ一崑身ハ屯しけるが遙ハ敗軍をしらせる煙立ければ倍ハ鹿耳門安平鎮の交戦ハ身方利を失ハしあらめ今此處ハ一奇計を設け支へ防がずんハ叶ハレ敵兵必ず明日攻來るべし我よく是を破らん其謀計を定む時ハ陳福壽敗殘の兵を帥て一崑身ハ逃來り李勇と杜君英と宿意を爽て矛楯ハおよハ遂ハ敵ハ不意

を伐れ鹿耳門安平鎮兩所とも破れと報す朱一貴さぞあらんとて更驚く顔色あし然る所へ李勇以下の諸將敗軍を帥て退々回りきたり罪を乞朱一貴是を安撫し勝敗の兵家の常あり何を耻るよ足んやとて酒宴を催して軍勞をねぎらひ衆軍を安寝させて後暗に物狎たる兵千余人を卒し身方よだも知せを兼て準備せし火薬を車十輛積て忍んで押出させ自ら地理を見つるよ一崑身を去事十里ばかりよして敵軍の寄来るべき路よ五柳原といへる平野あり是こそ天の佐る屈竟の所よと數千の坎を掘せ一穴毎よ火薬をこめ其上よ柴蘆葦を刈ておき又其上よ土を覆ひてぞ回うける其事よ預りし士卒等更よ何の謀なるをしらず彼施世驃が謀計を受けて明の敗兵よ紛れ明の陣よ居る五人の間者潜よこの形勢を窺ひ見て是必定陥坎の謀計あるべしとて五人の中二人の急ぎ清の陣へ馳到り如斯々々の備ありと報す施世驃聞ては何程の事わらん敵の謀を齧餅よおもへしとて次の日早天よ鹿耳門安平鎮兩所の戦ひよ生捕たる五百余人の兵を召出し酒色を與へ恩を施して日汝等原罪あし纂賊朱一貴よ推運られ止事を不得して其手よ厲せしおらめ故よ今悉く死を免し放ち回すべし飯て朱一貴よ見へ利害を説て志を改め我よ降しめよもし渠尚順はずんば如何もして一貴が首を斬て再度きたれ恩賞の望よ任さんとて陣中よ有所の傷を負たる馬或の老衰へたる馬どもを多く出させ傷者老人あどを乘て許し回す生捕れたる者大いよ悦び深く恩を謝し

て出往けり其次よ施世驃李祖陳允陞兩人よ命じ御邊等一萬の歩卒を帥て手毎よ蘆葦を持せ先よ放ち回せし者どもの陥坎よ落入を見すまし其上へ蘆葦を布埋て我軍の通るべきやう路を造まひへと指揮す兩將命を受けて若く壯みる者一萬人を擇み各々埋草を持しめ出て往世驃今よ心安しと三軍を整へ徐々よ一崑身へと押出す去程よ李祖陳允陞の兵卒を厲して道を急ぐ程よ先よ許し回されし明兵よ追付汝等何を遅礙するや早く往て我大軍の効をあす事かかれと聲々よ喝ければ明兵大いよ怕れ足を逸めて五柳原よ到ると比しく人馬とも覆土の坎よ足を踏込と見えしが忽ち列火迸り出百千の雷地中より奮起するが如く鳴響き黒烟遍滿し滿地裂破て火玉の飛出る事蟻の如くさしもの廣き平地一面の火傷とあり石を飛し人馬を裂憐しべし明の五千人と清の一萬人俱よ片時が間よ燒爛れ微塵よ成て失けるの目も番られぬ形勢あり施世驃の途よ此物音を聞て大よ駭き急ぎ斥候を出して見せしむるよ頓て馳回り一五一十を報せ世驃嗟歎し偕に敵地雷う伏けるを聞者陷井を設くと見過りて告しが故李祖陳陞をいしめ一萬の兵を失へり是我が過ありされとも問者告きたらすんば身方一人も残らぬ朱一貴が爲よ塵よせらるべしと舌を巻てどおそれけるまた一崑身の陣よ五柳原の方よ遠よ天地震動する許火炮の響かびたしく聞ゆるよを須驚敵兵寄きたるぞと聞ぐ朱一貴陣中へ觸て曰衆兵騒ぐことおかれ是我が奇計よて手を動かさずし

て敵を拉きたるありと曰せければ陣中漸々鎮りけり其後火勢の鎮りたる頃斥候を出して見せしむるは案の如く数千の馬焦爛て五柳原は充滿したりされど遙く金鼓の音聞えて大軍今も寄來る勢ひあれは急ら馳回りて斯と報ず朱一貴さらば守禦の備をせよとて諸將を配當して今や寄ると待居たり

○藍廷珍破一崑身

時六月十七日午の刻清の大軍野は滿山に漫りて一崑身へ押寄賊を咄と揚る中、藍廷珍陣頭の馬を乗出し大音の響賊等よく聞ゆる野の地雷を伏て我が軍を盛よせんと謀れども我が提督の明智早く是を察し却て一萬余人の生捕を放ち飯して彼地雷を設けたる平野にいたらば爾が手を以て爾が兵を焼しむ斯小兒を欺がごとき拙謀計をなす事あかれと一同に咄と笑ひ勢ひに乗て一舉に踏破と先を争ひ攻上る明軍も橋の上より大石大木を投かけ矢間の際より雨の降如く矢を射出ければさしも勇みたる清兵も若干討れ攻倦んで見えよける李勇敵の標を見て躍て出んと聞きけるを朱一貴制して曰敵の大將よく兵を用ひ機變に通せりと見えて軍立尋常ならず殊に今勝誇て英氣壯なりよしや撃て出て一度の追退くとも身方も多く兵を拆さん不如力を竭して防禦し其氣勞れ勇機を待て追散さんといとて愈堅く守り防ぎたれば清軍も其急に破り

がたぎを見て伴と攻口を弛べて遠攻よし其日も暮ければ兵を班めて本陣へ回り諸將施世驥も見へ此城如何して攻落すべきと議す世驥が曰前遣いせし問者も豫め謀を云合ふきたれば遠からば敵を追落すべし諸君思ふ事勿れとて少しも思慮する体なく酒を飲で笑ひ樂みければ諸將さらし信せし疑ひ危みながら其夜の打臥て軍勞を休めけり斯て短夜早く明わたりければ清軍また敵營に押寄賊を發て攻立るゝ明兵も鐵炮を放し箭を射かけ茲を大事と防ぎ戦ひけるゝ忽ち明の陣營の後より火發り黒烟天を曇せ烈々と燃上るゝを明軍仰天し是の如何我陣に裡斬あるとと遽に城中上を下へと騒動す施世驥の敵營に火の發るを見て須波此弊に乗じて攻破よと三軍も下知を傳へ射とも突とも不顧鯨波山野を動かして一齊に攻進ませ遂に城門を攻破り亂入明將死刃を竭して此所を支へ彼所を戦ひ命限は防げとも亂れ立たる勢の癖として士卒紛々と亂れ騒きて遂に大崩となり我先よと逃走るゝを朱一貴も力および諸將と俱に七崑身をさしてを落行ける清軍も師の勝たれとも士卒若干討れければ明軍の勇壯慢りがたしとて強ても追ぎ火を鎮て一崑身の寨を乗取勝軍を祝し將卒の功を賞しけり

○朱一貴大破三清兵

去程は朱一貴の七崑身陣をとり深く思惟するゝ五柳原の地雷を敵も覺られ且一崑身の寨を燒

れたるを以て考れば決して我が軍中より内應せる者あるがさらすべ敵の間者紛れ居て機密を漏し火災を發せしあらめとて軍中を微細に點檢せしむるは果して四人の間者を捉へ得たり朱一貴大いに怒り兩度の敗軍みち這奴が所爲なりとて曳出して寸々斬刻せけり此時杜君英の清の大軍臺地へ向ふとて急き淡水營より馳歸り身方の軍は加へりければ朱一貴限りなく喜び李勇と並ひ座せしめて利害を説遂に和睦せしめ諸將を謂て曰何ぞはからん間者の爲に我が謀計敵へ漏兩度まで利を失へんとは是余が號令を密にせざるの罪あり然れども間者を探出して誅したれば以後機密の泄る事あらば量るは敵軍數度の勝利は心侈り我軍の怕れ屋んとのみおもひ自然怠慢を生まべし然る所へ此方より火急に逆寄せば只一戦に勝利を得へしと議しけるは諸將尤も同意を是より依て朱一貴其配當をなす先鉄炮の兵五百人を擇み張着を大將として右に備へるの精兵五百人を勝り張阿三を大將として左に備へる鎗と手煉せし兵を五百人揃て蘇降を大將とし中央に備へ其後杜君英は五百人を添て左軍とし李勇は五百人を與て右軍とし躬の中軍は將となりて江國論陳福壽を左右に備へ精兵一千余騎を引卒し汪飛虎は歩兵五百人を授けて遊軍とあし呉外は本陣を守らせ隊伍一齊に備へりければ大明帝令と大字に書たる紅の大旗を眞先に進め即日一屍身へを押寄ける朱一貴遙に敵の陣營を望めば前より一面に疊楯を衝ならへ其蔭に射人を

隠し一備の大將是を守り士卒皆具足を脱ぎ浪波といひ討て出べき形勢にて用心緊く備たり朱一貴是を見て嗟嘆して曰是必らず清朝にて智略勝れし大將の指揮あるべし此隊へ尋常はあらずとて先金鼓をならし喊を上げて攻蒐る勢をなしければ敵軍敢て騒がず鎮り反て一人も出る者あし是より因て張着を壓ぎ撃て蒐れと下知しければ張着間近く押寄一齊に鉄炮を打かけ、るよぞ忽ち疊楯を撃倒しける于時其蔭に備へたる清兵鏃を揃へて矢を射る事雨よりも繁し張着が勢は射しらすされ支度路も成て亂る、所を清の大將守備林亮五百許の勢を帥て透間もなく撃てかゝる張着が勢益々噪ぎ立て散々敗走を是を見て蘇降が一手の勢横合より鎗を揃へて突て蒐りけるよぞ林亮また突崩されて支へかねて見えければ張着取て返し差夾で撃立る林亮か勢遂にた、か討れ這々敗退く此時また清の陣より紅の旗たなびら出て呂瑞麟一手の勢を卒し方天戲を舞して喚て蒐る是を見て明の陣よりも李勇五百騎を帥て馬を飛ばして撃てかゝり自ら呂瑞麟は渡し合せ一連に戦ふこと二十余合呂瑞麟力疲れ叶はずして逃走るを李勇透さす追蒐る李勇が乗たる馬は黒龍と呼ぶ駿足なれば疾風の如く駆て追着ぬ李勇狼臂を伸て呂瑞麟が鎧の上帯を掴み地上に動と投つけ矛を伸て刺んとするを清の大將蘇孟良魏大猷等呂瑞麟を討せんと突出して李勇は撃てかゝる是より因て呂瑞麟の腰骨をした、か打折ければ歩卒は助られ辛き命を助かり

けり李勇大い怒り蘇孟良魏大猷二人は當り二十余合戦ふと見えしが魏大猷が鎗を左手に振り蘇孟良を刺して落し魏大猷其猛勇を恐怖し叶ハトとやおもひけん鎗を捨て逃走する李勇是を追んとするは流箭一ツ來つて肩尖へ發止と立されとも鎧の札や強かりけん弓勢や弱かりけん敢て裏をかきさりけり斯て兩陣入みだれ黒烟を立て接戦しけるは清の大將鄭輝祖魏天錫朱文謝希賢范國斗等大軍を帥て潮の湧が如く四方より掩ひ來る中にも魏天錫の府中の逸勇あれば奮然として鋼刀を挿して斬て入人馬のさらひなく斬ておとせ張看蘇降か勢散々駈立られ紛々どありて亂れ走る魏天錫勢ひに乗して是を追已に中軍へ衝入んとする所は杜君英一軍を帥て擊て出是を遮り留め魏天錫は渡し合互は勇威を顯し戦ふ事八十余合魏天錫猛虎の怒をなせば朱君英飛龍の勢ひを張て更は雌雄を分たざる所は清の大將范國斗一手の勢を帥て杜君英が軍を目がけ眞一文字は蒐來るを明の陣より張阿三が一軍横合より出て鎚を揃へ一齊に切て放そよぞ范國斗が勢忽ち象戯を仆が如く矢庭は百余入射て落さる張阿三猶も勵く差詰引詰射させければ范國斗が勢射しらまされて敢て進み得ず此間も魏天錫杜君英の群る勢は押隔られ物別れして息を休めける此時また朱文謝希賢が軍掩殺しきたりければ清軍是も機を得て逆浪の岸を崩すが如く喚叫で中軍へ攻かゝるを汪飛虎が一軍撃て出四角八方へ蒐散す事旋風の砂を飛すが如くなれば清軍又し

らけてぞ見えける李勇杜君英の此は戦ふては彼も出彼所も働きては此所も戦ひ敵軍の中を縦横して人を斬事芥の如しされとも清軍の目も余る大軍あれば事ともせず小勢の明軍を追圍み一騎も余さじと採立る朱一貴遙は是を見て時こそよければ江陰論陳福壽を左右に備へ霧地暗し斬て入朱一貴自劍を振て清將十三騎を斬て落す其勢は恰も香象の海に入て波濤を開が如くなれば清の大軍一度は亂れ人馬互は踏殺され押仆され矛を捨て落して散々も敗走す朱一貴十分は打勝前面を屹と見るは藍廷珍王萬化が旗翻りきたるを見て敵は新兵加はるぞ長追おせそとて鐘を鳴し勢を班め敵の追來ん事を量り李勇汪飛虎を左右の山隘に伏杜君英を殿として徐々と七崑身へ引て往藍廷珍王萬化已は追討せんとしければとも明軍の隊伍紀律有を見て其勝利を得がたきを察し遂は追で止まけり

○世驃之壘陣破明兵

一崑身の交戦は清兵多く兵を拆さければ提督施世驃不悅して諸將を集會し詰して曰明賊よく兵道は達せし上部下は李勇杜君英のごとき驍將有て其鋒するごとく我が軍は却て鈍し今日の戦ひ敵の小勢身方の大軍なるは敗をされるぞ安からね是他の議をし諸將前々の勝利は心驕り敵を侮るより敗軍せり大敵をも怕す小戦をも侮らざれとい三才の嬰兒もしれる兵道の戒めあり自今以

後心を責て敵を唾んせキ賊軍の根を斷葉を枯して上の帝王下の萬民の心を安んぞる社樹要され
 我曾て疊陣の法を學べり明日の此陣法を以て敵は當らん賊軍勇ありとも此陣は臨の粉の如く碎
 ん事何ぞ難からん然れとも列將法令を嚴密に守らすん勝を取がたし依て一人よても退く者の
 立所は斬て軍法を糺すべし士たる者の只一步なりとも敵陣は進んで死をるこそ本意されと固く
 誠め其夜は手配を定め明る十九日大軍整々と隊を立七崑身へを攻寄ける明軍も兼て期したる事
 ならべ陣門を颯と開き大旗の下は李勇馬を立遙は敵陣の隊伍を見るし陣法尋常は變り緊く甲冑
 せし歩兵一面は座して鐵炮の筒口を揃へ其後より同く鎧騎を連て中座し其後より精兵の射人
 一面は立ならび又其後より騎馬の將士弓矢を搭ひて一面は備へ其余の大軍壘々累々として百重
 千重より重り其數幾許といふ限りをしらす其後より諸州の豪傑甲冑を爽として列位得器を携へ
 駿馬は跨りて扣たり李勇へ何の陣法とも知らざれとも自ら勇を恃何程の事あらん蹴散して退んと
 咄と喚て撃てかゝる清軍一聲の鼓を響すと齊く鉄炮を放ち矢を射る事雨よりも繁く李勇が勢人
 馬とも射すくめられ敢て面を向へざるやうあし一陣放ち異は第二の隊其前へ立替り透間もあく
 放しかけ一足よても退く者の立所は斬て捨隊を亂させ進みしかば李勇心ばかりの猛といへとも
 一步も進む事能はず憫ひて、なす所をしらす忽ち二三百人矢炮の爲に討れ遂は叶ひて引回をも

ぞ江國論張看一彪の勢を帥て李勇は入替り撃て出けるが同く清兵の爲は多く射落され叶ひせじ
 て引退く是より陳禮壽蘇降汪飛虎杜君英替るく出て支ゆれども疊陣の爲は碎かれ楯も柵もた
 まらば社數百人討せて敗走す是は依てさしもの朱一貫も施すべき計策あく一旦此所を退けよと
 いふ程こそあれ倦み果たる明兵我先よと北走る清の諸將是を見て瀆波敵の敗走するを追蒐て一
 人も残さず討取と下知を傳へ鬪を揃へて斬て廻るよも明兵の討る、者麻を亂せる如く荆を布よ
 けも繁し李勇杜君英は身方を安く退せんと只二騎踏止り追來る敵を斬て落す事數をしらす然れ
 とも積く身方のさく敵の目よ余る大軍なれば遂は叶ひて俱は引退く今日の戦は明軍大半討れぬ
 清將は猶根を斷葉を枯さんと短兵急は追蒐已は海邊へ追詰けるよ忽然として岸陸より大明帝令
 の旗を指たる船百余艘漕着彼神通道人飄然と舳先は顯はれ明の將卒を招き乘飛が如く漕失ける
 よも清の諸將も是を追べき計なく空く沖を睨み遂は海濱に陣を構へけり

○施世驥追敵淨海

明軍の世驥が疊陣の法は碎かれ已は十死の場は臨みけるよ忽ち神通道人の救ひの船を得て一生
 を得瀨口は水陣を張其時朱一貫道人は向ひ再拜して曰小子計策拙くして敗績し已は死地は陷
 じよ幸は上仙の救ひを得て保ちがたき命を保つことを得たり願くは此上敵軍を敗る謀を授玉へ道

人笑て曰治亂素り天數あり人力を以て奈何ともそへからせ一旦の勝將何ぞ齒牙するも足んや機變の術の我曾て卿は授與せり然る上の又何をか教ゆへさ唯卿が慮りよ任を遮莫十計盡て施す謀あくんば其時よ臨で是を開き見よとて錦囊を取出し一貫よあたへ雲よ向て一度塵び一陣の風吹起て道人の乗たる小船を送り帆もなく人も漕ざるよ波瀾を凌て沖路遊よ走り往船影見えぬありければ諸人奇異のおもひをあして眺居たり江國論朱一貫よ問て曰彼道人如何なる神仙あれ

我徒の危急を救ひ今又風を呼で自ら去や朱一貫が曰余未だ列位よ道人の來由を説すと雖諸將の惑を晴さん爲よ語るべし原彼道人の古の飛虹將軍鄭芝龍が嗣子延平王國姓爺なり在世の時よ明よ臣たるの節を改め老度々清の強を碎し事口碑よ傳て犬擊童も是をしれり然るよ一日天柱嶺よ登て劉伯温が遺書を得遂よ尸解して仙とあり平日天下の名山る飛遊せり就中臺地の天柱嶺の往日仙書を得し地といひ山水の佳絶あるを愛して屢彼山よ在住し或時よ城市よ出て民よ舟水を施し其疾病を除くよ万人よ一人も愈ざるのあし茲を以て世人神の如く推崇で神通道人と稱よ余も一度道人よ見て其神仙なるを知深く崇敬せしよ道人早く余か大志と懐を察し兵道の秘訣を悉く授與して其身の本末を語り先よ臺地の人民よ某の月某の日大明帝令の紙旗を立香を焚て災害を免れよと教へ余が軍を扶しも道人の計あり其後久しく見る事を得ざりしよ今



余が軍の必死を救ひ且錦囊の謀を賜る豈頼もしからずやと語ければ江國論をいじめ諸將歩軍まで大い喜び遙は沖の方をぞ拜しける時清の提督施世驃は海岸に屯して猶も敵の根を斷んと次の日物狎たる士を船に乗諸方へ分ちて明軍の行方を窺ひせける一人漕回りて敵の瀬口は據水に浮て陣を張いと報せ施世驃是を聞て急ぎ近き港々の船を集め大軍を乗しめて瀬口へ押寄んと欲そ其形勢船艦江に横はり旌旗天を掩ふ朱一貫是を見て手を拍てわらひ清の大將よく陸地の戦法をしるといへるもいまだ水戦の術をしらず今余が軍を追て總軍水に浮む余が謀計已に成れり必定明日奇きたるべし我敵軍を盡せんとて先張看蘇降は郷兵一千を與へて蘇錯申は屯させ敵もし不意後へ出ん時の備とし兼て多くの火箭を作設おさけるが今此所まで用んと密に手配を定め敵寄來らば瀬口へ拘り入岸頭より火箭を射かけ悉く焼沈んと備をなし寄るを遅とぞ待よけし清の陣は斯ともあらむ軍議區々ありける所忽ち一人の儒生小船に棹さし漕來りて提督施世驃を見んと乞陣門を守る兵怪みあがら斯と報じければ施世驃命じて迎へ入しむる其人眉目清秀にして儀表頗る俗を離れたり施世驃が曰そも先生何事の教有てか我陣に來るや儒生答て曰此兵革發する以前は神通道人といふ者あつて符水を與へて民の疾病を癒し諸人を飯伏させて後示して曰五月に到て大なる禍災有へしもし帝命の二字を旗に記し門に立て香を燒祭る者

命を全すべし然せざる者の災害三族よおよぶべしといふ茲に於て諸民其辭は順されども我が一門のみ道人がいふ言を怪しみ是必ず妖術偽計なるを知て敢て帝令の明旗を挿せず故に明賊是を怒て亂を起すの初我が一族を殺し盡せり我の幸して其難を避たれども已に一類を絶されたれば恨み骨髄を徹せりされば我天下萬民の爲に君侯より一大事を命奉らん爲に嚴威を犯してきたりは今見奉れば御勢敵を追て水は浮玉ふの察するは明日瀬口へ推寄玉のん爲にあらすや世驥が日然り儒生が曰は大い不可あり抑此瀬口の臺灣府に往の水口にして甚に深く水勢渦巻激して船一度入時の急は出る事難し今敵の地利を得將軍の兵の死地に入り且賊將朱一貴智謀深く機變究りなし今走て水は浮玉彼が謀計なり其故奈何となれば將軍の兵明日瀬口へ寄玉の敵軍皆岸より岸頭より多くの火箭を放て船を焼く將軍何を以て防ぎ玉ふべき必定諸軍周障して亂るべし其時敵後に回りて水口を截斷す大軍出るは路ありして惜むべし堂々たる豪傑名侯た一朝は焼死して尸を鯨鯢の腹に屠れ玉ふべしと辨舌滔々と説ければ施世驥聞て心揺々として醉るがごとく全身冷汗を流して一度の駭き一度の怕れ謝して曰實は先生の教はあらせんば正に我が大軍一貴が爲に盛あるべし嗟危きかあど歎息しけるが心中より猶此儒生不意に來りたれば若し朱一貴が謀あらんかと孤疑して決せず儒生早く施世驥が疑念の氣色あるを觀で

笑て曰此度の兵革は朱一貴杜君英李勇以下十余人の奸賊亂をあるのみ百姓の皆朝廷の赤子なれば天兵の至るを見て恰も枯たる苗の雨を待が如し將軍胡を懲り義而吹し蠶事をなし玉ふや吾妻子を引きたりて人質とせん必を疑ひを爽で大事を廢し玉ふ事勿れと理を盡して諫めければ施世驥初て悟り自ら立て儒生の手をとつて上座に請し拜して曰若今日先生の來るは非せんば明日我等衆人敵の謀計に陥るのみならず大い國郡を失て天下の大患を醸すべし是高天清朝を保護し玉ふ所なり願くは高姓を聞んと問とも儒生の只名もなき者といひとて姓名を不告施世驥益々高風を感じ當座の賞として金銀若干を與ければ儘夫辭して一錢をも不受吾が志いたく萬民の塗炭に沈むを救んと欲するのみ焉を苟も恩賞を貪るが爲に來りしべきとて袖を拂て歸り其夜即ち妻子を引來りて質とあしけり世驥喜び問て曰今如何ある計略を以て賊軍を敗るべき願くはあしへを垂よ儒夫笑て曰將軍の世の英才何を小生が及びしべきされとも小生が見よらば先總軍敵陣へ攻かゝる体をなし一軍を残して支へさせ却て大軍の水口より陸より上り敵の後より出玉へ我其時郷兵を引來りて郷導をあししべし水の手の一軍の敵をおびき出して伐玉へ然らば朱一貴が謀計詭計前後に途を失ひ悉く擒とありけん不知此計の如何施世驥大い喜び是よく我意に合はるとて其準備をなしければ儒夫の約を固して妻子を渡しいでさりけり

○廷珍大戰蘇錯申

斯て施世驃の儒夫が計は從ひ其夜の守備林亮魏大猷洪平千總董芳等は精兵一千を分ち與へて水港を探せ又藍廷珍を呼で日足下の北路の兵を領して西港より進むべしと令す藍廷珍領掌し其夜杉板頭の船二百艘は取乘魏天錫金作礪葉應龍武奉兒洪範は精兵一千を與へて先鋒とし林政李祖は精兵一千を與へて左翼とし王萬化邊士偉は精兵を與へて右翼とし劉永貴は精兵五百を與へて左旗とし范國斗范宗勛は精兵五百を與へて右旗とし呂瑞麟蘇明良は壯兵四百を與へて後陣とし軍を西港の仔宮寮に進め水口より陸は押上るは約を違はず儒生多くの郷兵を引卒し來り應ず藍廷珍大い喜び是を教導として路を急ぎ程なく蘇錯申は近着前面を遙望め數千の敵軍蘇錯申は屯し往來する體會て隊伍なし察するは皆臺灣の土民ならんと伴と勢を分て西港の別道より進む此時先鋒魏大猷金作礪葉應龍は蘇錯申は出れば明兵忽ち金鼓を鳴して湧が如く殺出す魏大猷陣列を立て鐵炮を放せば明兵も矢先をそろへて雨の如く射出し挑み戦は清兵少し瘡痍が見えたる所を張看蘇降鋒を揃て撞て入當を幸ひ切て落す清兵益々亂れ立けるは清の先鋒魏大猷葉應龍金作礪駭台せて支へ戦ふ時は藍廷珍鐵炮の音連綿たるを聞て先陣已は敵と戦をしり儒生の郷導はしたがひ衆軍揉はもんで別路より敵の横合へ衝出し左は林政李祖あり右は王

萬化邊士偉あり何れも戈戟を舞して薄地暗は斬て入は儒生も郷兵を帥て後續は力戦す其勢は烈風の野草を吹しが如くあれは張看蘇降勢は敵しかたきを知て馬を拍て逃走る大將斯の如くあれは士卒何を全かるべき紛然と亂れ立て膽を冷し魄を落し散々は敗走せり清の諸將勝は乘して追殺し首を取事算を知らず張看蘇降した、か討れ遣々敗軍を聚て瀨口へを回りける

○世驃計折三明水軍

時乙廿二日施世驃飛馬を飛し書翰を以て遊擊林秀の安平鎮より瀨口へ攻蒐り敵をおびき出すべしと云遣し後營遊擊許華は一崑身より瀨口へ推寄敵をおびき出すべしと云遣す林秀許華書翰を得て即日兵を進て瀨口へ推寄伴と敵船近くの寄せ士卒を船の船先は出して或は楊或は尻を露し或は指して罾り或は手を拍て咲ひあをさせけれは杜君英李勇等が手勢敵の謀計との夢も知も腹もそえかね兵船を揃て撃て蒐る林秀許華少時支へ伴と防ぎかねたる体をあし備を亂して漕走る杜君英李勇須波敵は亂る、ぞ追蒐て一騎も余さず討取よとて敵の逃るが面白さよ我をわすれて追駭行朱一貴斯と聞て大い駭き杜君英李勇等敵を水口へおびき人よと命せし我が謀を忘れ却て敵の謀計は中れりとて急は早船を以て呼返さしむれと李勇等の早遠く敵を追て追付と能は此時世驃は多くの小船を設け其上は數千の鳥炮を連並べて待かけしが敵をおもふ圖は

おびき出し時分のよしと傍より衝きたり横手より鳥炮を一發せければ是が爲に明兵夥しく撃立られ水中に落ちて死者數知ず海水時々變りて紅の色となり時ならぬ萬山の紅葉の散浮は異ならず杜君英李勇偕に敵の謀計に中りたるを急ぎに下知を傳へ辛して引退さけり朱一貴の船手の戦ひを氣遣ひ安ら心もあかりけるは張着蘇降大い敗し朱も成て敗卒と具に蘇錯申より逃回り青息を吐敵の大軍悉く陸に上り味方の後へ廻り候と報す朱一貴大い駭きて長歎し如斯くて我が計己に盡餅とあれり清將眞は機變に通せり敵の後を取さられてハ叶ハトと皆一同に船を捨陸に上りて走りけるは陸の手の藍廷珍遙は是を見て須波明賊の走るを一騎も余すなどて関を發し勢ひに乗して掩殺しければ走り後れたる明兵數を盡して討れける噫々彼儒生一人あらもんべ清軍悉く水底の水屑とあるべかりしは渠世驥の計策を献りしがゆへ鬼神をも拉くべき朱一貴謀略詭譎して大敗に至る偏は清朝の高運ゆへとぞ老れける

○朱一貴計策却敵營一

斯て藍廷珍の逃るを殺して塗擊堤に至るは遙十里ばかりも彼方の山々も明の旌旗數限もなく驕り出て雲の如く寛の如し藍廷珍是を見て敵は援兵の加りたるを長追して計略の中るを勢を班め其所に陣をとる偕も朱一貴の討獲されたる兵を引て走りけるは明の運も今の斯よとむもひ

けるが將清軍の猛威に恐れけるか路上にて大半落果の唯八百人ばかりぬ然も其中疵を装りたる者もあり又の老人の役も立がたき者多ければ朱一貴天を仰で長歎して曰諸將義氣を逞しうし力を勞し玉へとも奈何せん天の時いまだ至らずして空く茲にいたる一旦此所を去て遠大の計略を廻すべし李勇が曰主公何ぞか、る怯弱ある事を曰をそれ勸敗の兵家の常として今も初し事ともならず又小勢を以て大敵を碑し例も枚擧をるは違ふしいま味方新に敗して兵寡しといへども幸は將たる者のいまた一人も死亡せず各死を一圖にして敵もあたらは清軍を追退ん事何ぞ難かるべき一度敵を退けあへ再び兵勢強大に成べしもし又遯拙く敗績せば身を原上の土に歸して名を精史に留ん事固り各期したる所ありと詞を放て諫ければ杜君英も李勇が言を壯ありとして俱に進んで戦ん事を望む朱一貴頭を左右に揮て曰足下等が論する所義にして且勇なりといへども唯是血氣短慮の行にして格論と一言がたし時務を察せしめて無謀の戦ひは身命を捨んは無益あり是迄の争戦は一を以て萬を碎き六七日を不過して羣濤を斬隨へし程の勢ひも一朝の敗戦より手を反すが如く衰へて施す程の謀を敵も覺られ萬事心も任せずして事茲におよぶ事是吾が智の不足もあらず諸將の勇あきまあらず唯時運の熱せざるあり彼勾賤が呉の爲に困められしも石淋を嘗の愧を忍よあらずんば焉よく會稽の勝利を得て呉を亡し得べき抑はじめ

岡山は義旗を揚し日狂風の爲は帥の旗を吹折れし天より凶を示せしと察せしかと伴と吉兆
 ありといひて兵を發せし一度天下の人心を挫いためのみ敢て長久の謀ありし今味方再三
 の敗軍は多く兵を折くといへども初め義を唱て大事を企し大將の一人も戦死せし是天いまだ
 皇運を不斷して大明再度興り熾々としし光を萬代に輝まべし兆あり宜く一旦の耻を忍び時の
 到るを待べし敵勝は乗ずといへどもいまた我軍の虚實を知得ず故は施世驃が智慮深きも大軍
 を塗撃堤は屯して輕忽は攻蒐るべからず此間も手輕く引退べしと議する所は斥侯の士一人遽
 しく馳回り敵軍今夜々討ふ寄んと其準備頗る備へ御油断ひまじと報す衆人これを聞て大い
 驚き今兵困し勢ひ窮りたるは敵の大軍は取籠られなば一人も命を全する者有まざると衆顔色如
 菜怖れ惑ふ朱一貴が曰衆人深く患る事勿れ前は國姓爺神仙十計窮る時臨て披き見よとて錦囊
 の謀を遺し玉へり今其教は隨ひ活路を得べしと噉 監して彼壘を披き見大い悦びて曰
 果して神仙天地を見抜の識量ありとて急し士卒を分ち其邊り遠近の敵を半より中切は截せ多く
 の繩を集め其を二三尺宛は切小口は火藥を塗て火を付是を其生竹の裁小口を割て一面は夥し
 く挿ませける他所より是を臨見れば重々疊々として恰も數萬の軍勢手毎は鎮炮の筒口を揃て
 敵寄らたらば一齊は切て放し寄兵を塵よせんと構たるが如し明兵此謀計を見て感歎せざるを

いふ者あく静まりかへつて扣けり斯どもしらす清軍は今宵敵陣へ夜討をかけ四方より火をかけ
 て周障する所を一騎も残さず討とらんと監廷珍班の中より手賦を定め夜は入て押出し敵陣を遙
 は臨は數万の火光星斗の如く數十里は充滿たれば大い驚き是は如何敵軍へ夥しき援兵加
 りたるを報て琉球交趾さんとより加勢きたるあと、流言せしが偽言あらせして其勢の來りし
 やと軍中區々評議して安さ心おし監廷珍も是を見て實はかほどの大軍のきたる事尋常の事あら
 し外國の援兵來れるからば今夜必は敵より夜討をかくべし其準備せよとて敵を擊事ハ儲かさ
 かへつて軍中へ觸わたし隊を堅め陣外の四面は鳥炮の兵を多く備へ敵寄きたるとも只鳥炮は打
 そくめ堅く守り敢て出て戦ふ事おかれと令す明の陣は朱一貴敵の寄來ざるを見てさも有さん
 と微笑しいざや敵は一驚を喫せしめそれを志は退散せんと八百騎を五手は分濟の陣近く押寄
 喊を咄と上げれば清兵大い驚き須波敵こそ寄たりとてさしもの大軍戰慄し四面より鳥炮を打
 事連々たりされとも朱一貴近くも寄されば徒ら空を打のみよて一人も傷ものなく漸々緑
 引退き士卒の心任せ退散せしめ朱一貴の李勇杜君英以下の諸將は俱は落行をもひもよら
 ず神道道人飄然として出來し我卿等を待事久しとて十人の士を引て深山は入けるが遂は終る所
 を知す清軍のかゝるべしとの夢もしらす朱一貴如何ある謀略をかなすと總軍怖長のおもひを

懐き終夜金鼓を打鳴してぞ守りける

○ 藍廷珍入三臺府一安其民

斯て夏の夜のならひ早しら〜と明わたれば清軍少し心を安んじ敵の虚實を見定めて唯雄存亡の一戦せんと旨を定む藍廷珍先斥侯を出して敵勢の動靜を窺ひしむる程なく馳回て敢て敵一人もあく候と報す藍廷珍深く怪り明城究て偽の計多し決して洩斷すべからずとて其伏兵わらん事を恐れ諸將を令して不意を防ぐ備をあし金鼓を鳴して威を示し敵營近く到り見るも唯其近邊の藪を一面は截悉く火繩一竹の切口は狭みたるばかりよて敵兵一人もあひりければ衆軍始て其謀計あることを覺り惘果ていふ所をしらず藍廷珍齒を切て大い怒り我もひの外敵の詐謀は欺れて夜討を止り逆討を討洩り彼所の山上は明の旌旗を立たるも密兵の謀よて敵一人も有まじ往て見よとて斥侯を出して虚實を探しむるも果して紙旌紙旗のみされば立回て斯と報す藍廷珍頭を搔て後悔し急兵を分草を分つて捕んとす此時彼儒生大い謀て曰今朱一貴が黨分れ散て潜み隠るゝといへども將軍の兵士朱一貴以下の諸將を認まじ然るも今急追捕んとし玉の彼等外國へ走り却て大ひなる國の患をあしひべし渠等既兵勢を失ひ深山幽谷は潜む翼なき鳥の如し何事をか仕出し得べし殊に彼が黨民を却し財寶を掠取たれば百姓等惡み

憤り生ながら其肉を喰ん事を欲すれば久しからせして捕へ進すべし如何搜し雷玉ふとも民を安んじ玉のさる内は朱一貴以下を捕へ玉ふ事難かるべし願くの先府中へ入て萬民を撫育し玉へ藍廷珍をもとて儒生が諫は從ひ廿三日臺灣府へ入たるも百姓皆箠食壺漿して官軍を迎へけり藍廷珍此日府中へ入て大い酒宴を開り諸道の諸將を會せ因て百姓皆悦び刀鼓を唱る聲天地を動すばかり之中も血氣の者ども朱一貴等を捕へ恩賞を得んと搜し需れとも曾て其踪跡を探り得ず藍廷珍の書監を厦門へ遣して提軍を報じければ提督施世驤の水路より提を奏す督院羅滿はしめて提軍を聞て喜よ堪を撫院と俱書を朝廷へ奉つて此よしを奏す施世驤は藍廷珍と講して生捕の者を引出して市は斬又の厦門へ送ると稱て數千人を海底に沈め殺す督院羅滿是を聞て大い驚き罪の其暴虐の巨魁あり民の時の勢ひ口事を得てして渠等も隨逐せしのみ何を刑するも堪ん況や今皇帝寬仁をもつて萬民を子の如く慈み玉ふ然るも奈何ぞ其衆人を悉く誅殺するやと急臺灣へ使者を馳て生捕の者として濫殺戮すべから能その罪を糾明し已事を得ざる者ばかりを刑せべしと云遣しけり此總督覺羅滿の文武の全才智勇兼備し兵を調へ餉を貯へ君も忠を竭し民を撫育しければ世舉て其徳よあつら従がひけり

○ 臺灣地震疫癘流行

人多き時、天は勝天定つて人、勝とかや朱一貴の大義も一旦の勢に乗して天は勝しかども時運熟せずして天は制せられ國姓爺仙翁は隨ひて山林の跡を暗しければ臺地已に平定し其旨を朝廷へ奏しけるより皇帝大いに喜び玉ひ群臣を集めて功勞を議し諸將は恩賞を賜中より淡水營の陳策の獨よく守禦の術を盡し敵を敗りて城を堅固に保たるを以て殊に御感涙からず臺海鎮に陞進せしめ玉ふ時は總督覺羅滿の室太夫人汪氏省の地にて卒す是に依て朝廷へ奏し哀を舉息中おれ、事を謝す厦の民是を聞て市を罷巷に哭し轅門の外より來り集り痛み歎て歸さるること三日三夜も及びぬ因て撫都院氏の歎きを朝廷へ奏したりければ朝廷より覺羅滿へ詔を下され思中ありとも政務を治へきよしを命せらる是に因て臺海厦門始て平あり然れども尙人心危ぶみ疑ふて安からず時また陸の提督穆卒す已に死するも望で表を遺し督憲が臺海を靖るの功を奏す抑臺地の兵亂より以來官兵民賊夥しく死亡し瘡痍目も滿文武の諸將俱に缺たり督憲し自ら興泉道の陶汀州府の高澤建寧府の迪列孫魯海澄縣の劉光泗漳浦縣の汪紳文等を委ねて臺海道の府々縣々を守しむ朝廷は督臣提臣を集め文武の缺たるを其人を撰で任せらる茲に提督施世驍はいまだ師を班さずして臺海に居けるが臺地大いに疫厲行り軍中悉く疾て大半死すそれさへあるも八月十三日の夜また大いに地震し疾風怒雨砂を卷大石を飛ばし巨木根ながら拔海中より

怪き波湧揚て海邊の民家數を盡して毀れ漂ひ湊よある官軍の船四百余艘人馬と俱に粉の如くになり陸地は水高き事一丈余り官舎民家風雨の爲に壞壞られ上下皆雨を冒して水中に往來し思ひ悲む事甚だし提督施世驍も怪き疾を得て晝夜煩悶し遂に九月十五日に狂死を其餘參將王萬化林政遊擊許華も皆疫癘を病て前後に死し淡水營の陳策も亦同く天行病に染十二月二日に死す是等を始として今般の軍事に預りし官軍悉く疫死し地震日夜止さざりければ是直事よあらず施世驍が多くを民を刑殺海に沈めたる惡靈のあす業あらめとて陸に祭り海に祭り其靈を慰けれは漸々地變鎮まり天行病止けり茲に於て萬民初めて心を安んじ業を樂み泰平を唱覺羅滿臺海の地變靖りしを悦び廣東の提督姚を遣して厦軍の督とあし澳鎮の藍廷珍を臺海の鎮とあす然せしより後の鯨鯢迹をいらひ海道濶を安んじ太平無敵の昔に皈しけるを芽出度かりける

國姓爺忠義傳 大尾

明治十九年十月二十一日出版御届
同 年十二月 出 板

定價一圓五十錢

編輯兼
出板人

東京府平民

西村富次郎

京橋區幸町七番地
高塚兼太郎方同居

發兌元

日本橋區本材木町二丁目

自由閣

同

同區橫山町三丁目

辻岡文助

府 兔 屋 望 月 誠

京橋區南鍋町一丁目
日本橋區橋町四丁目

下 鶴聲社 森 仙 吉

同區通四丁目

大 春陽堂 和田 篤太郎

同區本石町三丁目

賣 明三閣 覺張 榮三郎

同區藥研堀町

捌 文苑閣 鈴木喜右衛門

大坂 前川善兵衛

此郵庄助

田中治兵衛

西京 內山改進堂

